

温泉地域研究

第9号

2007年 9月

論文

- 宿泊施設の経営努力による経営改善効果 金井雅之 (1)
 共同湯の原点「惣湯」としての長野県野沢・渋温泉「大湯」の成立
 石川理夫 (11)
 別府市鉄輪温泉における地域整備事業の意義 中山昭則 (23)
 中国大連市安波温泉の開発過程 于 航 (31)

研究ノート

- 高齢社会における温泉療法の役割 小國隆男 (41)
 鎌倉市における温泉地の地域的変遷Ⅱ 進藤和子 (47)

基調講演

- 蔵王の自然と温泉 岡崎傳三郎 (53)

シンポジウム

- 蔵王温泉の活性化 (55)

書評

- 日本温泉協会編：『温泉 歴史と未来』 長島秀行 (59)
 松田忠徳著：『江戸の温泉学』 石川理夫 (60)

- 学会記事 (61)

日本温泉地域学会

宿泊施設の経営努力による経営改善効果

The Effect of Management Efforts on the Improvement of Accommodations

金井 雅之*
Masayuki KANAI

キーワード：温泉地 (spa)・宿泊施設 (accommodations)・経営努力 (management efforts)
改善 (improvement)

1 はじめに

本稿では、われわれの研究グループ¹⁾が今年初めに実施した「温泉地域の現状と取組みについての学術調査」のデータをもとに、宿泊施設の経営改善に寄与する基礎的要因を分析する。

旅館やホテルといった宿泊施設の経営状況は、温泉地全体の活性化やまちづくりと密接な関係をもっている。宿泊業が温泉地における最も主要な産業セクターであり、その人材や旅館組合のような業界団体がまちづくりのリーダーとしての役割を期待されている以上、その経営が振るわなければ温泉地全体で将来構想を立て積極的な戦略を打ち出していくことも難しいからである。

ところで、一般に宿泊施設の経営状況は非常に多種多様かつ複雑な要因によって左右される。まずマクロな要因としては、バブル崩壊後の長期の経済低迷や観光需要全体の構造変化といったすべての温泉地に共通するものや、大都市圏からの交通アクセスや他の観光資源の有無、まちづくりへの取組み状況といった温泉地ごとに異なるものが考えられる。またミクロな要因としては、個々の宿泊施設の経営理念・目標や経営改善に向けての具体的な努力といった通常を経営学的な要因に加えて、経営者の温泉地内外もしくは業界内外での人脈や人間関係といった社会ネット

ワーク的な要因も考えられる。

われわれの研究グループの主要な問題関心は最後のネットワーク要因であるが、ここではネットワーク固有の効果を切り分けるための予備的な分析として、おもにミクロの経営学的要因に焦点をあわせた分析をおこなうことにする。

経営やマーケティングの観点からの宿泊施設経営の現状と課題については、さまざまな研究や提言が蓄積されている。たとえば、21世紀の旅館ホテルを考える研究会(2002)²⁾では、団体客から個人客へのシフトという時代の潮流を前提に、選択と集約というマーケティングの基本を強調しつつ、顧客の多様なニーズへのきめ細かい対応や室料のみで利益が出る体質への改善、さらには泊食分離などの柔軟な料金体系の採用等を提案している。

また、温泉地における宿泊施設の在り方という観点からは、山村(1998)³⁾等をはじめとして、短期滞在の団体客向けの温泉地から、療養・保養やリラックスを目的とした個人や家族連れ向けの保養型温泉地への転換が唱えられている。

ここでは、こうした提言的な方向性が宿泊施設の経営改善にどの程度実効性をもちうるかを、大規模サンプリング調査のデータによって検証することを主たる目的としたい。

* 山形大学地域教育文化学部 (Yamagata University)

2 調査の方法と回収状況

調査の概要と回収状況等は表1・表2のとおりである。計画標本数 1,516 施設に対して

779 施設から有効回答を回収できた。有効回収率は 51.4% で、県別に大きな違いはなかった⁴⁾。

表1 調査の概要 (2002年)

調査実施時期	2007年1月23日～2月20日
調査方式	自計式の質問紙調査。配布は旅館組合経由もしくは宿泊施設に直接郵送でおこない、回収はすべて返信用封筒による郵送でおこなった。
調査対象	長野・山形・群馬・新潟の各県で、旅館組合への加盟宿泊施設数が10施設以上の温泉地において、旅館組合に加盟するすべての宿泊施設。なお、旅館組合が複数存在する温泉地では、すべての旅館組合の加盟宿泊施設を対象とした。
設問数	44項目
調査実施機関	(社)中央調査社

表2 標本数と回収率

	全体	長野	山形	群馬	新潟
対象温泉地数	56	21	12	9	14
対象宿泊施設数	1,516	597	224	329	365
有効回収数	779	312	117	169	181
有効回収率	51.4%	52.3	52.5	51.4	49.6

3 分析モデルと使用する変数

本稿での分析の目的は、ミクロの基本要因としての個々の宿泊施設の経営努力のあり方が、経営状況の良し悪しにどのような影響を与えるかを探ることである。前述したマクロ

な要因やネットワーク要因は、今回の分析では考慮しない。

ただし、一口に宿泊施設といっても、家族経営の小規模な湯治宿からチェーン展開する温泉ホテルまで、規模や経営形態といった属性はさまざまであるから、こうした要因は最低限統制しなければならない。

そこで本稿では、表3のようなモデルを仮定した重回帰分析をおこなうこととする。なお、具体的な設問の回答選択肢等については、付録として末尾に示した。

表3 分析モデル

	理論概念	具体的な設問
従属変数	経営状況の変化	(ア) 5年前と比べた客数の変化 (イ) 5年前と比べた売上の変化
独立変数	経営努力 (具体的取組み)	(ウ) 5年間におこなった増客のための試み (エ) 他温泉地へ視察経験あり (オ) 外部講師招待経験あり
	経営努力 (経営理念と目標)	(カ) セールスポイント (キ) 将来的に希望する客層
統制変数	規模	(ク) 収容人数
	価格帯	(ケ) 標準宿泊料金
	現在の客層	(コ) 観光日帰り型 (サ) リピーター多い
	経営形態	(シ) 組織経営 (ス) グループ経営
	人的資源	(セ) 旦那の年齢高い (ソ) 後継者あり

①従属変数

今回の分析で明らかにしたいのは、宿泊施設の経営努力が経営状況にどのような影響を与えるかである。ところで、経営努力とは経営状況の改善を目指して不断におこなうもので

あるから、説明したいのはある特定の時点で経営状況がどうであるか (たとえば経常利益がどれくらいか) というよりも、一定の期間における経営努力の結果として経営状況がどう変わったか (よくなったか悪くなった

か) ということである。したがって、今回の調査では5年間という期間を設定した上で、その間におこなった経営努力と経営状況の変化を、ともに質問した。

なお、経営状況の変化を表す指標としてはいくつかのものが考えられるが、ここでは回答者の答えやすさを考慮して、客数と売上の増減を質問した。つまり、5年前と比べた(ア)客数および(イ)年間売上の変化である。

②独立変数

独立変数は経営努力であるが、これは理論的には2つの要素からなると考えられる。

1つは経営努力の原動力となるもので、その宿泊施設の経営理念や将来目標や計画といったものである。具体的には、(カ)その宿泊施設のセールスポイントと、(キ)将来の希望客層(観光型か滞在型か)について質問した。

もう1つは、そうした目標を実現し経営を改善するために、実際におこなった取り組みである。具体的には、(ウ)ここ5年間におこなった増客のための試み、(エ)ここ5年間に宿泊施設単独で他の温泉地へ研修や視察に行ったことがあるか、(オ)ここ5年間で宿泊施設単独で講習会などに外部講師を招いたことがあるか、を質問した。

③統制変数

統制変数としては、以下の要素を考える。

第1は宿泊施設の規模で、(ク)収容人数で判断する。

第2は価格帯で、(ケ)標準的な宿泊料金(1名あたりの1泊2食)で判断する。

第3は現在の客層で、(コ)どのような利用をする客が最も多いか(観光日帰り型か保養滞在型か)と、(サ)リピーターの多さで判断する。

第4は経営形態で、(シ)個人・家族経営か会社経営(組織経営)かと、(ス)旅館グループの一員であるかどうかで判断した。

第5は人的資源で、(セ)旦那(館主などいわゆる女将と対になる役割の人物)の年齢と、(ソ)後継者がすでに決まっているかどうかで判断した。

4 基本分析

(1) 記述統計

今回の分析に使用する変数の特徴を確認しておく⁹⁾。

①従属変数

5年前と比べた客数および売上の変化の度数分布は、表4のとおりである。どちらも最頻値は「1～2割位減った」であり、ついで「3～4割位減った」、「変わらない」の順になっている。

最も悪い「5割以上減った」から順に1点から7点まで得点化して平均を求めると、いずれも約3となり、「1～2割位減った」が平均にもなっていることがわかる。バブル崩壊後の経済環境の影響を受けて、宿泊施設の経営は基本的に悪化の傾向にあることがわかる。

表4 5年前と比べた客数・売上の変化の度数分布と基本統計量

得点	選択肢	客数の変化		売上の変化	
		度数	%	度数	%
1	5割以上減った	63	8.3	60	7.9
2	3～4割位減った	197	26.0	216	28.4
3	1～2割位減った	300	39.6	293	38.5
4	変わらない	106	14.0	95	12.5
5	1～2割位増えた	69	9.1	77	10.1
6	3～3割位増えた	17	2.2	14	1.8
7	5割以上増えた	6	0.8	6	0.8
有効回答数		758	100.0	761	100.0
平均		2.99		2.97	
標準偏差		1.19		1.19	

②従属変数と独立・統制変数との相関

では、こうした経営状況の変化は、今回の分析で用いる独立変数や統制変数とどのよう

な関係にあるだろうか。表5は2変数間の単純な相関係数をとったものである。

表5 客数と売上の増加との相関係数および各独立変数の選択比率

	選択比率 (%)	客数増	売上増
		相関係数	相関係数
収容人数		.152 ***	.134 ***
標準宿泊料金		.297 ***	.296 ***
観光日帰り型		.080 *	.080 *
リピーター多い		-.069 †	-.067 †
組織経営		.209 ***	.217 ***
グループ経営		.117 ***	.097 **
旦那の年齢高い		-.145 ***	-.134 ***
後継者あり		.152 ***	.145 ***
[増客] 施設の改築・改装	40.3	.227 ***	.267 ***
[増客] 接客サービスの向上	64.8	.169 ***	.140 ***
[増客] 旅行雑誌への広告掲載	31.2	.129 ***	.119 ***
[増客] インターネットによる情報発信	80.0	.197 ***	.194 ***
[増客] 常連客への挨拶状送付	48.4	-.080 *	-.071 †
[増客] 営業マンを雇っての営業活動	9.2	.042	-.002
[増客] 旅行代理店やJRなどとのバック旅行企画	19.6	.117 ***	.091 *
他温泉地へ視察経験あり	61.7	.165 ***	.161 ***
外部講師招待経験あり	13.5	.201 ***	.197 ***
[SP] 露天風呂	27.3	.148 ***	.128 ***
[SP] 源泉かけ流し	57.9	.083 *	.099 **
[SP] 温泉地内での立地のよさ	35.2	.089 *	.060 †
[SP] お客様へのきめ細かい対応	56.4	.117 ***	.078 *
[SP] 風情のある建物	20.3	.113 **	.130 ***
[SP] 近代的で快適な設備	10.3	.066 †	.112 **
[SP] 充実したみやげ売場・娯楽施設	1.7	.027	.055
[SP] 地元素材にこだわった食事	58.6	.051	.039
[SP] 豪華な食事	6.8	-.030	-.025
将来も観光日帰り型	46.8	.064 †	.043

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, † p < .1.

客数や売上の増加と相関が高いおもな変数は

- ・標準宿泊料金
- ・組織経営
- ・[増客] 施設の改築・改装
- ・外部講師招待経験あり
- ・[増客] インターネットによる情報発信

などであり、相関係数の値はいずれも正である。つまり、たとえば標準宿泊料金が高いほど、施設の改築・改装をしたほど、5年前と比べての客数や売上の落ち込みが相対的に少

ない（施設によっては増加）傾向がある。

なお、今回使用する独立変数はすべて選択か非選択かの2値をとるものなので、参考までに各変数の選択比率（その設問での無回答者を除いた有効回答総数に対する選択者の比率）を同じく表5に掲載した。比率が非常に低いもの（たとえば「[SP] 充実したみやげ売場・娯楽施設」や「[SP] 豪華な食事」）は、後の回帰分析で注意が必要である。

③統制変数相互の相関

今回の分析で使用する8個の統制変数相互の相関を表6に示す。

表6 統制変数間の相関係数と有意確率

	1	2	3	4	5	6	7	8
1 収容人数		.000	.000	.000	.000	.000	.012	.000
2 標準宿泊料金	.375		.000	.000	.000	.468	.010	.000
3 観光日帰り型	.190	.191		.000	.001	.565	.129	.343
4 リピーター多い	-.279	-.244	-.292		.000	.000	.207	.996
5 組織経営	.517	.458	.119	-.220		.000	.006	.000
6 グループ経営	.161	.027	.021	-.130	.131		.026	.870
7 旦那の年齢高い	-.096	-.100	-.058	.048	-.105	-.086		.000
8 後継者あり	.164	.229	.035	.000	.146	-.006	.216	

下三角は相関係数。上三角は有意確率。網掛けは5%水準で有意。

第一に、「1 収容人数」「2 標準宿泊料金」「5 組織経営」は相互に相関が高い。因果の方向性はともかくとして、規模が大きい宿泊施設は家族経営ではなく組織経営であることが多く、また標準宿泊料金も高めになる傾向があるということである。

第二に、「4 リピーターの多さ」と「1 収容人数」「2 標準宿泊料金」「5 組織経営」および「3 観光日帰り型」との間には負の相関が存在する。つまり、直上で指摘した規模が大きくて標準宿泊料金が高く組織経営である

施設では、リピーターは相対的に少ない。また、1泊程度の宿泊客が主である観光日帰り型の施設でも、リピーターの数は相対的に少ない。

(2) 回帰分析

以上の予備考察を踏まえて、客数および売上の変化を従属変数とする重回帰分析をおこなった。結果は表7のとおりである。なお、表7には有意確率が10%以下の変数のみ記載したが、分析自体は表5に示したすべての変数を使っておこなった(以下の分析でも同様)。

表7 全データによる重回帰分析

独立変数	従属変数	
	客数	売上
標準宿泊料金	.191 ***	.181 ***
旦那の年齢高い	-.114 **	-.105 **
[増客] 施設の改築・改装	.119 **	.167 ***
[増客] 接客サービスの向上	.131 ***	.101 *
[増客] インターネットによる情報発信	.088 *	.082 *
[増客] 常連客への挨拶状送付	-.066 †	-.064 †
[増客] 営業マンを雇っての営業活動	-.032	-.081 †
外部講師招待経験あり	.058	.083 †
[SP] 源泉かけ流し	.098 *	.121 **
[SP] 豪華な食事	-.081 *	-.079 *
調整済み決定係数	.171	.182

サンプル数 = 615。標準化偏回帰係数。p < .1の変数のみ記載。

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, † p < .1。

第一に、表5で従属変数と相関が高かった変数のうち

- ・標準宿泊料金
- ・[増客] 施設の改築・改装
- ・[増客] インターネットによる情報発信

は有意な正の効果をもつが、

- ・組織経営
- ・外部講師招待経験あり

は有意な効果をもたなくなっている。特に「組織経営」は10%水準でも効果をもたなくなっているが、予備分析によれば組織経営である

かどうかは経営状況に大きな影響を与えそうな要因であっただけに、次節の属性別分析で再度検討する。

第二に、上記以外に従属変数に有意な効果をもつ変数としては、

- ・〔増客〕接客サービスの向上
- ・〔SP〕源泉かけ流し

が正に寄与し、

- ・旦那の年齢高い

が負に寄与する。ちなみにこれらはすべて従属変数との2変数相関も高かったものである。

5 宿泊施設の属性ごとにグループ分けした分析

以上の分析は、すべての宿泊施設を対象におこなったものである。

ところで本稿の目的は、宿泊施設がどういう経営努力をすると経営状況の改善に結びつくかのメカニズムを明らかにすることであるが、先に言及したように宿泊施設の属性すなわち経営環境は多種多様である。先ほどの分

析では、この経営環境という要因を統制変数としてモデルに組み込んだが、そもそも経営環境の異なる宿泊施設では経営努力と経営改善との因果メカニズム自体が異なる可能性がある。たとえば、収容人数の少ない小規模な宿泊施設とそれが多く大規模な施設とでは、経営改善に効果的なプロモーション活動が異なるかもしれない。そこで以下では、規模や価格帯や経営形態といった属性ごとに宿泊施設を分けて分析をおこなうことにする。

3節で説明したように、本稿で考慮する統制変数、すなわち宿泊施設の属性は、規模・価格帯・現在の客層・経営形態・人的資源の5つである。このうち、「人的資源」はグループ分けがむずかしく、「現在の客層」は観光日帰り型に対して滞在型がサンプル数が少なく有意な結果が出なかったため、残りの3つの属性のそれぞれについて宿泊施設を2つのグループに分割し（表8）、客数増と売上増を従属変数とする重回帰分析をおこなった。

表8 属性とグループ分けの規準

属性	グループ	基準
規模	小規模	収容人数が50人以下
	大規模	収容人数が51人以上
価格帯	低価格	標準宿泊料金が1万円未満
	高価格	標準宿泊料金が1万円以上
経営形態	非組織 組織	「個人経営・家族経営」のみを選択 それ以外（無回答を除く）

まず、客数増を従属変数とする分析結果を表9に示す。

第一に、増客への試みのうち、

- ・施設の改築・改装

は、大規模・高価格・組織経営（以下「大高組」）で有意な正の効果をもつが、小規模・低価格・非組織経営（以下「小低非」）では有意な効果をもたないのに対し、

- ・接客サービスの向上
- ・インターネットによる情報発信

は逆に、「小低非」で有意な正の効果をもつが、「大高組」では有意な効果をもたない。これは、「大高組」の宿泊施設と「小低非」の宿泊施設では、客数増への有効なプロモーション手段が異なることを示唆する。

第二に、

- ・旦那の年齢高い

は「大高組」で有意な負の効果をもつが、「小低非」では有意な効果をもたない。ちなみに、前節で確認したように「旦那の年齢」は宿泊

表9 客数増を従属変数とする属性別重回帰分析

独立変数	全体	規模		価格帯		経営形態	
		小	大	低	高	非	組
標準宿泊料金	-.191	.204	(.132)			.179	.159
リピーター多い	.031	-.052	.148	.042	.039	-.047	.097
旦那の年齢高い	-.114	-.089	-.133	-.082	-.120	-.060	-.144
後継者あり	.048	(.099)	-.035	.052	.013	.011	.042
施設の改築・改装	.119	.068	.222	.084	.148	.093	.138
接客サービスの向上	.131	.210	.048	.209	.080	.223	.056
インターネットによる情報発信	.088	.155	-.059	.226	-.031	(.114)	.046
常連客への挨拶状	(-.066)	-.073	-.064	.017	-.151	-.054	-.085
バック旅行企画	.049	.010	.099	(.110)	.036	.085	.028
他温泉地へ視察	.019	(-.090)	.177	.012	.025	-.016	.057
外部講師招待	.058	.083	.093	.002	.129	-.017	.105
源泉かけ流し	.098	.047	.164	.133	.067	.111	.107
お客様へのきめ細かい対応	.050	.050	.023	.018	.129	.043	.060
風情のある建物	.043	-.004	.075	-.049	(.095)	.007	.057
豪華な食事	-.081	(-.090)	(-.107)	-.070	-.115	-.028	-.128
将来も観光日帰り型	.044	-.058	.171	.069	.045	.005	.076
サンプル数	615	344	271	292	323	249	366
調整済み決定係数	.171	.199	.192	.067	.110	.092	.139

標準化偏回帰係数。p<.1のみ。従属変数はすべて客数増。
網掛けは5%以下で有意。網掛けかつ括弧つきは10%有意。

施設全体では経営状況の改善に有意な負の効果をもっている。この意味については、経営者が高齢化し後継者もいないような場合には事業が縮小傾向に向かうからという解釈と、経営者が若いほど最新の経営知識を持ちやすいため積極的かつ有効な経営ができるからという解釈が考えられるが、前者が「小低非」、後者が「大高組」に親近性をもつことより、後者の解釈の方が妥当性が高い。

第三に

・将来も観光日帰り型

は全体では有意な効果をもたなかったが、大規模施設でのみ有意な正の効果が見られた。効果が正であるとは、将来的に滞在型に転換しようとするよりも観光日帰り型であり続けようとする施設の方が客数増につながるといことであるから、保養滞在型への転換という方向性とは異なることに注意が必要である。

同様に、売上増を従属変数として属性ごとに分析した結果が表10である。全体的な

傾向は客数増の場合とそれほど異ならないので、ここでは客数と異なる部分を2点指摘する。

第一に、「小低非」の施設に関して

・施設の改築・改装

は客数では有意な効果をもたなかったが、売上では有意な正の効果をもっている。これは、「施設の改築・改装」は「小低非」施設でも経営改善につながらないわけではないが、客数の増加という形では効果が表れないという意味に解釈できる。こうした施設で「施設の改築・改装」という場合は、収容人数の増加をとまなう増改築よりも既存の施設の改装を意味することが多いのかもしれない。

第二に、

・常連客への挨拶状

は、客数では高価格施設でのみ有意な負の効果をもっていたが、売上では「大高組」全体で有意な負の効果をもっている。常連客に挨拶状を送ることが経営状況と負の関連をもつことは一見不思議に思われる。可能性として

表 10 売上増を従属変数とする属性別重回帰分析

独立変数	全体	規模		価格帯		経営形態	
		小	大	低	高	非	組
標準宿泊料金	.181	.168	.138			.172	.151
旦那の年齢高い	-.105	(-.099)	-.093	-.035	-.133	-.076	-.123
施設の改築・改装	.167	.125	.262	.120	.212	.168	.170
接客サービスの向上	.101	.177	.016	.161	.045	.217	.001
旅行雑誌広告	.020	.085	-.040	-.068	(.110)	.012	.059
インターネットによる情報発信	.082	.147	-.068	.236	-.043	(.121)	.021
常連客への挨拶状	(-.064)	-.022	-.142	.052	-.177	.007	-.122
営業マン	(-.081)	-.055	-.060	.022	-.128	-.039	-.086
他温泉地へ視察	.019	-.074	.156	-.017	.063	-.033	.064
外部講師招待	(.083)	.119	.092	.040	.148	.012	.120
源泉かけ流し	.121	.081	.163	.164	.083	(.119)	.138
温泉地内での立地	-.044	-.003	(-.114)	-.064	-.044	.011	-.067
お客様へのきめ細かい対応	.022	-.002	.049	-.035	(.110)	-.041	.088
近代的で快適な設備	.035	.035	.049	(.109)	.022	.060	.032
豪華な食事	-.079	-.071	-.129	-.081	(-.093)	-.028	-.130
将来も観光日帰り型 調整済み決定係数	615 .182	343 .195	272 .195	291 .092	324 .151	248 .124	367 .153

(注) 標準化偏回帰係数。p<.1のみ。従属変数はすべて売上増。
網掛けは5%以下で有意。網掛けかつ括弧つきは10%有意。

は、営業が既存客重視になって新規顧客の開拓がおろそかになりやすい、顧客データが適切に更新されていないため常連客対策としても有効でない、等の解釈も考えられるが、売上が減ってきたので危機感から挨拶状を送るようになったという逆の因果の可能性も捨てきれない。「大高組」のみで効くという今回の分析結果からはこれ以上の考察は難しいが、今後の課題である。

6 まとめと今後の課題

今回の分析で使用した独立変数のうち、経営状況の改善に全体として有意な効果をもっていたのは「施設の改築・改装」、「接客サービスの向上」、「インターネットによる情報発信」、「源泉かけ流し」である。

このうち、「施設の改築・改装」は大規模・高価格・組織経営の宿泊施設（「大高組」）で非常に強い効果をもたらすものであった。経営状況が上向きだからこうした設備投資ができるという逆の因果関係の可能性も含め

て、こうしたハード面での投資は経営状況と強いポジティブフィードバック関係をもっていることがうかがえる。

一方、「接客サービスの向上」と「インターネットによる情報発信」は、実際には「小低非」でのみ有意な効果をもっていた。こうしたきめ細かなソフト面での経営努力は、小規模な家族経営の施設で重要であることがわかる。

こうした分析を踏まえて、1節で言及した先行研究との関連を考察しよう。まず、マーケティング上の提言に関して。今回の調査では必ずしもそうした提言に沿った形で具体的な取組みを測定できなかったので詳しい検証はできないが、そこで触れられていなかったハードへの投資は、大前提の基礎的条件として忘れてはならないことは指摘できる。

つぎに、観光型から保養・滞在型へという温泉地のあり方に関する提言に関して。まず今回のサンプルにはそもそも療養・保養型の宿泊施設が多くなく（20%程度）、観光型と比較するに足る十分な分析はできたとはいえないが、2変数相関分析で観光日帰り型は客

数増にも売上増にも有意な正の相関をもって
いたことからわかるように、少なくとも現状
では保養・滞在型は観光日帰り型よりも経営
状況が思わしくない。

ちなみに、客層については、現状では観光
型が70%、保養型が15%なのに対して、将
来的に目指したい客層は観光型43%、保養
型40%であり、保養型への転換を望んでい
る宿泊施設自体は少なくない。しかしながら、
属性別分析から明らかになったように、少な
くとも大規模施設については、将来的にも観
光日帰り型でよいと考える施設の方が（現状
での）経営状況はよいのである。これも、現
状でうまくいっているから将来も観光日帰り
型で、という逆の因果の可能性は否定できな
いが、少なくとも保養・滞在型への転換が当
面経営改善に寄与しているという積極的な証
拠は見つけられなかった。

最後に今後の課題を整理しよう。

第一に、今回の分析では経営目標や経営努
力を独立変数（原因）、客数や売上の増加を
従属変数（結果）として分析をおこなった。
先ほどから指摘しているように、これらは本
来因果関係が複雑に絡み合っていて、構造は
単純ではない。よって、本来は共分散構造分
析等のモデルを用いて相互の因果関係の統計
的妥当性を比較検証すべきであるが、今回は
独立変数が基本的にすべて2値変数であった
こともあって、そこまで手が回らなかった。
今後、コレスポンデンス分析等を援用して独
立変数を量的変数に変換することが必要にな
るだろう。

第二に、今回は基礎分析としてミクロの
経営学的要因のみに絞って分析をおこなった
が、宿泊施設の経営状況の差を正確に説明す
るモデルを作成するためには、マクロな要因
やネットワーク要因も考慮に入れる必要があ
る。マクロな要因のうち、少なくとも温泉地
ごとの立地や取組みに関する要因は、大きな
効果をもっていることが予想される。こうし
たグループ（温泉地）ごとに共通な要因を考

慮するモデルとして、マルチレベル分析等も
おこなっていく必要があるだろう。

【付記】

本稿は、平成17～19年度科学研究費補助金基
盤研究B「市民活動の活性化支援の調査研究—秩
序問題点アプローチ」（研究代表者：籠谷和弘）お
よび平成19～21年度科学研究費補助金若手研究
B「ソーシャル・キャピタルがまちづくり活動を
活性化する条件に関する実証的研究」（研究代表者：
金井雅之）の助成を受けており、その研究成果の
一部である。

注・参考文献

- 1) 全国の大学に在籍する中堅・若手の研究者で、
おもに社会学を専門としている。平成17～
19年度科学研究費補助金基盤研究(B)「市
民活動の活性化支援の調査研究：秩序問題
的アプローチ」（研究代表者：籠谷和弘）の
一環としての研究である。
- 2) 21世紀の旅館ホテルを考える研究会(2002):
『21世紀・旅館経営の課題——10年後を生
き残るために』財団法人日本交通公社。
- 3) 山村順次(1998)『新版 日本の温泉地』日
本温泉協会。239頁。
- 4) 51.4%という回収率は、昨今の調査環境の急
激な悪化を考えると、郵送調査としてはか
なり優れたものであると考えられる。宿泊
施設を対象に同時期に実施された他の調査
としては、たとえばJTBF宿泊客動向調査
(2007年1月～2月)が回収率28.3%、観
光経済新聞社が国際観光旅館連盟の会員旅
館を対象におこなった経営状況調査(2006
年11月)が16.3%などとなっている。一
方、観光立国推進基本法の制定にともない、
国の指定統計としての本格調査が開始され
た国土交通省の宿泊旅行統計調査(2007年
1月～3月)は回収率が71.7%と高率だが、
この調査は指定統計として必要最低限のこ
としか質問しておらず、今回のような分析
目的にはそぐわない上、従業員数10人
以上の宿泊施設を対象としているため、家族
経営も多い小規模な温泉地のデータは除外
されている。
- 5) 本稿で使用する設問を含めた、今回の調査の
主要な質問項目の単純集計結果は、「温泉
地域の現状と取組みについての学術調査
——宿泊施設調査 速報」として公開さ
れている (<http://home.kanto-gakuin.ac.jp/~kkagoya/opj/>)。

付録 今回の分析に使用したおもな設問と回答選択肢

※ 調査票の実物は <http://home.kanto-gakuin.ac.jp/~kkagoya/opj/> に掲載。

設問項目	回答選択肢
(ア) 5年前と比べた客数の変化	「5割以上増えた」「3～4割増えた」「1～2割増えた」「変わらない」「1～2割減った」「3～4割減った」「5割以上減った」から1つを選択
(イ) 5年前と比べた売上の変化	「5割以上増えた」「3～4割増えた」「1～2割増えた」「変わらない」「1～2割減った」「3～4割減った」「5割以上減った」から1つを選択
(ウ) 5年間におこなった増客のための試み	つぎの7項目からいくつでも選択。「1 施設の改築・改装」「2 接客サービスの向上」「3 旅行雑誌への広告掲載」「4 インターネットによる情報発信」「5 常連客への挨拶状送付」「6 営業マンを雇っての営業活動」「7 旅行代理店やJRなどとのバック旅行企画」
(カ) セールスポイント	つぎの9項目からいくつでも選択。「1 露天風呂」「2 源泉かけ流し」「3 温泉地内での立地のよさ」「4 お客様へのきめ細かい対応」「5 風情のある建物」「6 近代的で快適な設備」「7 充実したみやげ売場・娯楽施設」「8 地元素材にこだわった食事」「9 豪華な食事」
(キ) 将来的に希望する客層	「療養型(湯治目的)」「保養・休養型(2～3泊の宿泊)」「観光型(1～2泊の宿泊)」「日帰り利用」から1つを選択※分析では、前2者を「滞在型」、後2者を「観光日帰り型」とした。
(ク) 収容人数	「20人以下」「21～50人」「51～100人」「101～200人」「201人以上」から1つを選択
(ケ) 標準宿泊料金	「1万円未満」「1万円以上1万5千円未満」「1万5千円以上2万円未満」「2万円以上2万5千円未満」「2万5千円以上」のうちから1つを選択※分析では、後3者をまとめて「1万5千円以上」とした。
(コ) 観光日帰り型	(キ)と同じ
(サ) リピーター多い	「ほとんど全員」「半分以上」「半分くらい」「半分以下」「ほとんどいない」から1つを選択
(シ) 組織経営	「個人経営・家族経営」「株式会社・有限会社」「その他」から1つを選択※分析では、「個人経営・家族経営」のみに○を付けている回答を「非組織経営」、それ以外を「組織経営」とした。
(セ) 旦那の年齢高い	「10代」「20代」「30代」「40代」「50代」「60代」「70代」「80以上」から1つを選択

共同湯の原点「惣湯」としての長野県野沢・渋温泉「大湯」の成立

The Establishment of the Community Bath “OHYU” Based on the Historical Community Bath “SOYU” in Nozawa and Shibu Spas, Nagano Prefecture

石川理夫*
Michio ISHIKAWA

キーワード：共同湯 (community bath)・惣湯 (SOYU)・大湯 (OHYU)
惣村持 (historical community ownership)・野沢温泉 (Nozawa spa)
渋温泉 (Shibu spa)

1 はじめに

先の拙稿「石川県山中温泉『総湯』の成立過程と〈総有〉の歴史的考察」¹⁾で、日本の伝統的共同湯の名称として歴史的・象徴的である「総湯」と「大湯」の分布図を、共同湯(坪)の始源にかかわる名称である「惣湯」がかつて存在した温泉地を加えて示した。

その中で、惣湯から今日ある総湯・大湯まですべて北陸以東の東日本に集中していることと、東日本でも加賀温泉郷のように共同湯を育んだ伝統的地域社会に一定の歴史的成立要因、すなわち惣村的惣有(総有)の発達が考えられること、それに惣湯と大湯には連続性、重なりが見られることを示唆した²⁾。

日本の温泉文化にも、東西を隔てるフォッサマグナが、あたかも存在するかのような。

これまでの調査では、伝統的共同湯を数多く持ちながら、西日本の歴史のある温泉地は、ことごとく共同湯名称に総湯はもとより、大湯の存在を見だし得ない。これは惣村が発達した畿内の著名な古湯、和歌山県の湯の峰温泉や湯崎・鉛山温泉(現白浜温泉)、兵庫県の有馬・城崎・湯村温泉など然りである。また、古風土記や万葉の時代から地域に根づいた共同湯の宝庫である九州は、佐賀県の武雄・嬉野温泉、福岡県二日市温泉、大分県別

府温泉郷をはじめ中九州でも軒並み同様である。

東西エリアによる共同湯名称の際だつ差異に、温泉地域史にかかわる歴史的意味や根拠が存するかどうかは、今後の研究に委ねたい。

その前に、本稿は共同湯を考察する際に欠かせないにもかかわらず対象化されてきたとは言えない惣湯研究の一環として、後者のほうの歴史的な惣湯と大湯の連続性と重なりについて、該当する温泉地の具体的かつ歴史的な検証を行うことが目的である。本稿ではその際、先に言及していた長野県の野沢温泉に、湯田中渋温泉郷の渋温泉と安代温泉を新たに加えて考察したい。

2 野沢温泉における入浴利用と湯坪

(1) 温泉集落「野澤之湯」の成立

長野県下高井郡野沢温泉村は、1984(昭和59)年に地下水資源保全条例を制定している。同条例の目的は、野沢温泉の泉源地として特別保全地区に指定した豊郷地区から豊かに湧き出る高温の源泉と清涼な地下湧水を、無秩序な井戸掘削・採取行為から共に保護することにあつた。北西に千曲川の流れ、南東に標高1,650mの毛無山にはさまれた麓の傾斜地に開けた豊郷地区の人々は、今も豊富に自然湧出する温泉と湧水を周囲の山を覆

* 温泉評論家 (Critic of Hot Springs)

うブナ自然林が涵養する恵みと昔から認識し、山と森と水と温泉を共同で大切に守り育ててきた。

長い年月を経ても尽きない自然湧出源から見て、野沢温泉が開かれたのは相当古くまでさかのぼれるが、13世紀以降の鎌倉時代に「志久見郷湯山（村・庄）」として、信濃国人衆の一人で高井郡志久見郷の地頭職にあった市河氏が残した文書に記されているのが、最も古い記録と考えられている³⁾。

「湯山」は温泉の所在を表す一般名にとどまる。室町時代の1452（宝徳4）年の『諏訪御符礼之古書』に、当地一帯の「毛見三ヶ村本栖」にかかわる野沢氏（野沢三河守朝正）の名前が登場し、北信地方（高井・水内郡）の豪族・高梨政盛による1497（明応6）年の「知行宛行状」に「計見郷之内本栖知行之所野沢分之事…」とあることから⁴⁾、本栖氏に代わり、この頃には野沢氏を生んだ野沢という地名が毛（計）見郷内にあったようである。

戦国時代に、北信地方は甲斐武田氏と越後長尾（上杉）氏の覇権争いの舞台となった。第3回川中島合戦を前に1557（弘治3）年5月10日、長尾景虎（上杉謙信）が戦勝祈願に奉納した願文（小菅神社蔵）⁵⁾には、「北有温泉、山岳惟隔、洗群迷於平日」とあり、野沢温泉を指して「群迷を平日に洗う」と湯治場としてふだん賑わう様子を記している。

武田晴信（信玄）も、市河藤若に宛てた同年6月23日付書状で、「注進の状披見す。よつて景虎野澤之湯に至り陣を進め、その地へ取りかかるべき模様…なかならず野澤在陣のみぎり…湯本より注進次第当地へ…」⁶⁾と、はっきり「野澤之湯」と記している。衆知のとおり、以上からも「湯本」で市河氏が陣を置いていた野沢温泉が、すでに温泉場・温泉集落として確立していたことは明らかである。

（2）野沢の湯坪、共同湯の初見

それでは、野沢温泉では入浴利用のための湯坪はどのように形成されたのであろうか。

輪郭が浮かび上がるのは江戸時代に入ってからであり、野沢温泉の地を所領とした飯山藩の藩主と一般湯治客という二者の側面から湯坪、入浴の場の形成を考えたい。

前者では、1639（寛永16）年に遠州掛川から飯山藩主に移封された松平遠江守忠親以降、1706（宝永3）年に転封されるまで三代68年に及ぶ間、「奉行を野沢の地に派遣して浴場設備に改良を加え、仮屋敷を設け旅館を建て毎年避暑入浴を試」⁷⁾していた。

後者では、上越・頸城地方と野沢方面を結ぶ要路の関田峠の関所、関田口留番所の通行手形から、越後からも湯治目的の往来が盛んであったことが見てとれる⁸⁾。

前者の飯山藩主と後者の一般湯治客が利用した湯坪は、どのような名称であり、その場所はどこにあったのか。それが見える資料として、野沢の温泉寺にあたる健命寺境内にあり、薬師如来像を本尊とする薬師堂の縁起を野沢組惣代がまとめた『野沢温泉薬師堂縁起』（1992）を挙げたい。温泉の恵み（功德）を授ける薬師尊を奉る祠堂は、本来、泉源（湯元）とその湯坪近くに建てられるため、目印となるからである。

その中に、薬師堂の由緒を寄進者の「當邑莊屋 森市郎右衛門」と「薬師堂奉仕者 畔ノ上五左衛門」の連名で記した漢文史料が記載されている⁹⁾。年月日はないが、内容から、前藩主松平忠親から土地の許可を得て薬師堂を移転した1691（元禄4）年6月12日以降と考えられる。同史料に記された薬師堂の由緒は、以下に要約される。

①当地の温泉は、浴せば病を癒す名湯で、往古以来「湯元之本尊」として薬師仏をある民家で安置し奉っていた。1645（正保2）年、飯山藩士の小栗吉次が入湯来村した際、この薬師仏に接し、信仰厚い姿を見て秘仏を開放し、訪れる人々にも参拝してもらおうと薬師像を奉る小祠を別の場所に建てた。

②1674（延宝2）年8月中旬、総州（千葉）の僧・宗入が野沢温泉に到来、薬師仏に参拝

して、荒れていた祠堂の再興を村人に勧め、自らも寄進した。これを受けて、野沢村の名主（庄屋）・村老（年寄役）以下は奉加帳を回し、1676（延宝4）年10月には新仏を造立して祠堂の改装が成った。

③しかし、なお手狭であったので、初代藩主松平忠親が隠居で湯治滞在用の屋敷と湯殿を野沢温泉に造りたいという意向を示した1691（元禄4）年に、屋敷と湯殿建設に伴い、以前より上手に代替土地の認可を得て、同年6月12日に新しい薬師堂を完成させた。

以上の内容①に関する同『薬師堂縁起』本文では、1645（正保2）年に飯山藩士小栗吉次が「入湯のため来村され、上の湯・中の湯・下の湯と三つの浴場で、人通りの多い惣湯最寄りの民家を選んで止宿した。逗留してまもなく、その宿で薬師如来像を安置して、密かに信仰していることに気づいた」¹⁰⁾とある。そして、「湯治客の来入で繁盛することを期待する気持ちは、とりわけ惣湯最寄りの宿を兼ねた民家であれば強く、湯元の守護として薬師如来を自宅に奉っていたのは惣湯の最寄りだったろう」と解説している。

1645年という江戸初期の野沢温泉に、「上の湯・中の湯・下の湯」という3カ所の共同湯坪があったらしいこと、それとの関連は置いて「惣湯」と呼ばれた共同湯坪がすでにあつたことが、ここに記されている。ただし、前出史料には「湯元之本尊」とある以外、湯坪に関する記述はない。筆者も同年次の該当史料は見いだし得ていない¹¹⁾。

しかし年次が下ると、惣湯をはじめ3カ所の共同湯の存在が史料から裏付けられていく。また、民家の当主は、当時惣湯最寄りの宿「みなと屋」を営んでいた畔ノ上五左衛門であったことが、前藩主松平忠親が1674（延宝2）年6月に畔ノ上五左衛門本人に「右温泉の本尊境地とも以後守り仕えるべき者なり」とお墨付きを与えた「下文」から裏付けられる（資料1）。



資料1 1674（延宝2）年松平忠親公下文
（注）野沢組惣代事務所蔵文書による。

忠親公自身、野沢温泉の功德を身にしみて感じ入っていたからであろう。

松平忠親公の湯治滞在用の屋敷と湯殿は、1691（元禄4）年に担当奉行の意を受けて当時庄屋の森市郎右衛門が、「惣湯で滝の湯にした湧出口（市郎右衛門持地内で湧出す）を御用湯に当て、自分持高の内畑式斗四分分に御用邸本宅と湯小屋を配」¹²⁾する計画を立てて裁可され、実行に移された。これは、後の1706（宝永3）年に御用邸存廃に伴う跡地や建造物・御用湯の処置を、野沢村側が組頭4名と惣百姓の連名で松平遠江守家臣三上市郎左衛門に4月13日付で上申した「口上書ヲ以申上候御事」から裏付けられる（資料2）。

同口上書に「一 惣湯瀧御用湯ニ罷成（まかりなり）候ニ付」（原文ゴシックは筆者、以下同）とあるのは、史料上「惣湯」の初見



資料2 1706（宝永3）年4月13日付野沢村「口上書」
（注）富井盛雄氏保管資料による。

であろう。

同史料は後始末に関するもので、御用湯に充てた湯滝の基の惣湯は、以前から存在していた。森市郎右衛門宅は現在も「大湯」を囲むように建つ旅館「さかや」である。「惣湯」帯には泉源が複数あり、その一部、市郎右衛門持地内に湧くものを利用したのが「湯瀧」で、後に別の場所に造られた共同湯「滝の湯」とは別物である。位置関係からしても惣湯は大湯以外ではない。

このように、村人や湯治客が入浴した代表的な共同湯坪「惣湯」帯の源泉を藩主御用邸の湯殿に使った。薬師堂、御用邸湯坪、惣湯の三者は近くに並んでいたのである。

(3)「大湯」とも呼ばれていく惣湯

小栗吉次が惣湯最寄りの宿に泊まったという1645（正保2）年から、史料に「惣湯」が現れる1706（宝永3）年の間の1663（寛文3）年に、野沢村は未曾有の大火に見舞われた。そのとき共同湯の湯小屋も焼失し、建て直されたかもしれない。先の御用邸は、松平家三代に代わって1706（宝永3）年に飯山藩主となった青山氏に結局引き継がれたが、青山氏も1717（享保2）年に転封となったため、御用邸は廃止され、用地や使用源泉は元に戻された。薬師堂の元境内地も「村持」（村の惣有）となった。このとき惣湯が建て替えられた可能性もあり得る¹³⁾。

1771（明和8）年8月、野沢村の名主伴七衛門以下組頭4名と百姓代連名で中野の代官所に出した「覚（おぼえ）」に湯坪の現状が記されている。温泉の運上金（湯税）の増額が150文、計250文を申し付けられているため、現状報告は正確でなければならない。それによると、湯坪は3カ所、「上之湯坪」が1カ所で、湯坪の長さ3間、横幅9尺、「下之湯」が2カ所で、長さは各2間半、横幅は7尺1寸であり、上之湯がすべて大きく別格である。

前出『薬師堂縁起』に上の湯・中の湯・下の湯と3カ所の浴場があって、人通りの多

いのが惣湯…と解説された1645（正保2）年から126年の歳月が流れたが、共同湯の現状や数に変更はなかった。

健命寺の下で湯沢川が流れ下る温泉集落の上手、山手にあたり、最も早くから利用されてきた自然湧出の複数泉源を持つ「湯元」を利用してきたゆえに「上之湯」であろう。上之湯・下之湯は、各湯坪の地理的な上下位置関係のみならず、温泉集落における上位下位概念を指し示す。「上之湯」は特別な存在の湯坪「惣湯」の別称である。

次に位置関係から見て、「下之湯」に当たる共同湯2カ所は、惣湯より湯沢川下流に面した中の湯が「川原湯」（現河原湯）、より下手にあたる下の湯が「寺（照）湯」（現熊の手洗湯）とみなされる。以上3カ所が野沢温泉草分けの共同湯坪であった。

温泉運上金の増額が続くのは、湯治場として発展し、豊富な源泉を活かした湯坪拡大の時期ゆえのことである。1786（天明6）年には「寺（照）湯」の別沢沿い上手に、4番目の共同湯坪「上照湯」（現・真湯）が開かれた¹⁴⁾。

共同湯が増えると、上・中・下の湯といった呼び方では区別しづらい。地名や開湯の謂われ、特別な効能、神仏の功德などにちなむ識別しやすい呼称が求められる。その中でも、共同体の共通認識に支えられた惣湯という名称は健在である。

1838（天保9）年、「普請帳」と記された一袋に納められた「惣湯坪絵図面」3枚中に惣湯の外観と湯船図（図1）がある¹⁵⁾。

外観図には「大湯前 御制札 二月吉日」と付記され、惣湯が「大湯」とも呼ばれるようになっていたことを示す史料では初見と思われる。図1の湯船図は「天保九年戊四月」と記され、湯樋から注がれる源泉をたたえた杉造り湯船の四面の寸法実測、底の丸太の本数や細工まで詳細に記されている。

図2は、亀屋源左衛門を板元に1849（嘉永2）年に初版が刷られた「野澤村温泉全図」

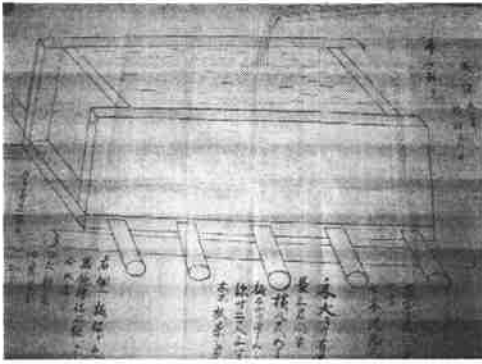


図1 1838(天保9)年惣湯(大湯)湯船図
(注) 野沢組惣代事務所所蔵資料による。



図2 1849(嘉永2)年野澤村温泉全図(亀屋元版)
(注) 富井盛雄氏保管資料による。

である。

温泉と水を涵養する森に覆われた巢鷹山(毛無山)に囲まれ、健命寺と縁起にあった経過をたどった薬師堂、村持になった薬師堂の元地に、1741(寛保元)年に建立された「湯ノ宮」、直下に惣湯の大きな浴舎が見える。ほかに共同湯舎は、川原湯・照湯・上照湯(新湯=真湯)に加え、1839(天保10)年に開湯した滝の湯と新田の湯(現十王堂の湯)の計6カ所が描かれている。ほかに熱泉湧く「湯釜」(現麻釜)、野湯状態の裸湯と目湯がある。明治維新を迎えるまで野沢の共同湯は、先の6カ所であった。

1854(嘉永7)年6月に野沢村の名主、組頭4名、百姓代ほか村中連を挙げて出さ

れた「規定一札之事」は、「当村の温泉は年を追うごとに繁昌いたし、村の助成にもなっている」¹⁶⁾とした上で、あらためて村中一同が温泉に関する従来の慣例を守り、新たに加わる湯税の割振りなどを確認した重要な史料である(資料3)。



資料3 1854(嘉永7)年6月「規定一札之事」
(注) 河野力氏蔵・富井盛雄氏保管資料による。

惣湯は、ここでもほかの共同湯坪と比べて別格扱いである。

「一 当村惣湯の義は往古よりこれ定めにて入湯人宿屋の者、見世商い一切相成らずの定めにつき、以来古格の通り相守るべき事」

「一 当村温泉御運上永割合方、惣湯を始め古湯一般の分は惣村平均割、上照湯の分は九分通りは発起願い人、老分通りは惣村中平均割を以て…」(ゴシックは筆者)

「規定一札之事」は、惣湯をはじめ共同湯坪を支える惣有構造をよく示しているので別項でふれ直すが、野沢温泉の「惣湯を始め古湯一般」とは、先に上の湯・中の湯・下の湯として登場した草創期の3カ所の共同湯のことで、野沢温泉集落が拡大していく後の1786(天明6)年に地元の要望で開設された4番目の「上照湯」とは、同じ村の共同湯でも位置づけや扱いが異なることに注目したい。

このように、江戸末期近い嘉永年間の温泉

史料でも、野沢村の公式文書における共同湯坪の象徴で代表格は「惣湯」と呼ばれており、「大湯」ではない。

(4) 明治に入っても公式には「惣湯」

そして、野沢温泉の「惣湯」は明治時代に入っても公式文書で呼称を維持している。

1871（明治4）年7月の廃藩置県以前の温泉関連文書¹⁷⁾では変化が見られないのは、当然であるが、その後1873（明治6）年や1875（明治8）年の野沢温泉の各共同湯や源泉分析調査報告書でも「惣湯」である¹⁸⁾。野沢村が豊郷村となって以降の1880（明治13）年10月15日付、豊郷村戸長役場から下高井郡役所に提出した「野澤温泉場略図」には、惣湯以下江戸期6カ所の共同湯に、1869（明治2）年に開かれたという「釜辺湯」（現麻釜の湯）を加えた7カ所の共同湯が描かれている¹⁹⁾。

1886（明治19）年刊行の内務省衛生局編纂『日本鉱泉誌』には、「野澤鉱泉」の入浴の場、共同湯についても詳細な記述がある。

その中で石川県の各惣湯同様「惣」の字に「総」を当てているものの、「総湯」以下、河原湯・寺湯・新田湯・滝湯・上照湯・麻釜ノ湯・桐湯の計8カ所が記されている。「桐湯」は村北の宅地に湧き、歴史的な共同湯の数には挙げられていない。なお、野沢温泉の各共同湯の変遷については表1に示した。

1888（明治21）年に長野県鉱泉営業取締規則が施行され、旅館や共同浴場の施設や成分分析、効能などの届け出が必要となった。これにもとづき、野沢では5月20日、「野澤鉱泉場総湯」の浴室と浴槽の改築届を木梨精一郎初代長野県知事宛に提出した（資料4）。

総湯（惣湯）浴舎の明治の大改築は、その6年前に建立された健命寺経蔵兼薬師堂と同じ越後（新潟県）名立の宮大工の手による建築で、見事な湯屋建築の総湯改築立面・側面・浴室窓控えが保存されている²⁰⁾。

1994（平成6）年改築による現大湯は、この総湯設計図と改築図が原型となって伝統的

表1 大正期までの野沢温泉の共同湯と名称の変遷

共同湯坪の名称	現在の名称	成立時期
惣湯	大湯	不明（草創期）
中之湯（川原湯）	河原湯	不明（草創期）
下之湯（照〔寺〕湯）	熊の手洗湯	不明（草創期）
上照（寺）湯	真湯	1786（天明6）年
新田湯	十王堂の湯	1839（天保10）年
滝の湯	滝の湯	1839（天保10）年
釜辺湯	麻釜の湯	1869（明治2）年
横落の湯	横落の湯	1871（明治4）年
上寺湯	上寺湯	1923（大正12）年
松葉の湯、中尾の湯、新田の湯、秋葉の湯は戦後の開設		

（注）野沢組惣代資料をもとに作成。



資料4 1888（明治21）年野沢温泉「総湯改築届」

（注）富井盛雄氏保管資料による。

な湯屋建築を継承できた。明治期の野沢総湯の改築開湯式に招待された木梨長野県知事は、総湯に「犬飼（養）の御湯」という新たな第三の呼称を与えた²¹⁾。以後、この呼称も野沢温泉案内に記されるようになった。しかし、あくまで後発の呼称である。

3 「惣湯」としての洪大湯と安代大湯

(1) 共同湯と大湯密集の湯田中洪温泉郷

長野県山ノ内町の湯田中洪温泉郷は、湯田中温泉と洪温泉を中心にして、歴史や温泉街

の規模と温泉の豊かさから国内有数の温泉郷であると言える。

湯田中洪温泉郷は、狭義には湯田中・渋・角間・安代・星川・穂波・新湯田中の7温泉地よりなる。これに山手の上林温泉と地獄谷温泉を加えた9温泉地が、観光的・対外的に知られている。しかし、広義には観光温泉地ではないが、地元専用の共同湯を多く持つ沓野（沓野温泉）をはじめ、湯ノ原・佐野・戸狩・上条といった地区が含まれる。

湯田中洪温泉郷は、野沢温泉とは同じ下高井郡にあり、戦国時代には甲斐武田氏と越後上杉氏の領国に入るなど、歴史や村落共同体構造に共通点が多い。地元が担う伝統的共同湯の多さでも共通するが、温泉郷の大きさゆえに、今日13カ所を数える野沢温泉の共同湯を圧倒して、52カ所かそれ以上の共同湯が密集している（表2）。

この数は、少なく見積もって80カ所、おそらく91カ所以上あると思われる大分県別府温泉郷と、約60カ所の長野県上諏訪温泉に次ぐ全国第3位の共同湯数ではないかと考えられる。

表2に示すように、湯田中洪温泉郷のうち6温泉地に共同湯「大湯」が存在する²²⁾。「大湯」は東北地方や新潟県にも存在するが、野沢・別所・鹿教湯・山田温泉など長野県の東

表2 湯田中洪温泉郷の共同湯・大湯分布と管理運営主体

温泉地区名	共同湯数	管理運営主体	大湯の有無
渋	10	和合会渋湯・横湯組	渋大湯
沓野	< 10	和合会沓野組	
角間	3	地区	角間大湯
湯田中	10	共益会大湯組他	湯田中大湯
安代	2	共益会安代組	安代大湯
穂波	4	同上 穂波組	穂波大湯
星川	4	同上 星川組	星川大湯
新湯田中	2	同上 新湯田中組	
佐野戸狩他	< 7	地区	
※下川原	※2	※明治末期まで存在	※大湯

(注) 筆者作成。

北部に集中する。

共同湯が複数存在することを前提とした「大湯」の存在が、早い成り立ちや温泉地におけるプライオリティー、浴舎の規模や造りなどから、最も代表格で文字どおり“王（大）湯（共同湯を統べる表象）”を意味するとしたら、大湯が集中する湯田中洪温泉郷は共同湯史的に注目すべき温泉郷と言えよう。

(2) 洪温泉の湯坪と「惣湯」の初見

湯田中温泉と洪温泉を中核とする温泉郷には、山林や温泉資源とその権利、共同湯など入会権や「総（惣）有」にかかわる歴史をそれぞれ体现し、継承した旧湯田中村の財団法人共益会と旧沓野村の和合会が存在し、史料収集と歴史研究を積み重ねてきた点でも特筆すべきである。ただ、本稿にかかわる湯田中洪温泉郷の「惣湯」と「大湯」の考察に絞っては、意識されてきたとは言えず、関連史料の所在を含めて空白感是否めない。

洪温泉が開かれる過程には、裏手の岩山から奥山へかけた古代山岳信仰とそれらを修行場とした修験道・仏教が関わってきたと考えられる。弥勒信仰にもとづく金倉の弥勒石仏が見守る湯田中温泉も同様である²³⁾。

洪温泉では、泉源地にある温泉寺が温泉場形成の核となってきた。密教霊場として始まったと思われる温泉寺の創建の時期は伝承以外定かでないが、山ノ内地方を治めていた高梨氏が上杉氏のもとへ撤退した後、1554（天文23）年に武田信玄が再興し、曹洞宗の禅僧・節香徳忠を中興開山の祖として迎え、1564（永禄7）年には寺領を寄進している。

境内には温泉が湧出する。和合会編『和合会の歴史』収録資料の「沓野史」に、「1556（弘治2）年に信玄の命で温泉寺を整備し、浴槽を造った」²⁴⁾と見えるのが、洪温泉における湯坪の初見ではなかろうか。もっとも、これは寺湯であり、施浴を通じて地元檀家には開放の機会があったとしても、一般湯治客を迎え入れるには難しい。

続けて同「沓野史」には、江戸初期の

1617（元和3）年6月に「河内の僧円海という者が来て渋温泉を改良した。これより遠近浴客の来遊が年を追って増加した」²⁵⁾とある。温泉寺の存立は、温泉集落抜きにあり得ず、早い時期から境内下、門前には一般入浴用の共同湯坪が形成されていたのであろう。

それを裏付ける史料は、温泉寺宛に沓野村肝煎（名主）・長百姓・組頭の村方三役以下連衆で1740（元文5）年9月に出した「差上申證文之事」である。

証文では、境内地を借りて家軒を相立て町戸をなすこと、温泉寺所領内に湧く温泉を引湯して湯坪をつくる了解を取り付けており、今後湯坪が増える可能性を示す。そして「一瀧之湯之場所北ノ方七ツ割ニ相定申候 惣湯之場所北之方四ツ割ニ相定申候」²⁶⁾と、共同湯坪として「瀧之湯」と「惣湯」の名称で少なくとも2カ所が認められる。

渋温泉でも、寺の湯坪以外の共同湯の初見は「大湯」ではなくて「惣湯」であった。

1762（宝暦12）年12月の「湯田中村沓野分午検地本田水帳」²⁷⁾には、「渋湯」の地に湯坪2カ所が記載されている。一つは2間半×3間で石高8歩、もう一つはそれより小さく2間×2間で石高4歩であり、いずれも「村中」、村の惣有（村持）による共同湯坪である。

渋温泉がある旧沓野村は、横湯川対岸の沓野、温泉寺に近い横湯、つばたや旅館脇の路地を境に大湯方面の渋湯と、3地区（組）に分かれる。従って、「渋湯」記載の共同湯坪2カ所のうち大きいものは「惣湯」と考えられる。もう一つの共同湯坪は、横湯地区にある「瀧之湯」とは別と思われる。

想定されるのは、「沓野史」に平安末期の1160（永暦元）年に発見されたとある、渋最古の湯と伝わる現共同湯「初の湯」で、大湯と同じ渋湯組に属する。源泉の発見は直ちに湯坪開設に至らないが、遅くとも江戸時代には湯坪はあったはずである。

一方、「瀧之湯」は、横湯地区が水害を蒙った1716（享保元）年の翌年発見されたと先の「沓野史」にある「目洗湯」と同じようである²⁸⁾。後の1891（明治21）年3月に当時平穏村渋湯組拝借人惣代らから長野県知事宛に提出した共同湯に対する「官有地拝借願書」²⁹⁾で、「惣湯」は「渋大湯」に、「瀧之湯」または「目洗湯」は「目洗滝ノ湯」という統合名称になっている。これは1870（明治3）年3月に源泉が発見され共同湯の浴槽を造ったと「沓野史」にも記された、現共同湯の一つ「神明滝の湯」とは別物である。

渋温泉の共同湯の変遷は、似通った名称が時代を変えて登場するなどわかりづらい。「沓野史」に従えば、現「七繰の湯」は1740（元文5）年に、「綿の湯」は1754（宝暦4）年4月に、「笹の湯」は1828（文政11）年4月に発見されて浴槽が造られた。前二者は、1820（文政3）年9月の「沓野村新田水帳」³⁰⁾で「渋湯下」の地に、1間半×2間で石高3歩と、2間×2間で4歩の「村中」持による「湯坪敷」、つまり共同湯坪2カ所が新しく記載されていることと、場所と時期が符合するかもしれない。

渋温泉は、善光寺と草津・関東方面を結ぶ志賀高原山越えの草津街道の宿場町としても賑わう江戸中期以降、共同湯の開湯ラッシュ期を迎えたのであろう（表3）。

渋「惣湯」が、江戸のいつ頃から「渋大湯」で通るようになったのか定かではない。図3の絵図に記された年号から延享年間（1744～47）以降に作成されたと思われる「渋温泉版画」に、温泉寺に至る参道＝温泉街に門前に近いほうから「たきのゆ」ともう一つの共同湯坪、そして広場になって宿が囲む「本湯」とその近くに計4カ所の共同湯坪が描かれている。本湯は惣湯を指しているが、大湯に近い呼称であり、同版画では少なくとも「惣湯」と記していない³¹⁾。

一方、湯田中温泉や角間温泉には、同じく惣代組織があつて「村中」持ながら江戸時代

表3 明治初期までの渋温泉の共同湯と名称の変遷

共同湯坪の名称	現名称	史料等での初見
初湯	初の湯	1160(永暦元)年?
惣湯、大湯、熱湯	渋大湯	1740(元文5)年9月
瀧之湯、目洗湯	目洗の湯	1740(元文5)年9月
七繰ノ湯	七繰の湯	1740(元文5)年10月
綿ノ湯	綿の湯	1754(宝暦4)年4月
笹ノ湯	笹の湯	1828(文政11)年4月
神明滝の湯	神明滝の湯	1870(明治3)年3月

(注) 筆者作成。



図3 江戸中期の版画で「本湯」と描かれた渋大湯

(注) 『合会会の歴史』口絵「渋温泉版画」による。

を通じて惣湯とは呼ばれなかった「大湯」がある。渋温泉も隣接温泉場の影響を受けて、渋大湯という名称が一般化していったと考えられる。

(3) 安代温泉における「惣湯」

安代温泉は渋温泉に続く温泉街をなしつつ、旧湯田中村に属していた。現「安代大湯」は1705(宝永2)年8月という早い時代に開設されたようで³²⁾、効能から「疝気ノ湯」とも呼び慣わされてきた。1876(明治9)年にもう一つの共同湯「開花の湯」ができた。

開設以来、安代大湯(疝気ノ湯)は「惣村中」でも安代惣代のもと安代組と山手の金倉組に属していたが、泉源からの湯道が隣接する山口三郎治屋敷にも引湯されていた。それを1865(慶応元)年10月、「金倉・安代組

惣湯の湯口を三郎治より貰請け永代両組持とする」³³⁾ことが確認された。「惣湯」とは安代大湯のことである。

この経緯を引き継ぎ、1884(明治17)年には、安代惣代が山口三郎治と「為取換約定書」³⁴⁾を交わし、「共有地より湧出する温泉が十分なうちは往古より山口三郎治内湯へ引き入れることを認めてきたが、今般示談の上、該当湯口は惣湯に合併させ、山口三郎治側から惣湯へ直接入れる入口を設ける」(要旨)ことになった。約定書添付絵図にも「惣湯」が湯道と共に描かれている。

安代温泉も、湯田中渋温泉郷の各温泉を代表する共同湯坪に習い、大湯を名乗ってきた。それでも安代組に属する村人には、共同湯の核心となる共有観念から、公には「惣湯」と意識されていたのではないだろうか。

4 惣湯を育んだ「惣村持」構造

(1) 郷村制に残る惣村的な要素

まず概観すると、高井郡の高梨氏のように地域権力が割拠していた信州は、1560(永禄3)年頃から1582(天正10)年まで甲斐武田氏によって初めての統一的な領国支配を受けた。武田氏は家法を公布して豪族の権限を抑え、地下人・郷中宛命令文書を多く出した。村に代官を置き、百姓と村を直接掌握しようとしたのである。この流れは続く織田、越後上杉氏、豊臣政権下でさらに進み、旧領主の移封と兵農分離に伴う土豪・地侍層の移動や在地化、検地と村切を通じて、中世以来の惣村とは異なり、百姓主体で今日の大字単位に近い近世の村(郷村)が姿を現す。北信地方では移封と兵農分離は徹底していた³⁵⁾。

高井郡でも、「この頃進んだ惣村的な村では、一定の家格・資産・年令などの条件を備えた乙名(オトナ)を選び、惣寄合によって連帯的に村の掟を定めて村の自治をはかった」³⁶⁾という。(湯)田中村・沓野村を治めた松代藩では1603(慶長8)年11月、松平忠輝が領内各村の「肝煎・惣百姓中」に宛て

9条目の「惣知行仕置」を発している³⁷⁾。旧土豪層も村内に根をおろし、肝煎(名主・庄屋)など村役になり、村の自治運営に加わる。

江戸時代の村は近世郷村制として知られる。郷村は幕藩体制の末端機構ながらも、合議制(寄合)、年貢・公事の村請、村の共有財産(惣有財産)、自力救済といった惣村的な自治要素を保っていた。野沢村、湯田中村・沓野村にもそれははっきり見られる。

前出の1854(嘉永7)年「規定一札之事」では、野沢村の各湯坪に対して温泉運上金上納の割合を決めるにあたり、地元の要望で開かれた後発の共同湯「上照湯」と草創期からあった惣湯をはじめ3ヵ所の共同湯とでは、扱いの差が歴然としていた。

上照湯は、1割は「惣村中平均割」で村の共同負担、9割は開設を求めた地元発起願い人らが負担する。これに対して「惣湯を始め古湯一般」はすべて「惣村平均割」で、村を挙げて構成員が共同負担する一村進退の対象である。言うまでもなく、惣湯をはじめ3ヵ所の草分けの共同湯は「村持」、惣村の惣有性格を継ぐ村の共有財産だったからである。

(2) 惣湯を支える組・惣代組織

その意味では、上の湯・中の湯・下の湯という一連の呼称が指し示すように、野沢温泉草分けの3共同湯は等しく惣湯であった。

とはいえ、実際は第2節(3)で挙げた1771(明和8)年の「覚(おぼえ)」³⁸⁾には「温泉湯坪三カ所 上之湯坪 壱ヶ所 下之湯 弍ヶ所」とあった。3ヵ所の共同湯は、温泉という自然の恵みで村の共同資源を活かした惣有財産という性格においてはいずれも惣湯だが、村持の複数の共同湯の中で、呼称としても「惣湯」たり得るのは、別の意味で「大湯」が一温泉地に二つないように、歴史的成り立ちをふまえた特別な共同湯のみで、それが野沢の惣湯、今日の野沢大湯である。

共同湯に対する野沢村、村人の位置づけが見てとれる史料は他にもある。

1837(天保8)年9月の「差出申一札之事」³⁹⁾

は、「山之湯」と呼ばれて捨湯にしていた山手の泉源から引湯して開かれる予定の共同湯「滝の湯」の引湯樋敷設を「村持」とする確認書である。それには「御運上役永惣村中持温泉之内宇山之湯…」と記され、今後は引湯のための「堰敷不残惣村持ニテ…」(ゴシックは筆者)とある。

湯坪によって温泉運上金分担に差があっても、対外的には共同湯坪やときには泉源は「惣村中持」、惣有の対象である。そして、共同湯開設に必要な引湯設備「(湯樋)堰敷」もまた「惣村持」の対象となっていた。

温泉集落が拡がり、中心部にある惣湯など古い共同湯に通うのは不便と感じて、村人から新規の共同湯開設が求められるようになった時期である。だからこそ、別史料の1838(天保9)年4月「議定証之事」⁴⁰⁾には、共同湯開設の普請の負担が村人にとって大きくなっても「仲間」を抜きたいなどと言わずに助け合っていこう、という湯仲間の結束がうたわれている。湯仲間は共同湯の村持、惣有の自覚なしには育たなかった。

一方、宝暦年間(1751～63)には検地帳を分けて事実上(湯)田中村から分村していた沓野村も、湯田中村と並び、「村持山」の広大な山林・入会地同様、温泉資源と共同湯にかかわる組・惣代組織を強固に保持してきた村落共同体である。「村持」の実態は、第3節(2)で挙げた各検地帳に示されていた。

1762(宝暦12)年12月「湯田中村沓野分午検地本田水帳」の渋湯の湯坪2ヵ所も、1820(文政3)年9月「沓野村新田水帳」の渋湯下の湯坪2ヵ所も「村中」である。温泉寺境内に湧く源泉と湯坪を除き、共同湯坪は村中(持)であった。

村中(持)、すなわち村の惣有財産という意味で惣湯を本質とする各共同湯坪は、渋温泉では惣代をかかげる沓野組、横湯組、渋湯組の3つの組によってずっと共同管理されてきた⁴¹⁾。惣村、郷村を問わず惣的結びつき、組・惣代組織の伝統と強さは、野沢温泉が野

沢組に、湯田中洪温泉郷では今日の山ノ内町共益会と和合会に結実しているのである。

(3) 湯田中大湯との対比

安代・湯田中温泉のある湯田中村でも、同じ1762(宝暦12)年12月の水帳に「田中湯坪 村中」とあった⁴²⁾。湯坪は湯田中大湯のことで、「村中」だとわかる。

共同湯が村の惣有財産、惣湯であったことは共通していたが、湯田中温泉の場合は一貫して、歴史ある大湯が「惣湯」と呼ばれたことを示す史料は見当たらない。

湯田中では、大湯一帯上手にかけて泉源が複数あり、上手の薬師堂(現梅翁寺)境内に湯坪があった。1666(寛文6)年の差出帳に「ごてんの湯」「薬師の湯」「湯尻ばた」等と記されたうちの「薬師の湯」で、村人も恩恵に浴していた⁴³⁾。薬師の湯は後に取り崩され、その泉源はすぐ下手の大湯の脇の小さな共同湯坪「滝の湯」に充てられたという。

湯田中では、ほかにも下の河原に湯坪が3カ所あり、洪水で流されたりしながらも共同湯坪の一つとして利用されていた。しかも薬師堂前の松代藩主専用の本陣に「ごてんの湯」があり、周辺の湯本や見崎屋といった宿には複数の泉源を利用した内湯が早くからあった。この様子は泉源分布と源泉を引く湯道まで詳しく描かれた、1820(文政3)年頃作成と思われる「湯田中共有絵図」に詳しい⁴⁴⁾。

宿の内湯を含むこうした湯坪の豊富さと「薬師の湯」の存在が、古くからの代表的な惣湯であった湯田中大湯をあえて唯一の「惣湯」と呼ばなかった理由かと推測する。

これに対して、洪温泉では温泉寺は所領と「守護不入」のお墨付きを与えられ、寺湯である自前の湯坪も独立した存在であった。沓野村の村持の惣湯と張り合う必然性はなかったのである。

5 むすび

本稿では、畿内やその周辺地方、加賀地方などに典型的に発達した惣村が中世末期に北

信地方にもどれほど浸透していたか、という点まではふれていない。それでも野沢・洪・安代温泉など北信地方の歴史的な惣湯の存在に絞って、言えることがある。

一つは、地域割拠していた信州の村落共同体には強固な自治構造があったこと、また一つは、越後上杉氏・甲斐武田氏・後北条氏には村落共同体をそのまま直接統治しようとする、共通する領国支配の構造があったことである。さらに、越後上杉氏の影響力を通じてか、加賀・北陸地方に準じた浄土真宗や日蓮宗などの浸透と、村持の薬師堂に典型的な村落共同体構成員における宗教的結合が強く見られたこと、それは惣村の特徴の一つであったことなどが挙げられよう。

それらの複数の歴史的社会的要因は、天与の恵みたる温泉とその共同利用の場(共同湯坪)に強固な「惣有」意識と惣的結びつきを生み、育むことに貢献し得たのでないかと考えるのである。

注・参考文献

- 1) 石川理夫(2006):「石川県山中温泉「総湯」の成立過程と〈総有〉の歴史的考察」、温泉地域研究、6号、1~12頁。
- 2) 前掲1) 2頁。
- 3) 野沢組惣代(1992):『野沢温泉薬師堂縁起』11頁、早稲田大学法学部民事法黒木ゼミ(1984):「叢芳」6号、5~6頁。
- 4) 河野実(1962):「信州高井郡野沢村の温泉について」信濃、合本。
- 5) 前掲4) 907頁。
- 6) 釧路市市河家文書所収。
- 7) 豊郷村(1922):『下高井郡豊郷村誌』其五、野澤温泉沿革より。
- 8) 前掲4) 908頁。山村順次(1998):『新版日本の温泉地』日本温泉協会、39頁にも関連記述がある。
- 9) 野沢組惣代(1992):『野沢温泉薬師堂縁起』23~30頁。
- 10) 前掲9) 17~18頁。
- 11) 野沢組惣代事務所文書庫以外に、古文書史料を所蔵する旧家が野沢温泉には少なくない。『野沢温泉薬師堂縁起』刊行に野沢組惣代として携わり、惣代も務めた富井盛雄氏(常

- 盤屋主人)は1994(平成6)年の改築後に共同湯「大湯」に薬師三尊を遷座した1996年に「大湯薬師三尊の由来」を要約しており、郷土史研究会で収集・解説をした薬師堂や温泉関連史料(控え)を数多く保管している。富井盛雄氏によると、昔惣湯最寄りの宿「みなと屋」(主人が畔ノ上五左衛門)が移転したとき古い建物から見つかった史料に寛永年間のものが多いという。
- 12) 前掲9) 32頁。
 - 13) 河野力氏蔵史料中に、1716(正徳6)年6月11日付で野沢村神主宛に「杉大木 一本 右を湯小屋建て申す為の御用として請け取りました」という「覚(おぼえ)」が含まれている。時期から見て御用邸払い下げに伴う惣湯改装に充てた可能性はあり得る。
 - 14) 野沢組惣代(1992):「野沢温泉の温泉に関する歴史」より。
 - 15) 野沢組惣代事務所文書庫蔵。
 - 16) 河野力氏蔵。その書き下し控え資料は郷土史研究会、富井盛雄氏保管による。
 - 17) 一例を挙げれば、1869(明治2)年3月「議定連判一札之事」(「惣湯瀧湯二付村中連判書」)、1871(明治4)年2月「明治二巳年惣湯普請一件之付」等、野沢組惣代事務所文書庫蔵。
 - 18) 片桐久衛氏蔵。1873(明治6)年と1875(明治8)年の温泉報告書控えより。
 - 19) 前掲14)によると、1871(明治4)年には「横落の湯」が開湯している。ただし、略図にはない。
 - 20) 富井盛雄氏の教示と資料提供による。参考資料は倉若昭一(2004)『宮彫りの名工 北村喜代松』(ふるさと草子刊行会)。
 - 21) 吉沢好謙(1883):『信濃地名考』では、平安時代の『拾遺和歌集』巻七「物名」所収の和歌「鳥の子はまだ雛ながら立ち去(い)ぬ卵(かい)の見ゆるは巢守なりけり」と詠まれた「犬養乃御湯」を野沢温泉に比定している。富井盛雄氏が1996(平成8)年頃野沢村官報の「菜の花畑」欄に寄せた「『犬養の御湯』(惣湯又は大湯)について」によると、木梨精一郎県知事はこれを念頭に置いて命名したと思われる。しかしながら、それ以前に「惣湯」をはじめ野沢温泉が古くから「犬養(飼)の御湯」と呼ばれていた記録はない。
 - 22) 石川理夫(2006):『温泉巡礼』PHP研究所、161～171頁参照。なお、下川原温泉にも大湯が存在したが、1910(明治43)年の大水害で源泉がぬるくなり、温泉場として存立できなくなった、と『山ノ内町誌』(1973)にある。
 - 23) 前掲22) 163～164頁参照。
 - 24) 和合会編(1993):『和合会の歴史 社会史編』資料「沓野史」項31頁。ただし、原史料ではない。
 - 25) 前掲24) 34頁。
 - 26) 和合会編(1991):『和合会の歴史 現代水利史編・温泉権史編・資料編』温泉権史資料編3～4頁。北條浩編纂執筆による同書では、村持の構造など温泉権に関する詳細な考察がなされている。
 - 27) 前掲26) 5～6頁。
 - 28) 湯田中のあゆみ刊行会編(1994):『湯田中のあゆみ』年表にも「1717(享保2)年に洗目洗いの湯を発見」と記載されている。
 - 29) 山ノ内町共益会編(2000):『湯田中温泉史料集(温泉編)』36頁。
 - 30) 前掲26) 6頁、「文政三庚辰年九月沓野村辰改高請新田水帳」より。
 - 31) 前掲26) 口絵所収。
 - 32) 前掲28) 年表1032頁。
 - 33) 前掲28) 年表1052頁。
 - 34) 前掲29) 219頁。
 - 35) 山川出版(1997)『長野県の歴史』山川出版社、128～169頁。
 - 36) 山ノ内町誌刊行会(1973):『山ノ内町誌』山ノ内町、463～464頁。
 - 37) 前掲36) 474頁。
 - 38) 富井盛雄氏保管史料控えによる。
 - 39) 前掲16)と同じく河野力氏蔵。富井盛雄氏保管の控えによる。
 - 40) 富井盛雄氏保管史料控えによる。
 - 41) 前掲26) に詳しい。
 - 42) 前掲29) 6頁。
 - 43) 前掲28) 160-161頁。
 - 44) 前掲29) 口絵「湯田中梅翁寺附近 源湯図」より。

別府市鉄輪温泉における地域整備事業の意義

The Significance of Regional Maintenance in Kannawa Spa, Beppu City

中山 昭 則*

Akinori NAKAYAMA

キーワード：別府市 (Beppu city)・鉄輪温泉 (Kannawa spa)・地域整備事業 (regional maintenance)
まちづくり (town-building)

1 はじめに

(1) 研究の背景と目的

鉄輪温泉は別府八湯を代表する温泉地である(図1)。かつては蒸し湯・熱湯などの共同浴場を中心として湯治客で賑わい、その最盛期には蒸し湯の前には入浴客が列をなしたと言われている。高度経済成長期になると団体旅行が観光の主流となり、小規模湯治宿が集積する鉄輪温泉は、温泉地における宿泊施設

の大型化・歓楽地化といった当時の流れからは取り残される格好となった。

1980年代後半になると、観光旅行形態は団体旅行から個人旅行へと主流が移り変わった。湯治場の雰囲気を残す鉄輪温泉も、その珍しさから再び注目を浴び、時流に乗りかけたかにみえたが、定着するには至らなかった。その背景には、急速な個人志向の流れに乗り切れなかったことがあげられよう。たとえば、個人でくつろぐための客室の整備や独創的な料理の開発などで遅れを取ったこと、地域社会や行政側もこれに対処する有効な方策を打ち出せずにいたことなどが指摘できよう。

2000年以降になると、地域の独自性が強調されるようになり、各省庁においてもこれに対処する補助事業が次々と打ち出された。別府市は国土交通省の補助事業「まちづくり交付金事業」を申請し、鉄輪地区の本格的な地域整備事業に乗り出した。こうした取り組みは、当地区が観光地として形成されて以来初めてのことである。

そこで、本研究は鉄輪地区の地域整備事業が地域社会にどのようなインパクトを与えたのか検討し、地区全体を巻き込んだ初めての地区整備事業の地域的意義を考察したい。

(2) 最近の鉄輪温泉を対象とした研究

鉄輪温泉を含む別府温泉郷の研究のさきがけとなったのは、温泉地域研究をリードしてきた山村であろう¹⁾。山村は全国各地の温泉

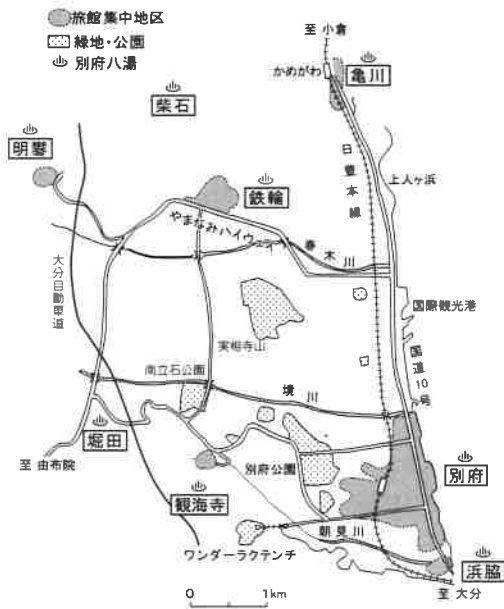


図1 別府温泉郷における鉄輪温泉の位置
(2004年)

(注) 浦達雄原図を一部修正して作成。

* 別府大学文学部 (Beppu University)

地について論考しているが、鉄輪については療養温泉としての実態を分析している。さらに、明治以降の別府温泉郷の地域的変遷を総合的に分析した²⁾。次いで、浦が精力的に研究を進めている³⁾。鉄輪温泉における旅館の立地に関しては、1964年の九州横断道路開業が大きな転機をもたらしたとし、道路沿線への旅館進出の実情を明らかにした。また、明治末から昭和初期にかけての鉄輪温泉の観光動向についても触れ、1919(大正8)年には別府温泉郷全体で入浴客は100万人を超え、そのうち17万人が鉄輪および明礬温泉を利用し、4月に利用のピークを迎えていた実態を明らかにした⁴⁾。小堀・山村は鉄輪温泉における湯治場機能について、1973年と2003年の30年間の変化を論じた⁵⁾。その中で、30年間で自炊旅館は減少したものの、低廉な保養旅館は健在で国民保養温泉地としての機能は維持しているとしている。中山は、地獄の観光資源化ならびに別荘地開発の展開を考察する中で鉄輪温泉との関係に触れた⁶⁾。その他、蒸し湯がリニューアルされるにあたって、その成立から今日の利用実態までを総合的に考察した別府大学文化財学研究所の研究、旧蒸し湯の利用者アンケートと聞き取り調査をもとに、蒸し湯の利用実態に迫った別府大地理学研究室の論文などがみられる。

(3) 研究事例地域の概要

2006年度における鉄輪温泉への宿泊者数は、別府市の統計によると明礬温泉と合わせて80万3,000人であり、別府市全体の宿泊者数393万7,000人の20%を占める。両温泉の宿泊定員からみて、その多くは鉄輪温泉に宿泊していると言えよう。

鉄輪温泉は、一遍上人によって建治2(1276)年に開かれた。蒸し湯については、貝原益軒の『豊国紀行』の記述が最も古い記録とされ、「温湯の上にかまえたる風呂有、病者は是に入て乾浴す。」との記述がある⁷⁾。益軒は元禄7(1694)年4月に別府に滞在した。蒸し湯は、その後も幾度かの建て替えを経ながら、今日

まで地域発展の中心的な存在として機能してきた。現在、鉄輪温泉には70軒程度の宿泊施設が立地し、今日においても自炊を基本とする湯治宿ならびに「入湯貸間」を掲げている宿も少なくない。

2 鉄輪温泉における地域整備事業

(1) まちづくり交付金事業の概要

蒸し湯のリニューアルを柱とした鉄輪温泉の地域整備事業(以下、当事業)は、国土交通省「まちづくり交付金事業」(以下、まち交事業)を活用している。まち交事業は「地域の歴史・文化・自然環境等の特性を活かした地域主導の個性あふれるまちづくりを実施し、全国の都市の再生を効率的に推進することにより、地域住民の生活の質向上と地域経済・社会の活性化を図る」ことを目的として創設された。その事業適用範囲は広く、自治体が設定した都市再整備計画に基づいて、道路・公園・下水道・河川の整備から地域交流施設整備、優良住宅整備、土地区画整理そして鉄輪温泉にみる市街地再整備にまで及ぶ。

2004(平成16)年度の創設から現在までに全国662市町村1,100地区で事業化され、2007年度の事業規模は6,115億円にのぼる。当事業を取り込んでいる事例をみると、中心市街地の活性化を目的としたものが多数を占めるが、各地の温泉地域においても洞爺湖・鬼怒川・下呂・草津・鹿教湯温泉などでこの事業を活用している⁸⁾。

鉄輪温泉におけるまち交事業は、別府市が実施を計画していた「鉄輪地区都市再整備事業」に基づいて行われている。この都市再整備計画は「ふれあいと情緒ある温泉街の賑わいを再生し、うるおいに満ちた湯けむりたなびく交流型観光地の創造」を目的として2005年度から5年計画で、総事業費はおおよそ9億6,000万円である(表1・表2)。

事業は「基幹事業」と「提案事業」に区分され、前者は道路・公園・生活基盤整備などの地域の社会資本整備事業を指す。後者はま

表1 鉄輪地区都市再整備事業の概要（2005年）

事業名	事業期間	事業名	事業期間
鉄輪蒸し湯温泉整備事業	2005年	温泉管共同BOX	2005～09
観光交流センター整備事業	2005	湯けむり景観まちづくり計画策定	2006
街灯整備事業	2005～09	温泉遺産の復活事業	2006
市道美装化整備事業	2005～09	モニュメント整備事業	2006～07
情報板整備事業	2005～09	鉄輪温泉ポケットパーク整備事業	2006～07
PR戦略事業	2005～09	大谷公園整備事業	2006～07

（注）別府市資料により筆者作成。

表2 鉄輪地区都市再整備事業の区分（2005年）

事業区分	事業費	事業内容
基幹事業	7億6,000万円	市道美装化整備事業2,330m（道路石畳整備）、公園1カ所、ポケットパーク3カ所、観光交流センター1カ所、街路灯83カ所、情報板24カ所、モニュメント1カ所、駐車場20台分
提案事業	2億600万円	蒸し湯温泉、温泉管共同BOX1,500m、景観計画策定温泉遺産の復活2カ所、宣伝PR

（注）別府市および国土交通省資料により筆者作成。

ちづくり・観光交流などの地域の特性に見合った事業ならびにその事業調査・研究、推進事業などに関する事業である。鉄輪温泉における事業区分をみると、提案事業としてメインといえる蒸し湯リニューアル事業が盛り込まれている（図2）。

蒸し湯リニューアル事業費は1億9,720万円で、新築なった蒸し湯は木造一部鉄筋コンクリート造りで、旧蒸し湯と比べると外観は大きく変貌している。延床面積は2.3倍、蒸し風呂部分（石室）は男女別各10㎡で、これは旧蒸し湯の男女共用9㎡の2倍の広さである。休憩施設も整備され、旧蒸し湯とは外見と機能面においても大きく変化している（表3）。管理体制もこれまでの外郭団体への委託から、地元の鉄輪共栄会が指定管理者となり、地元運営が実現した。2階部分には観光交流センターが設けられ、専属の担当者が常駐している。

当事業は蒸し湯のリニューアル事業の他に、市道美装化整備事業としてメイン通りともいえる「いでゆ坂」と「みゆき坂」を石畳の舗装に付け替えている。これにより、鉄輪温泉のイメージはかなり変わった。また、温泉遺産の復活事業として、地元住民



図2 鉄輪温泉のまちづくり事業の概要（2006年）

（注）別府市『別府市全図』により筆者作成。

表3 新旧蒸し湯の比較（1970・2006年）

区分	旧蒸し湯	新蒸し湯
建築年	1970（昭和45）年11月	2006（平成18）年8月
構造	鉄筋コンクリート造	木造一部鉄筋コンクリート造
延床面積	122.76㎡	285.30㎡
石室の形態	男女共用（約9㎡）	男女別（各約10㎡）
管理者	（財）別府市総合振興センター管理委託者	鉄輪温泉共栄会指定管理者

（注）別府市資料により筆者作成。

によって使われていた洗濯場と熱の湯温泉源泉跡の復元がなされた。こうしたメイン工事は、ほぼ完了し、今後は街路灯・駐車場・ポケットパーク等の整備が行われる予定である。

（2）地域社会の対応

当事業は鉄輪地区始まって以来の大規模な地域整備事業であるが、この事業に対して地域社会はどのような対応を取ったのであろうか。事業計画に対しては、賛否両論があった。とりわけ、蒸し湯の取り壊しと新築に対しては紆余曲折があった。当事業の実施に際しては、受け皿となる地域社会が必ずしも一枚岩でないことは鉄輪地区のみならず全国共通の問題とも言えよう。ここで、まちづくりに対する地域社会の取り組みをみたい。

鉄輪地区全体の動向とすれば、当事業に対しては積極的に推進する方向で動いてきた。地域整備事業決定の報を受けた地域社会は、2006（平成16）年11月には自治会・旅館組合・商工会・NPO法人などの代表による「受入協議会」を発足させ、事業に対する地元の要望をまとめた。このように敏速な対応が取れたのは、この数年来住民による様々な活動によってネットワークが築かれていたことが大きい。さらに、これらの諸活動によって、鉄輪の将来像に対するビジョンが住民各自の胸の内で醸成されていったと考えられる。

このような地域社会の対応が評価され、「第2回まち交大賞全国大会」において銀賞に相当する「創意工夫大賞」を受賞した。この賞はモデル性の高い創意工夫のある取り組み地区を表彰するもので、鉄輪温泉のプログラムは、今後全国の温泉地域再生のモデルと

されるであろう。

3 蒸し湯のリニューアルと利用動向

まず、リニューアルなった蒸し湯の利用者数をみる。新しい蒸し湯の開業は2006年8月24日なので年度の途中が開業日となる。通常統計データは年度別で集計・公表され、2006年度の蒸し湯の利用者数は3万110人であった。これは前年度の利用者数1万8,445人と比べると63%増となる。さらに、8月24日以降の利用者数は2万3,914人で、同年度利用者総数の約80%を占めた。リニューアル後は1日平均100人の利用者があったが、旧蒸し湯では40人に過ぎなかった。新旧蒸し湯の収容人員には差があるが、それにしても利用者の絶対数は2.5倍に増えた。ここに、蒸し湯のリニューアルは、集客面では効果があったと言えよう。

蒸し湯の利用者数の変遷を遡ってみると、最も多かったのは1951（昭和26）年度の6万9,359人である。リニューアルしても、全盛期の半分程度の利用者に過ぎない。しかし、同年における市営温泉の利用者総数が190万人程度で今日の2倍であったことを考えれば、蒸し湯のみが地盤沈下したとは言えない。当然のことながら、当時と現在とでは一般家庭における浴室の普及率、市内の共同浴場の状況、観光客数の動向と志向性などは明らかに大きく変化している。今日の別府観光を取り巻く状況を鑑みると、リニューアルした蒸し湯は、むしろ健闘していると言えよう。

利用動向について、蒸し湯を管理する鉄輪共栄会が実施しているアンケート調査から

さらに詳しく検討する。同会は、開業日以来毎日利用者に対してアンケートを実施している。開業から1ヵ月間におけるアンケート回答者（サンプル数299）の居住地をみると、大分県21%、福岡県16%、別府市内14%、そして東京からの利用者も5%いた。これが2007年5月の1ヵ月間の回答者（サンプル数56）をみると、福岡県からの利用者が全体の25%を占めた。両者のサンプル数に開きがあるとはいえ、福岡県からの利用者が主流を占めつつあることは確かであろう。旧蒸し湯の利用実態調査においても、福岡県からの利用者の占める割合が最も高いとのデータがあり、発地別利用者の動向は新旧の間でもほぼ同じ傾向にある⁹⁾。

旧蒸し湯利用者の間では、独特の雰囲気や愛着を持っていた者も多く、「この雰囲気がたまらないから通っている」という県外からの利用者の声が多かった。今回実施しているアンケートからも、旧蒸し湯を懐かしむ声も出ている。しかし、男女別浴になったことと明るい雰囲気になり、「安心して利用できる」との声が圧倒的に多い。新しい施設ならば利用したいといった初心者の声も多く、蒸し湯のリニューアルは、新たな観光客の掘り起こしに大きく貢献する可能性がある。

その一方では、かつては自宅の浴室と同様に利用していた地元の人々にとって、利用し難くなっていることも指摘しなければならない。まずは、料金が210円から500円に値上げされたことがあげられる。加えて、増加した観光客に独占される時間帯が生じたこともある。聞き取り調査においても、「地元の常連客は半減したのではないか」との関係者からの証言を得ている。

蒸し湯を中心とした湯治客、また蒸し湯を日常的に利用していた地元住民、こうした人々によって支えられ発展してきた鉄輪温泉であるが、この蒸し湯も当事業によって観光施設（資源）として特化しつつある。今後のまちづくりと観光温泉地としての方向性

を考える場合、これまでとは違う観光客層の流入を見据えなければならない。これは、現実のものとなりつつある。すでに鉄輪温泉には大分市に立地する水族館「海たまご」や九重町の「夢吊橋」を目的とした宿泊客の姿が増えつつあるのである。さらに、蒸し湯がリニューアルされ、多くの人々が利用しやすくなったことによって、一層「トレンドィー」な客層が増加する可能性も高い。

4 鉄輪温泉における地域づくりの動き

元来の湯治は、一般的には最低でも一週間滞在し療養することが目的であった。しかし、こうした利用形態は、今日の旅行の志向性や生活スタイルからすれば一般的とは言い難い。そこで、最近ではこれをコンパクトにした体験型湯治・プチ湯治という温泉利用法が唱えられている。わが国を代表する湯治場としてその機能を有する鉄輪温泉ではあるが、湯治客を引き付けてきた蒸し湯が観光施設としての色彩をより強めている中で、当地区においても近年様々な動きが出ている。

鉄輪の湯治場の雰囲気は、残したい景観（風情）として常にあげられている。整った歴史的な環境とは言い難いのであるが、我々が思い描く温泉イメージと合致する処が多いのであろう。また、その温泉イメージを代表するのが「湯けむり」である。湯けむりの立ち込める景観を「世界遺産にすべし」との声もある。そこで、当地区では湯けむりのライトアップを始めている。しかし、肝心の湯けむりを望む展望施設となると、最近別府市によって大観山中腹に展望台が整備されたものの、さらに近接した鉄輪地区内の適地にもこうした施設が必要であろう。

他方、かつて鉄輪温泉を代表していた老舗旅館旧「富士屋」は、旅館業こそ閉めているものの、由緒ある建築物は登録文化財の指定を受けている。現在では、その施設を一般に開放して、ギャラリー・催し物などに貸し出

している。これは、登録文化財制度を活用した新しい動きであるが、鉄輪温泉にはこれに続く建築物は見当たらない。

高度経済成長期の最盛期と比べ地盤沈下の著しい別府温泉郷にあって、鉄輪温泉は他と比べるとその影響は少ないと言われている。湯治場であったがゆえに、宿泊施設の大型化に乗り遅れたことが幸いしたと考えられる。しかし、湯治客や観光客の出足にはかつての勢いは感じられない。地元では、観光客による投句など鉄輪独自の雰囲気を利用した催しも早くから始められてきた。また、女将たちによる豚まんも、至る所で蒸気が噴き出ている当地の雰囲気の中から生まれた。このような発想は、大型ホテルと歓楽街で構成された温泉地では生まれないのではないか。さらに、今日全国各地で実施されている地域ガイドも、当地では実施されている。

その中で、昨年来注目すべき動きがみられた。それは、温泉の管理についてである。鉄輪温泉の源泉は、一部では100℃にも及び、そのため旅館・浴場施設ではこれを入浴の適温にまで冷ます手立てを講じなければならない。他の温泉地にとっては誠に羨ましい限りではあるが、当地では意外と手間のかかる問題であった。そこで、大分県産業技術センターと地区内の入浴施設「ひょうたん温泉」は、共同で竹を使った冷却装置を考案・開発した。これによって温泉資源の有効利用が図られるとともに、これまで冷却に使用していた水道代金も大幅に改善された。すでに、この装置を取り付けている共同浴場「熱の湯」では、水道代金は半減した。また、温度が高いので、「水道水を入れて冷ましている」などといった誤解も解けよう。鉄輪温泉から全国の温泉地に温泉の有効利用の推進をアピールできる画期的な動きとして評価したい。

以上のように、近年地域おこしの活動を実践している住民にとって、当事業はまさしく観光客を呼び込むアプローチ整備ともいべき性格のものとする。その一方、再整備事

業の実現によって、地域社会を取り巻く状況に若干の課題も浮き彫りになっている。

5 地域づくりへの課題

(1) 再整備事業施行による課題

今日、全国各地の温泉地では、「地域づくり」「まちづくり」といった視点から再整備事業が実施されている。こうした取り組みの中では、山形県銀山温泉や兵庫県城崎温泉のような歴史的景観の整備が先進事例として注目を集めてきた。しかし、全国の温泉地域の多くは、高度経済成長期における増改築による大型化、外来資本の参入によるリゾート保養地化などの事態を受けて、由緒ある温泉地でも歴史的景観は残念ではあるが失われてきた。このような状況下、多くの温泉地にとって上記2温泉の事例は羨望的であっても、現実的な目標とはなり得ない。

全国の温泉地では、資本・人の変遷が激しく、一貫した歴史性を維持することは困難であった。鉄輪温泉にしても、蒸し湯はこれまでも数十年ごとに建て替えられ、その位置も変化している。正しい位置を確定しようにも、史資料が揃わないのが現実である。鉄輪温泉について歴史性の視点からみるならば、「それらしい」空間としか言えない。しかし、それは温泉地が担ってきた、あるいは担わされてきた経緯を鑑みれば、致仕方のないことであろう。近代以降、我々は温泉地に対して、「湯治場」から「保養」へ、そして「歓楽」から「癒し」へと実に様々な機能を求めてきた。温泉地は、まさしく国民のニーズに応じてきたいわば「機能空間」であり続けたのではなかろうか。そこに再び「ひなびた空間」とか「歴史情緒溢れる空間」を求めたところで、すでにそれらは国民のニーズに応えんがために消し去られてきたのである。こうしたニーズに対しては、「それらしい空間」でしか回答できないのが、全国の大多数の温泉地ではないか。我々はそのところをよく鑑み、認識しなければならない。

今日、注目を集めている湯治場の独特の雰囲気も、湯治本来の機能を求めるというよりは、「癒しの空間」としてその雰囲気を求めている。鉄輪温泉のその雰囲気は、日常の中に存在している。実際、湯治宿に滞在し、自炊施設で蒸し焼き料理を楽しむ観光客は増えつつある。しかし、湯治宿独特の環境は、プライバシーを重視する多くの観光客にとっては敬遠する要素ともなる。その結果、湯治場空間は大きな観光資源になるまでは至っていない。こうした雰囲気のとりになる観光客も少なくないと聞かすが、やはりごく少数派ということなのであろう。こうした少数派を大切にしていけるのか、客室をもっとニーズに合わせて一層個室化していくのかが問われている。今日提唱されている「プチ湯治」は、もし当地で実施したならばそれなりの注目は集めるであろうが、現実として今尚ニーズの高い元来の湯治を必要としている人々の存在も無視できまい。湯治をどのような形で観光資源化しアピールすべきか、今後具体的な模索が始まるのであろう。

(2) 再整備事業後の展望と課題

鉄輪温泉は、多くの温泉地が抱える「源泉の確保」という地域の存続が問われる根本的な問題とは、基本的には無縁なところにある。幸いなことに、源泉の確保を危惧する必要はないという大きな利点を有するが、地元は意外にも当事業を通して温泉資源のすばらしさを再認識したのではなかろうか。

当事業を通して、「お湯そのもので地域が再生できる」というごく基本的なことを、これまでどの程度認識していたのか再考すべきであろう。これまで資源が豊かなゆえに、その資源を運用することに関心が向かなかった傾向があった。今日、初めて地域ぐるみの事業が取り込まれたこと、それ自体がこれまでの地域社会の置かれていた状況を垣間見ることができる。湯量の豊富さは、旅館・施設が個別に勝負できる強みを持つが、裏を返せば自分本位という雰囲気を作り出す要素でもあ

る。

今日、大深度掘削によって東京の都心部にも温泉が湧出している。たとえ湯量が少なく、本物の温泉に浸かれる浴場は施設の一部に過ぎなくとも、連日大賑わいしている。ここでは、「東京に温泉」という意外性が市場の心を掴んだのであろう。観光という市場は、時として温泉地の湯量・泉質などとは違う価値判断で動くことがある。「お湯さえあれば温泉地は安泰」なのか。湯量は温泉地にとっては根本的な問題であるが、それと観光市場は時として一致しないこともあることを常に念頭に入れなければならぬ。

現に、近年では大分市の「うみたまご」に年間100万人、さらに九重町の「夢吊り橋」には開業1年を待たずして200万人の観光客が訪れ、鉄輪温泉をはじめ別府温泉郷への宿泊客も増えつつある。当然、こうした観光客のニーズはあくまでも「うみたまご」であり、「夢吊り橋」である。これらの観光客を、鉄輪温泉に引き付けるのならば、送迎バスを仕立てるなどのサービス向上に努める必要があろう。しかし、それで良いのであろうか。鉄輪温泉を単なる「泊まる場所」にしてしまうことは、今や鉄輪温泉だけの問題ではなく、わが国の温泉地全体の問題といっても決して過言ではない。もはや、鉄輪温泉の動向は全国の温泉地の目標でありモデルである。たとえば、「うみたまご」と「夢吊り橋」を結ぶ中継点で湯治文化を体験する場として売り込むことを考えなければならない。両施設の特長からみれば、これらを訪れる観光客から「体験」というキーワードに関心を寄せる行動的な客層を掘り起こせるのではなかろうか。子供たちの体験学習の場として蒸し湯と地獄蒸し料理をアピールすれば、当然その家族も行動を共にするであろう。

今日、鉄輪温泉を取り巻く環境を鑑みて、当事業後についてはまさしく「まちづくり交付金事業」がうたっている通り、地域主体の活動すなわち地域が自ら構築しなければなら

ない課題なのである。

6 まとめ

以上、地域整備事業を取り入れた鉄輪温泉の実情について検討してきた。その結果、現時点において以下の点が指摘できる。

①事業の目玉といえる蒸し湯のリニューアルは、集客に大きく貢献している。蒸し湯利用者は前年度比60%もの増加を示し、今後は新規観光客の開拓とともにリピーターの確保も期待できる

②地域社会の趨勢は、当事業を推進する立場にあったと言えようが、そのビジョンとプランは数年来の地道な地域おこしを通して培われたネットワークによって支えられた。

③当事業を通して地域おこしの有力な手段として、「温泉そのもの」が有効であることが地域の共通認識とし浸透していった。

「まちづくり交付金事業」を取り込んだ鉄輪温泉は、いわば現実的な対応を取ったと言えよう。当地区の取り組みは、大深度掘削によって源泉を搾り出している温泉地や、辛うじて温泉と銘打てる温泉地からみれば、それこそ羨望の的と言える。これが鉄輪の強みである。空間的な雰囲気も大切な資源ではあるが、お湯そのもので地域が再生できるところに鉄輪温泉の地域的特性があり、この事業の地域的意義がある。

さらに、当事業は前述の通り「第2回まち交大賞全国大会、創意工夫大賞」を受賞した。事業内容と地域社会の取り組みについて、全国モデルとして高く評価された。しかし、この受賞はあくまでも、その計画に独創性があり、これに地域社会も参画している点が評価されたのであり、その運用こそが地域社会に対する本当の評価となろう。観光資源は、

常にホストとゲストの認識・思惑が一致しているとは限らない。地域住民は温泉が身近にあるがために、その重要性に無頓着であったと住民自らが語っている。この意味でも、この事業は住民自らが温泉の力を再認識する機会を与えたものと考えられる。

今後は、蒸し湯利用の詳細について吟味し、当事業と地域社会との係わりについても、検討を加えたい。

本研究について、鉄輪蒸し湯観光交流センター長の桑原巖氏から資料提供と有益なご助言を頂き、温泉閣河野忠之氏からも鉄輪の歴史について話を伺った。ここに感謝の意を表します。

注・参考文献

- 1) 山村順次(1975):「別府市鉄輪療養温泉の実態」。温泉、42巻9号、28～30頁。
- 2) 同 (1980):「温泉観光都市・別府の地域変化」。千葉大学教育学部紀要、30巻1部、129～115頁。
- 3) 浦達雄(2005a):「別府温泉郷における旅館経営の変容」。温泉地域研究、4号、17～27頁。
- 4) 同 (2005b):「近代における別府温泉郷の形成過程」。温泉地域研究、5号、1～12頁。
- 5) 小堀貴亮・山村順次(2004):「別府市鉄輪温泉における湯治場の地域変容」。温泉地域研究、2号、49～54頁。
- 6) 中山昭則(2003):「大正期における別府温泉の別荘地開発」。温泉地域研究、創刊号、17～22頁。
同 (2005):「別府温泉郷における地獄の観光開発と地獄組合」。温泉地域研究、5号、13～22頁。
- 7) 飯沼賢司(2006):「蒸し湯と一遍上人」。遍上人探求会・別府大学文化財研究所:『蒸し湯つちなんなんー蒸し湯の学術調査報告ー』、1～5頁。
- 8) 国土交通省ホームページ(<http://www.mlit.go.jp/>)。
- 9) 別府大学別府大学地理学研究室が2005年7～9月、2005年12～2006年1月にかけてアンケート調査を実施した。

中国大連市安波温泉の開発過程

The Development of Anbo Spa in Dalian, China

于 航*
Hang YU

キーワード：安波温泉 (Anbo spa)・温泉開発 (spa development)・宿泊経営 (hotel management)・大連 (Dalian)・中国 (China)

1 はじめに

(1) 研究の背景と目的

中国では、改革開放政策が実施された1978年のGDPは3,624億元であったが、2006年には21兆元に達した。収入が大幅に増えた結果、国民の生活水準は上がって、住宅購入や特に近年では旅行への消費が顕著になった。そのなかで、今まで重視されていなかった温泉が、新しい観光資源として急速に開発されるようになってきている。

2001年、中国観光省当局は全国の観光地を知名度・施設規模・利用者数などを考慮して、国家観光地に登録することにした。その際、A級・2A級・3A級・4A級の4つのレベルに分けた。最初に登録された観光地の数は592カ所であったが、そのうち温泉地はわずかに9カ所(2A級6,3A級3)であったものの、ここに温泉地が観光地として正式に認知されたのである。2005～2006年の2年間に新たに20カ所(2A級1,3A級5,4A級14)の温泉地が登録された。特に、2006年の4A級観光地114カ所のうち、温泉地が9カ所で約10分の1を占め、最近の温泉地開発がいかに著しいかを知ることができるとともに、大規模・高レベルであることが改めて証明された。しかし、中国の温泉地が3,000カ所と言われるなかで、2006年までに登録された温泉地が36カ所に過ぎないので、中国の温泉地開発はまだ緒に付いたばかり

であり、と言えよう。

中国の経済力が急速に向上し、観光活動が活発化して温泉地の開発や利用者数が著しく増える一方、温泉地についての総合的な研究が極めて乏しい状況を痛感し、筆者はこれまでに中国東北地方遼寧省における温泉地の動向¹⁾、鞍山の湯崗子温泉²⁾と大連の龍門湯³⁾を事例とした研究を発表してきた。

本稿では、大連郊外にある安波温泉を取り上げ、かつての療養温泉地から観光温泉地へ、さらに最近のスキー場開発に至る地域変容過程を明らかにすることを研究目的とした。特に、温泉開発資本の動向と地域住民の対応、さらに温泉利用者の特性を把握したので、ここに報告することにした。

(2) 研究方法

筆者は、これまでに遼寧省の温泉地を中心にして研究を進めているが、その研究法は文献調査と実証的現地調査を平行して実施してきた。本研究では、先行文献⁴⁾や既存資料を踏まえて地域特性を把握し、温泉利用者・温泉観光経営者・役人・開発投資者や温泉地周辺の地域住民に対して聞き取り調査とアンケート調査を実施した。具体的には、3週間の滞在中、①安波鎮役場温泉委員会で基本資料の収集と開発計画の聞き取りをし、②野外観察による温泉地域の変化図の作成、③温泉施設の利用者に対して基本調査と満足度評価のアンケート調査、④地域住民を対象にした

* 千葉大学大学院 (Graduate School of Chiba University)

意識調査を実施した。

2 温泉リゾート開発の背景と安波温泉の概要

(1) 温泉リゾート開発の背景

中国の温泉リゾート開発の背景については、おおむね以下のようである。

まず、国家の発展政策の流れからみると、温泉開発の前提は中国の経済力の高まりである。前述のA級以上の温泉地36カ所のうち、広東省が6カ所占めているように、1980年代には「沿海経済特区戦略」策のもとに、珠江三角洲の経済開発が猛スピードで進展した。広東省がその中心をなし、香港資本をはじめ外国資本が参入して、高レベルの温泉リゾートが開発された⁵⁾。

一方、新中国建国の経済発展に大きく貢献した東北地方は、資源の枯渇や国有会社の体制転換などの問題で、中南部海岸沿いの地区に比べて経済力が停滞していた。しかし、21世紀に入ってからの中国の高度経済成長を背景に、福祉施設としての温泉療養院が最も多かった遼寧省の温泉地は、温泉リゾートとしての性格転換を図りながら、著しい発展を遂げるようになってきている。

東北地方の一大中心地である大連市は、「北方小香港」と言われるように、自然・環境・文化が豊かであり、中国の行きたい観光都市にも選ばれた。かつて、海浜都市の大連市へは、夏季「3S」(Sun・Sand・Sea)を楽しむ目的で訪れた客が多く、冬場は観光のオフシーズンであった。この問題を解消するため、潜在観光資源の温泉が最大のポイントとして認識され、冬季「3S」(Spring・Sport・Shopping)の観光テーマが決められた。温泉地は新しい観光需要の大きな受け皿となり、ゴルフ場・スキー場・土産店・ショッピングセンターなどの関連産業を成長させることになった。

こうした大連政府の政策の下で、大連市内各地で大深度の温泉が掘削され、また農村地

域の既存温泉地にホテル・温泉浴場などの温泉施設が続々と出現した。温泉利用ができる宿泊施設と関連産業の増加は、大連市の都市内だけに集中していた観光客を周囲へと分散させ、観光活動が多様化した。通年・広域という時間・空間ともに、保障された充実した観光プランを観光客に提供し、観光客の滞在期間を延ばし、消費費用を増やして、総体的に経済収益アップへと結びけたのである。

大連市都市住民の生活水準は近年昇進し続けており、収入や自家用車の増加の結果、これまでの不定期の観光から定期的に観光旅行をする傾向が見られる。その結果、週末利用のリゾート地の開発が必要となり、温泉地の顕著な変容もその具体的な現われである。一方、都市部と比べ経済力が低い農村地域にとって、所得増加・生活改善・格差是正などの要求が可能となる温泉リゾート開発は地域住民の願いでもあった。ここに、「社会主義の新しい農村建設」と「調和的社会的創造」にとって、都市と農村の両者の希望を満足させる中間役として、温泉地の開発は重要な役割を担っているのである。

(2) 安波温泉の概要

中国東北地方の遼寧省にある大連市安波温泉リゾート区は、大連市の北部70kmに位置し、遼東半島西部を縦貫する大動脈である瀋大高速道路(瀋陽～大連)の入口まで30km、東の黄海湾の皮口港から60kmで、交通の便は良い。温泉リゾート区内は千山山脈西南の延長部である低い丘陵に囲まれ、西高東低の地勢が広がっている。最高峰は東南部にある標高471.2mの鶏冠山であるが、西南部と東北部は標高約200m～400mの丘陵であり、ほかの地区はほとんどが標高150mの谷間である。温泉の湧出地点が存在している安波川が山間の谷に沿って南北方向に流れ、リゾート区を東部と西部に分けている。

安波温泉リゾート区域全体の面積は305㎏であり、主に宿泊施設が集中している市街面積は、2000年の2㎏から2005年の5㎏

へ拡大した。2つのコミュニティ、8つの村、1つの鎮と231屯で構成されており、人口は2000年の8,000人から2005年には4万4,000人に急増した。安波温泉地は行政上大連市（地区級）と普蘭店（県級）に属し、安波鎮が直轄している。2000年の鎮政府の財政収入は660万元であり、住民1人あたりの収入が1,450元から、2005年には3,500元に大幅に増加した。特に観光による収益は、わずか5年間で1.2億元から4.6億元に増え、約4倍にのぼった。また、宿泊客数も2003年の1万7,000人から2006年には3万7,000人へと急増している。

3 安波温泉の開発経緯と現状

(1) 行政当局の開発

①安波温泉の温泉探査

安波温泉は岫岩安波深断裂低中温地熱帯に属し、断裂岩漿型地下熱水である⁶⁾。1972年に大連市政府と普蘭店政府の指示により、遼寧省水文局・東北地質研究所・大連地質大隊が提携して安波温泉の地質構造を探査した。その結果、安波地熱帯異常帯は長さ350m、幅60mの範囲で北北東方向に線状に分布し、河谷の砂地から湧いていることが明らかになった。温泉は最高温度54℃、最大自然流量1.87l/s、pH8.35～8.45の弱アルカリ性温泉であることが判明した。

1984年、国家地質部と国連地熱専門家フィフストンの鑑定を受け、温度73℃、pH8.65のナトリウム・珪酸・鉄分・亜鉛・ストロンチウムなど20種類あまりの微量元素が含まれる重碳酸硫酸型高温泉であり、大変良い温泉であると評価された⁷⁾。

さらに、2000年には遼寧水文地質工程地質勘察院によって、広い範囲で地熱調査が行われた⁸⁾。調査の結果から、安波温泉の地熱帯の範囲は長さ約3,000m、幅900m、面積2.2km²の広範囲にわたっていることが判明した。地下熱水の最高温度は66℃、21.6mの掘り抜き井戸の湧出量は1,560m³/d、鉱化度0.458

gの重碳酸硫酸型温泉であることが再び検証された。

温泉資源を有効的に利用するように、安波鎮政府は1997年3月に280万元を投資して安波地熱管理センターを設立した。当時の職人は10名、温泉井戸4カ所、輸水管8,000m、貯水塔3カ所である。安波理療医院・供売社療養院・食糧療養院・公路療養院の4カ所の温泉を集め、毎日20時間運営で3,300tの温泉を提供している（表1）。現在、温泉利用施設から温泉1tあたり8元を徴収している。

表1 安波地熱管理センターの温泉提供状況（2000年）

温泉井戸	理療医院	供売社療養院	食糧療養院	公路療養院
温度(℃)	73	59	63	69
湧出量(t/h)	60	35	35	35

(注)「地熱管理ステーション基本情况」により作成。

②大連市政府主導の温泉開発計画

1996年、安波温泉は大連市政府によって「大連安波温泉リゾート区」と正式に命名された。2000年8月、大連安波温泉リゾート区は、「大連安波温泉リゾート区総合企画方案」を内外に募集した。その結果、中国城市企画設計研究院観光企画センター・ハルビン建築大学研究院大連分院・アメリカ世都設計有限公司・日本特殊工芸会社・天津大学城市企画研究院・普蘭店市企画設計院の6つの設計機関が応募し、特色がある計画案が提出された。ハルビン建築大学研究院の「建物や観光スポットの建築特色を考慮する」、日本特殊工芸会社の「自然と共存する温泉地づくり」、普蘭店市企画設計院の「基礎施設の建設を重視する」などの提案を参考にしながら、最終的に中国城市企画設計研究院観光企画センターの案が採用された。⁹⁾ この企画案は、まず開発の時間順序を重視、近・中・遠の3期を分けて目標を設定している（表2）。¹⁰⁾

表2 大連安波リゾート区開発計画（2000～2020年）

目 標	計画内容
近期（～2005年）	道路・送水管・地域基盤の整備 安波川西側と東側を観光区域と住民生活区域に区別 温泉広場・河道・緑化の整備 住民生活区第一期の建設 周辺観光スポットの開発 大連～安波高速道路の開通
中期（2005～2010年）	道路・基礎施設の完備 室内外の水上演習設備の増設 周辺観光スポットの投資強化。観光ルート形成 住民生活区第二期の建設
遠期（2010～2020年）	安波温泉中心、倭湯温泉副中心の観光地スタイル確立 普蘭店北部の経済主導

（注）大連安波リゾート区管理委員会「大連安波温泉リゾート区域総体企画入札募集状況についての報告」（2000年）により作成。

安波鎮は、2001年に遼寧省政府の「100中心鎮」に選ばれ、同年、国家3Aレベルの観光スポットに昇格した。企画案の具体的内容は、目標年次である2020年の安波リゾート区の範囲を305km²、中心地域5km²、人口を2～10万人としている。温泉を核にして、周囲の自然・人文景観と結合し、大連国際海浜観光大都市の延長線上に位置づけて、安波温泉地を理療・保養・生態休暇などの機能を備えた総合観光地にすることを目指している。安波温泉の観光産業の成長によって、地域の農業・観光農業および観光商品開発による収入増加が予想される。さらに、農村地域の基盤整備も期待できる。この報告では、2010年段階で年観光客数延べ100万人、観光業の利益は6.4億元、地域社会の利益は32～45億元に達すると推計した。2005年までにホテル・旅館は77軒、収容人数は3,310人となり、年観光客延べ数は2001年の20万人から2004年の40万人へと倍増した。観光地域は観光サービス区域・観光開発区域・自然風景区域・特色景観区域・商業サービス区域・文化歓楽区域など、利用機能の違いによって5つに分かれている。

③安波鎮の基盤整備

大連市政府は2001年から中国城市企画設計研究院・観光企画センターの「大連安波温

泉リゾート区総体企画」の元に、道路・水網・土地利用・街路灯・緑化・周辺観光スポットなどについての開発を本格的に開始した。その具体的内容は表3のようである。

（2）温泉・観光施設の開発

安波温泉は、清の咸豊年間の1870年に発見された。『復州志略』によれば、「泉眼如湯、不敢染指、稍遠池引水別參之始可浴...」（温泉に触ることができないほど熱く、源泉の近くに池を作り、冷水を加えてから入浴した）、「土人結廬其上為沐浴之所」（土着の人々が草木で洗浴の小屋を作った）というような記述が残されている。

1960年代から90年代まで、地元住民が野菜栽培や冬季野菜貯蔵のために温泉を利用していた。この時期の安波温泉は、ごく普通の農村地域にある小さな温泉地であった。しかし、1980年代後半以後になるとホテルの増加は著しく、2007年現在では80軒を数えるほどの発展を遂げているが、それは同時に多額の投資がなされたことを示している（図1・写真1）。

安波温泉の宿泊施設については、1976年の供売社療養院を初め、1984年の大連市税務局国税育成センター、1985年の安波鎮政府招待所などが開業していた。その後、1986年から1990年までに14軒のホテルが

表3 安波鎮の基盤整備建設状況（2001～2006年）

区分	年次	内容	投資額
道路	2001年	市レベル道路俣聶線8.27km	438万元 (138)
	2002年	市レベル道路福安路4.6km	306 (36)
	2002年	東西大通路永青線安波境内4.7km	782 (62)
	2003年	市レベル道路報聶線2.7km	161 (11)
	2004年	村レベル道路安七線4km	127 (7)
	2005年	市レベル道路興唐線17.6km、熊城線5.6km 天和線10.8km、金台線7.8km	580
	2008年まで	道路を現状の「二縦二横」→「三縦三横」残り 「一縦一横」4.1kmを整備	4,500
水路網	2002年～ 2003年	浄水工場24892㎡完成 水道管線：30km→60kmに延長 水供給量：600t→4800tに増加 供給世帯：650軒→2000軒 供給人口：5000人→10000人	1,454
	2004年	温泉水管線を10km、103軒に提供 5km延長、保温措置を整備	300 800
	2004年～	下水処理場工事開始	1,300
		ごみ処理場建設工事	10
土地利用	2006年まで	外資開発に800畝徴収（耕地500畝・ 山地斜面300畝）耕地補償金1.3万元/畝 山地補償金0.3万元/畝	740
		道路用基盤整備徴収土地200畝	
		鎮内23世帯転居・110部屋撤去	200
		住民住宅用建築面積2万㎡	2,000
		鎮内主要道路両側レンガ舗装3万㎡	120
		住民150世帯転居：マンション4棟 （建築面積1.2万㎡）	1,000
		商店33軒（建築面積6,000㎡）	600
		土地面積4531㎡、強盛集貿大厦マンション	2,400
街路灯	2005年まで	100個街路灯設置	
	2008年まで	200個設置	100
緑化	2005年まで	区内120万本、草1.5万㎡、花壇30ヵ所	800
	2005年～ 2007年	木140万本、各種花100万本、花壇300ヵ所 浄水場・下水処理場・街路・安波川岸緑化	400
観光スポット開発		金店沙屯千年銀杏木・大連市保護文物二龍山報恩寺 玉皇廟・俣湯青銅器時代大石棚観光スポット開発 草廟房500㎡、動物狩場・乗馬場用七道房ダム水上 公園・釣り場など観光項目の開発進行中	

（注）大連安波温泉リゾート区管理委員会「政府工作報告」など相関資料により整理作成。
（ ）内は投資額のうち鎮負担額。

建てられた。そのうち、投資金額100万元以下の施設は9軒、ベッド数50以下の施設は12軒を占めた。1986年の大連市一汽会社の安波育成センターと1989年の普蘭店公路局公路療養院の2軒は国営資本であり、それ以外の12軒は全部個人投資で、11軒の経営者は安波と周辺地域の出身者であった。

1991～1995年に開業した9軒のうち、国営企業は電業療養院（1991年開業）、水利安波育成センター（1992年）、瀋陽烤漆廠療養院（1993年）の3ヵ所、個人投資は6軒であった。個人の経営者は地元以外では、大連市2人、韓国1人であり、1軒あたりの投資金額は約85万元であった。

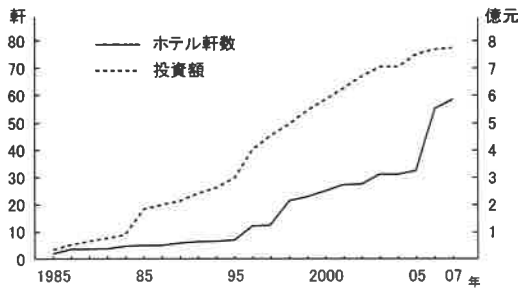


図1 安波温泉のホテル軒数と投資額の推移 (1985～2007年)

(注) 安波鎮の資料により作成。



写真1 安波温泉の景観 (2006年)

(注) 于航撮影。

1996～2000年の5年間に、33軒ものホテルが開設された。このうち、1996年に開業した大連安波温泉度假村は、現在安波温泉リゾート区内唯一の3星ホテルである。出資者は大連市建設控有限公司（大連市住宅委員会）の子会社であり、総投資金額は3,707万元、敷地面積5.2万㎡、建設面積1.5万㎡におよぶ。大型総合ビル1棟、別荘13棟、客室126室、ベッド数226、収容人数400人の能力を持ち、プール・室内サウナ浴・温泉浴・中医マッサージ・リハビリテーション・飲食・宿泊・会議・娯楽などの各種機能を揃えている。いまひとつ注目すべき施設は、1998年に大連福慧房地產開発会社が投資した3星に準じる大連福慧温泉山荘である。第1期投資金額は3,000万元、敷地面積2万㎡、建築面積1.5万㎡、客室60室、別荘8棟、カラオケ個室10部屋、200人を接待できる宴会場と多目的用ホール・バー・ダンスホー

ル・プール・サウナ室などを擁している。増え続ける観光客のニーズを合わせ、2005年末までに大連福慧温泉山荘がさらに4,000万元を投資し、建築面積8,000㎡の大型室内水上楽園や3,060㎡の露天和風温泉洗浴施設が追加された。2006年以後、エコ生態レストラン・ゴルフ練習場・テニスコート・ゲートボール場の3期工事が進んでいる。この時期の個人投資をみると、24軒のうち投資金額50万元以下4軒、50～100万元12軒、100万元以上8軒であった。

2001～2005年の開業軒数は14軒であり、この時期には800万元を投資した江河賓館や1,000万元を投資した公明温泉療養院などのように、個人投資であっても高額化してきた。これまで国営企業の一部であった温泉療養院は、個人が経営権を得るような変化が現れた。

2003年、日本資本の大連実華録スキー工業有限公司が3,000万元を出資、総面積30万㎡の大連安波温泉スキー場を造成した。2003年11月～2004年3月までに受け入れた観光客はスキー客を中心に延べ5万人に達し、安波の他産業に約1,500万元以上の利益を還流させた。そのほか、2003年に敷地面積4,531㎡、建築面積3,000㎡の服装雑貨食品商店が誕生し、強盛集団商貿大厦や普蘭店天恒商貿有限公司が1,000万元を投資して、地元住民と観光客向けの安波農副商品観光スーパーマーケットなど宿泊施設以外の施設を開業した。

2006年、大連建達集団が総投資金額1.2億円の5星の鴻縁温泉山荘を開業した。敷地面積33万㎡、建設総面積3万㎡におよぶ。1期の建設は、別荘15棟、建設面積4,200㎡で、メインビルは面積3,450㎡・飲食用ビル3,600㎡・温泉洗浴用ビル4,600㎡・リハビリテーションセンター1,000㎡のように配置され、さらに、人工湖やヨットクラブ・ゴルフ練習場・水上遊楽などの機能も兼備している。2006年5月に仮営業を開始、10月

に正式営業に入り、その収容能力は450人である。これらの施設は、大連市冬期「3S」観光の施設として、期待されている。そのほか、大連普蘭店供給集団と日本AGC都市設計有限会社の共同開発で、400万ドルが投じられる予定の東北地方初の庭園式露天温泉娯楽施設の大連安波温泉新楽園があり、大連中集建設集団が投資した国際会議センター(3,000万円)や大連聖亜海洋集団が投資す

る予定の安波温泉新城(2億元)などがある。これらの大型観光施設の建設は、安波温泉地区を大きく変貌させることになる。

ここで、温泉観光開発が始まった1980年代前半、開発が進んだ1999年、さらに2006年の3時点の土地利用を示したのが、図2である。純農村地域が次第に都市的な観光空間へと変貌していく様子が明らかとなる。

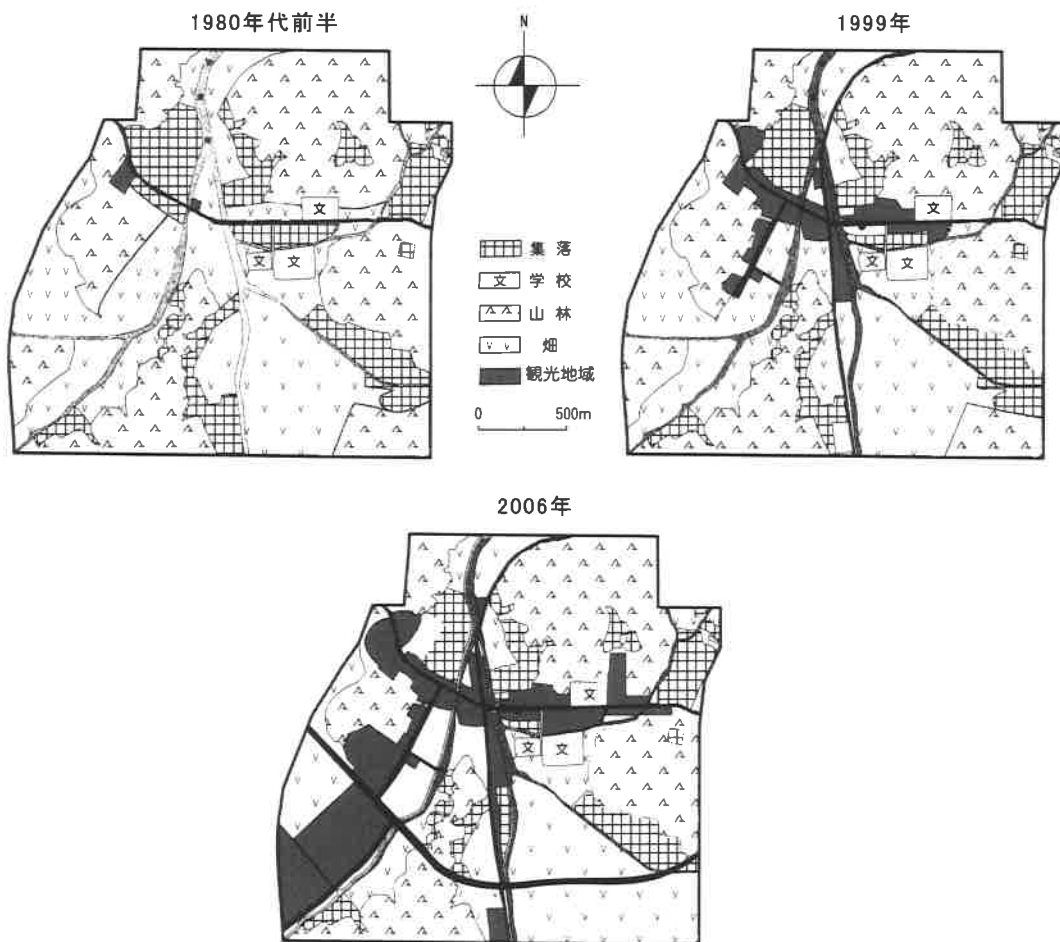


図2 安波温泉の土地利用変化(1980年代前半・1999年・2006年)

(注) 安波鎮の資料と現地調査により作成。

4 宿泊客の特性

ここでは、宿泊客の動向について述べる。宿泊客数は2003年の1.7万人から2004年3.4万人、2005年3.1万人、2006年3.7万人へと急増している。観光収入は、高級施設

の開業と物価上昇を背景に、2003年199万円、2004年540万円、2005年610万円、2006年740万円へと増加した。

図3は安波鎮の資料から宿泊客の季節性をみたものである。

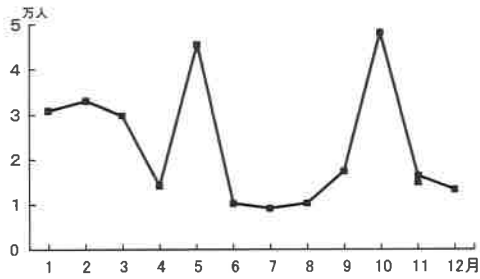


図3 安波温泉宿泊客の季節性 (2005年)

(注) 安波鎮資料により作成。

中国のほとんどの観光地と同じく、安波温泉リゾート区の毎年の観光ピークは、「五・一国際労働節」の5月と「十・一国慶日」の10月である。5月のゴールデンウィークが過ぎ、6月から温泉浴を利用する客が一気に減少し、代わって海水浴が楽しめる沿海の観光地へ出かける客が増える。この状況は9月まで続き、秋期に入ると温泉浴を求める客が増える。十・一黄金週の到来とともに、1年中で第2のピークを迎える。かつては、冬季に客数は減じたが、2003年12月4日に大連安波スキー場がオープンして以後、冬季はオンシーズンとなった。スキー場開業の影響を受け、温泉宿泊施設は旅行会社・スキー場と連携するようになっていく。

ここで、スキーシーズンの1月のデータを見ると、スキー場の開業は安波リゾート区内の飲食業やホテル業、農産物や労働力を提供している周囲の農民などに利益をもたらした。安波鎮政府の観光責任者は、スキー場開業の経験から温泉と運動の補完性を改めて認識し、夏期のオフシーズンを改善して、観光客を呼ぶためにリゾート区周辺の老帽山・鶏冠山・道視溝に登山道を整備するなど、設備や観光路線の充実に努めた。その結果、2006年にスタートした「安波温泉+老帽山登山+田舎料理」をテーマにした夏期近郊ツアーが、大変人気を呼んでいる。

安波温泉の観光客特性については、筆者が独自のアンケート調査を実施した¹¹⁾。その概要をまとめると、90%は県内から訪れ、

そのうち大連市区が60%、普蘭店市・瓦房店市が30%である。県外客は遼寧省および隣接の吉林省と海上路線で連結している山東省からの客が多いほか、日本・韓国・ロシア・オーストラリアなどの外国人観光客も増えている。男女比は6:4で、男性観光客の方がやや多く、年代では30~40代の現職が40%弱、60以上の退職者が30%が多い。職業は会社員・退職者・公務員・自営者の順である。年収は、筆者が2004年に遼寧省の龍門湯温泉と湯崗子温泉で行なった調査では中間層が圧倒的に多かった結果と比べ、安波温泉では5,000元以下のやや低所得者と3万元以上の高所得者が多いことが明らかになった。1980年代に設置された会社温泉療養院、90年代に作られた数多い小規模温泉宿泊施設と近年の高級大規模温泉ホテルが同時に存在しているリゾート区内の構造は、低所得者の療養志向と高所得者の観光志向の両極化した結果をもたらしている。

客層は、すでに家族単位の10人以下の少グループに特化し、20人以上のツアー客は4分の1程度に過ぎない。宿泊客の目的は、温泉療養が40%強で多く、保養を加えると3分の2を占める。観光が3分の1の構成である。来訪回数も近隣からの客が多いこともあり、3回以上のリピーターが3分の1である。温泉・スキー・登山など多様な観光資源を取り込んだ安波温泉リゾート区は観光客に高く評価されており、ほとんどの客がまた来たい(ぜひ来たいは3分の2)と回答している。

5 農民の観光業への参加

2004年、安波温泉鎮リゾート区内の人口は4万1,000人であり、そのうち農業人口は3.8万人で全体の93%を占める。近年の安波温泉の観光化にともなって、第3次産業による収益が増えたが、第1次産業に従事する農民もいまだに多く、観光業での兼業による収入も増加している。スキー場がオー

ブシした前後の2004年と2003年の収入を比較すると、2004年の安波鎮農民総収入は1億4,311万元であり、前年の9,865万元より4,446万元も増加し、1人当たりの収入は

2,596元から3,766元へと、1,170元も多くなった。

ここで、地域住民の生活変化についてまとめると、表4のようである。

表4 安波鎮地域住民の生活変化(2006年)

	性別	年齢	家族構成	現職業	前職業	現在の生活状態
1	女	26歳	3代8人 両親・兄家族3人 主人・子供1人	ホテル フロント	農業 主婦	暇な季節にホテルでアルバイト月収600元 家族の養蜂場で手伝い
2	女	52歳	3代5人 母親・主人・子供 2人	小規模温泉 宿泊施設 経営	農民 主婦	1995年に借金して開業年間営業収入6万元
3	女	38歳	2代2人 子供1人	ホテル厨房 手伝い	農民 主婦	5年前、主人が出稼ぎ先で事故死、親戚の紹介でホテル厨房で手伝い。1日3食付月収450元
4	男	70歳	4代6人 息子夫婦・孫家族 3人	農民	農民	孫夫婦大連市へ出稼ぎ 月収1人800元 ホテルに豚肉・鶏・羊を提供土曜市場で自家栽培野菜販売家族平均月収500元
5	男	46歳	2代3人 妻・子供	タクシー 運転手	農民	2001年親戚・友人から金4万元を借り、中古乗用車を買ひ、主に安波一大連、安波一普蘭店の間で、観光客の送迎使っている。平均月収2千元
6	男	42歳	2代4人 妻・子供2人	現場アル バイト	農民	道路・橋やホテル建設・内装などの工事現場での仕事。1日30元～40元
7	女	74歳	1代1人	小物販売	農民 主婦	子供達は都市部の大学卒業都市部で就職・結婚したので、1人で居住。子供から毎月100元程度の送金。アヒル20羽を飼育、毎日ホテル前で自家製塩漬アヒル卵を観光客に販売1日10元程度の収入
8	男	69歳	1代2人 妻	無職	大連市 会社員	退職後、憧れの農村生活実現2001年庭付き民家購入、3万元野菜栽培開始 年金生活

(注) 大連安波温泉リゾート区管理委員会「政府工作報告」と筆者の聞き取り調査により作成。

リゾート開発前の農民、特に主婦層がホテルのフロントや厨房でのアルバイト的な職についている。また、親族などから多額の借金をして中古車を購入し、安波温泉と近隣年を結ぶタクシーを運行して、月2,000元の収入を得ているかつての農民もいる。また、開発前後とも、農業であることは変わらないが、豚・鶏・羊などをホテルに出荷し、土曜日で野菜などを売って生計にプラスにしているものもいる。

6 むすび

安波温泉の観光開発について研究した結果、以下のようにまとめることができる。

- ①大連市を始め、安波鎮など地方政府の全面的な支援があったことは、純農村地域が温泉観光地へと発展できた一つの重要な要因である。安波温泉の開発は、「政府主導型」であったと言えよう。
- ②1980年代後半から90年代にかけて、遼寧省内の国営企業が職員を休養・療養させるため、温泉地に造る温泉宿泊施設は、一般市民にも開放されるようになってきた。その経営権も、個人が一括払いや割賦支払いなどの形で、獲得するようになってきた。
- ③大規模観光開発がなされる前は、地元資本による小規模旅館経営が主流であった。その後、大都市の企業による多額の投資がみ

られると同時に、多数の個人も経営に参加して、宿泊施設が超小規模と大規模に両極分化した。

- ④早期開発の小規模旅館は中心街路沿いに分布している。経営形態は多彩であり、長年温泉旅館一筋で経営してきた「専業型旅館」もあり、飲食業から一部旅館業へ転化した旅館や旅館業から一部を飲食業へ転化した「兼業型旅館」も少なくない。近年、大型温泉施設が成立した影響で、経営不振旅館が廃業し、他業へ転換するケースもある。
- ⑤2000年以降、多額の投資が可能な外来資本の総合的大規模開発が中心となって行われた。近年開発された温泉宿泊施設は、建物が集中している中心街から離れた畑や山林の広い土地を求めて分散立地している。安波度假村がリゾート区の西口、鴻縁温泉山荘が南口、温泉安波新楽園が東口、国際会議センターが北口というように、交通便利の場所は大規模観光施設に占拠されている。最近では、総合的機能が強く、宿泊施設・飲食店・運動場・娯楽場などが設けられており、園内で消費してもらおうとの狙いが伺える。
- ⑥宿泊客の特性をみると、近隣地域からの客が多く、温泉療養・保養を目的とした比較的低所得層とスキーや一般観光を目的として高級ホテルに滞在する観光客とに両極化している。
- ⑦地域住民の生活変化をみると、農業をやめて小規模旅館経営に参加したりタクシー運転手となって収入増を得たものや、農業との兼業でホテル従業員となっている状況が明らかになった。特に、主婦層が従来の農業を手伝いながら観光業にアルバイト的に出て、現金収入を得ている。

- ⑧以上のように、観光客のさらなる増加が予想される高度経済成長期の実態を踏まえて、いまこそ、地域の環境保全を最優先にした施策を検討することが不可欠である。

本稿の骨子は、日本温泉地域学会第8回研究発表大会（2006年11月28日、鹿児島県霧島温泉）において発表した。ご指導をいただいた城西国際大学観光学部の山村順次教授に感謝申し上げます。

注・参考文献

- 1) 于航 (2005): 「中国遼寧省における温泉地域の現状と課題に関する研究」。千葉大学大学院教育学研究科修士論文, 50～60頁。
- 2) 于航・山村順次 (2005): 「中国大連龍門湯温泉の開発と温泉利用」。温泉地域研究, 5号, 31～41頁。
- 3) 于航 (2005): 「中国遼寧省鞍山市湯崗子温泉の発達過程と温泉利用」。千葉大学地理学研究報告, 16号, 31～42頁。
- 4) 王艶平 (2004): 『中国温泉旅游』大連出版社, 215頁。
山村順次 (2004): 『世界の温泉地 (新版)』日本温泉協会, 271頁。
- 5) 山村順次・王艶平 (2001): 「中国南部における温泉地の地域的展開」。千葉大学地理学研究報告, 12号, 1～11頁。
- 6) 安波鎮所蔵資料「安波地熱水門地質」(1970年)による。
- 7) 安波鎮所蔵資料による。
- 8) 遼寧水文地質工程地質勘察院 (2001): 『安波地段地熱資源調査報告』2～4頁。
同 (2001): 『安波地熱水文地質及び開発状況』。1頁。
- 9) 中国城市計画設計院・観光計画センターと大連安波温泉リゾート管理委員会 (2001): 「大連安波温泉リゾート区総体計画及び詳細企画」。6～10頁。
- 10) 大連安波リゾート区管理委員会 (2000年): 「大連安波温泉リゾート区域総体企画入札募集状況についての報告」。2～6頁。
- 11) 2006年9月、観光客に対してアンケート調査をしたが、サンプル数は103枚であった。

高齢社会における温泉療法の役割

The Role of Balneotherapy in an Aging Society

小 國 隆 男*
Takao OGUNI

キーワード：温泉 (hot spring)・温泉療法 (balneotherapy)・高齢社会 (aging society)

1 はじめに

世界に類を見ない速度で高齢社会になったわが国で、今後予想される問題は、虚弱・障害を持った高齢者が増加し、彼らの体力の低下が日常生活動作 (activity of daily living : ADL) に影響して、生きる楽しみや目標を失うことである¹⁾。また、高齢者ケアには「障害のある人をいたわり、生活全体を世話する」という福祉的アプローチと、「障害の原因を客観的に分析し、それに基づいて改善ないしは少なくとも現状より悪化しないようにする」という医療的アプローチが必要であり、しかも両者は融合されなければならない²⁾。

また、人間として質の高い生活 (quality of life : QOL) を実現することは、年齢にかかわらず万人の望むところである。そのためには、身体運動を生み出す筋機能を一定水準に保つことが必須条件であり³⁾、温泉を活用した対策が講じられることも重要であろう。

本稿では、温泉療法について先駆的な研究してきた八田秋・高安慎一・三澤敬義などの温泉医学者の諸説をとりあげつつ、人々の健康保持に対して温泉の果たす役割を概観することにしたい。

2 温泉の作用

泉浴の時には、固有の化学的作用の外に、水の機械的作用や浴温による温熱作用などの物理的作用が働く。これは、淡水浴の場合と同様である。八田 秋によれば⁴⁾、以下のよ

うにまとめられている。

温泉の作用としての第1は、浮力の作用である。いま肩まで浸かると、水面上の頭部の重さは体重のほぼ7%に過ぎず、水中の体の容積と同様の水の重さに相当する浮力が働くと、その時の体重はほぼ1/9になってしまう。また、浴水の濃度が高いと、さらに浮力が増大する。筋肉の力が衰えていたり、痛みなどのために歩行が出来にくい場合でも、浴中では足への荷重が減退するので歩行の練習が容易となるし、動かせるかどうか分からないような四肢でも、浴中だと動かせる。そのため、より早く運動訓練ができるので回復を早める。それには、歩行浴・運動浴・ハーバートタンクなどが用いられる。

第2は、温熱作用である。これは古くから注目されていて発表も多いし、日常の入浴で誰でも経験済みと思われるが、その作用は極めて多岐で重要である。系統的な研究の結果、温熱作用は浴温が高いほど早く深部に浸透するが、組織層が厚く皮下脂肪が多いほど、また局所の血流量が多いほど温まり方が遅い。人体は全体として温まりにくく、冷え易いのである。

呼吸に対しては、はなはだしい熱浴や冷浴の場合には、それぞれ複雑な奇異的な防御反射が表れるが、これを除くと一般的に行われるような温浴では深くなり、冷浴では浅く、やや不整となる。したがって、肺胞内CO₂は温度に比例して減少する。ところが、O₂

* 弘前大学大学院 (Graduate School of Hirosaki University)

消費量はこれとは関係なく、代謝的不感症(32～38℃)で最も少なく、その上下では増加する。

血行器に対しても、はなはだしい熱浴や冷浴は、複雑で奇異的反射作用を伴うことは、呼吸器の場合と同様である。入浴することで、内臓血管の反射的収縮と細胞間液ならびに貯蔵血の動員が行われる。この際、脳と腎血管とは収縮しないと言われる。さらに、末梢血管抵抗の減少と血流速度の増加が見られるが、血圧の増加はさして著しくはないが、浴温が39℃以下の時や漸温浴では経微である。冷浴の場合には、大体この逆と考えて良い。

心臓に対しては、温浴は博動数と博出量とを増すことによって、分時博出量を増し、循環血液量の増加に対処する。しかし、その最高は39.7℃の時で40%に及ぶが、浴温が40℃をこえると、脈拍数の増加に伴い得ず、かえって心博出量の減少をきたす。なお、代償不能の心臓では分時博出量の増加はない。

3 温泉の生体反応

温泉利用の歴史は、人類とともにあるといっても過言ではない。しかし、それがあまりにもとらえどころがないため、科学的な取り扱いが難しかった。HOFFMANN⁵⁾に始まる温泉の泉種別分類が可能とはなったが、そのみで温泉作用のすべてを解明することはできなかった。そこで、温泉の生体反応を克明に追究し、その成績から温泉を比較検討することに解明の手がかりがあるように思われる。

以下に、今日までに解明されている点を明らかにし、さらに温泉を使用した際に、生体内にどんな反応が発生し、どのような病気にどの程度効くのであるか、八田の説⁶⁾をまとめた。

(1) 自律神経作用

浴温の作用として、温浴ではcholinergic(交感神経節・副腎髄質に刺激作用)に、冷浴はadrenergic(副腎・多種ホルモンを分泌)

に作用する。これまで、泉浴は生体の各臓器に対してcholinergicに作用することが数々の角度から示され、その作用機序としては、BOHNENKAMPF⁷⁾の脊髄神経説、ZAKとLandau⁸⁾の液性伝播説が挙げられる。

皮膚の表面には、知覚神経と同時に自律神経も分布しており、一種の自律神経器官ともみられる。これに泉浴のような刺激が加わると、脊髄を経て中枢神経に伝達され、自律神経作用をおこし得るであろうし、また、物理的的刺激により局所の皮膚中にヒスタミンとコリン様物質が増すことから、泉浴後にも皮膚中に生成されたような物質が、液性伝播によりcholinergicに働きかけるのである。

KUHNAU⁹⁾は、皮膚のKが増加すると副交感神経末梢が刺激され、acetylcholinを産生するFELDBERGの説から、泉水中の成分、たとえば、アルカリ金属またはアルカリ土類の塩酸・硫酸・磷酸塩などは、皮膚に吸着されて局所の鉍質移動をおこし、皮膚自身または自律神経末梢を刺激して、cholinergicに作用するという鉍質移動説をたて、液性伝播説を補足した。

(2) コルチコイド作用

温泉の全身作用の中で、自律神経作用について重要なのは、コルチコイド作用である。それが下垂体・副腎系を介するstressorとしての作用であるにせよ、その他の原因によるにせよ、血中のコルチコイド量を高めるような作用をコルチコイド作用と呼ぶこととする。

温泉によるコルチコイド作用の発現機序としては、連浴・連飲の前期に見られる自律神経系のゆすぶりや、ヒスタミン作用などが各臓機能の調整として血清蛋白量の増加、泉水成分の適度な吸収などによる下垂体・副腎系の調整が考えられる。このような温泉のコルチコイド作用は、全身的調整として自律神経・ヒスタミン・水分移動・吸収成分の作用など総合的な結果と解されている。これらのことから、コルチコイド作用は温泉の治療効果の

中でも、大きな役割を占めていると言えるであろう。

(3) チオール作用

チオール酵素は、生理活性を発現する上で不可欠なSH基（システイン残基）をもつタンパク質のうち、酵素作用を示すものを言う。SH基が活性中心に存在する場合だけではならず、固有の高次構造を維持するために必要な重金属（Hg,Cu,Cdなど）や有機水銀化合物（ ρ -クロロメクリ安息香酸など）などもある¹⁰⁾。

4 温泉の老化現象

温泉療法の多年の経験によって、湧出した直後の新鮮な温泉は湧出時を経過した温泉と比較して、その効果は低下する。即ち天然に湧出した新鮮な温泉が湧出直後から時間が経過するに従ってその性質を変化させる現象は、温泉の老化現象と称されている。

近年、温泉の老化現象は温泉学研究者の注意を惹き、数々の生物学的実験や科学的または物理化学的実験を試みて、各方面から老化現象の実態を明らかにしようとの努力がなされている。ここで、高安慎一の研究¹¹⁾を紹介する。

山口県の俵山温泉では温泉の老化現象が著明に認められ、湧出直後の温泉の触媒作用も強いにも拘わらず、時間の経過と共に触媒作用は速やかに減弱することが明らかにされている。高安はその他、数々の実験を試み、温泉の老化現象について次の見解を述べている。すなわち、温泉を構成する水とその含有鉱質成分の一部は處女水に由来するものは地上に湧出した後、特殊エネルギーを放出して安定状態に移行したものが老化現象を呈する。したがって、湧出直後の温泉と湧出後時間を経過した温泉とは自らその作用の状態が異なるものであるために、入浴者に対しても影響が著しく異なるものであると説明した。

元来、地下深く高温高圧の状態から、いわゆる處女性の温泉が地上に湧出する時は、そ

の温度と圧力が低下し、かつ空気と接触するために、状態の変化により温泉に数々の変化が起こることは当然である。たとえば、温泉の含有しているガス・ラドンや遊離炭酸・硫化水素などが逸散して温泉のpHが変化したり、さらには溶解度も変化する。したがって、新しい温泉が湧出後数々の化学的変化や物理化学的変化を起し、生物学的作用にも変化を来すことも当然であり、今後の科学の発達によりその実態の解明が期待されている¹²⁾。

5 一般虚弱者および快復期患者

滲出性体質を始め一般虚弱な小児の健康改善、または快復期患者の治療促進などは、温泉療法の奏効する適応症の1つである。この場合、温泉が与える刺激を適当に按配し、また他方に休養と練習の手段を適当に配置する時は、よく初期の目的を達成させることができる。しかし、この種の目的に利用されるべき温泉は、これを泉質の上からいえば食塩泉（塩化物泉）や炭酸泉などであって、鉄泉などもまた応用される。その選択は患者の状態に応じて決定すべきであるが、これらのうちもっとも広く利用されるものは食塩泉である。食塩泉によって与えられる刺激の強さは、その濃度・温度および浴法その他に関するものであるから、過敏な小児や衰弱のはなはだしい快復期患者などにおいては、濃度その他の選択に注意しなければならない。この際、もし刺激が過強であった場合には浴後蒼白となり、疲労し、不機嫌となり、あるいはまた食欲減退というような症状が現われる。したがって、温泉の濃度・温度・入浴時間およびその回数については注意して、個人に適応するように、巧みに按配することを要する。これら手技の個人差は、実際上かなりの影響をもたらすものであって、最適の場合にはじめて最良の効果を上げられることを忘れてはならない。すなわち、与えられるべき刺激の強さは、よく患者の体力を参酌して弱より強へ、段階的にその強さを増していく必要がある。

これは、1人1人の患者に対し、応用諸法がその身体に与える状況を注意観察し、これを目標として臨機にその度合いを加減しなければならない。この加減の巧拙が、治療成績に多くなる影響を与えるのである。この時に、療養地の気象状態が大きく関係し、特に海岸または高山の気象が推奨される。はなはだしく虚弱な患者に対しては、はじめは単に新鮮なる空気のみをもって満足し、次に海岸気象へ、さらに最後に高山気象へと順序を追って刺激の強さを増加していく。この際に、考慮を要するのは患者の平常の居住地の気象との相異の程度である。その相異が甚だしいほど、刺激を与えることが激しいことを忘れてはならない。たとえば、一般平地の気象は概念的には緩和なものであるが、平素高山に居住する人が急に平地に転地した場合には、大いなる刺激を受けるのである。それゆえ、療養地の気象を考慮する場合には、常にまず患者の居住地の気象状態と対比選択する必要がある。

都会に居住する虚弱かつ神経過敏の小児が、海岸地域に滞在することによって、よくその体力を回復することは広く知られている。その際、単なる体重の増加だけでなく、血色素および赤血球の増加、筋力の向上、肺活量の増加など様々な好影響を受け、さらには寒冷刺激に対する皮膚の反応が活発になることで風邪に対する抵抗が強くなることが多い。これらの良い影響は、海上よりの空気や海岸における日光の治療的効果によることが多いのである。海岸や海上の日光が皮膚に与えた刺激の結果、著しくガス代謝の度を高めることはすでに良く知られ、血色素の増加やその他の良い影響は、主としてこの原因によるものと考えられる。海岸気象に対し、高山気象もまた良く栄養状態の向上と血流の再生を促すので、高山気象は刺激気象とも名付けられ、その作用は生理的諸機能の興奮および向上に基づくと説かれている。しかし、これらの温泉並びに気象によって与えられる好影

響は、療養地における滞在期間が長引くほど一層顕著であるが、滞在によって一度収めた好い効果はたとえ療養地を去って郷里に帰っても、その後長く身体の良い状態を維持し続けるのである¹⁹⁾。

6 考察

わが国は、自然の温泉国であって国内至る所に数々の泉質の温泉が湧出している。これらの温泉の湧出量は非常に豊富であり、かつ温泉の温度が高いことと泉質の種類の多いこと、さらに温泉地の風光明媚な勝景と相俟って世界各国に類をみない。また、神代の時代から各地の温泉は、湯治といわれて広く療養の目的に利用されてきた。

一般に、温泉は各国において内科的疾患のほか、外科的疾患や皮膚科または婦人科的疾患などの患者の治療にも広く適用され、その療養的効果のあることは周知の事実である。たとえば、わが国の温泉は昔からリウマチ性疾患や神経痛・胃腸病などの内科的疾患の療養のみならず、外傷・創傷・痔・戦傷などの外科的疾患、慢性婦人科疾患ゆえの不妊症、あるいは慢性皮膚疾患や梅毒などの皮膚科的疾患の治療にも適用され、その効果が認められている。その他、微温の温泉は脳溢血による半身不随や小児麻痺その他の神経麻痺の後療法としても適用され、さらには興奮型の精神病患者にも、微温の温泉はその生体に対して鎮静作用効果があり適用されている。このように、温泉はわが国でも昔から医薬と共に疾病の治療に適用されてきたのである。主に慢性疾患については、温泉療法は最も適当な療法である。温泉は、その泉質により含有成分が異なるから適応症も異なり、温泉温度の高低によっても適応症と入浴法が異なる。また、温泉地の気候によって、たとえば標高の高い地方の高山気候や海岸における海浜気候等のため、あるいは冬季気候の温暖な地方にある温泉地などでは、温泉療法はさらこの気候療法をも加味して療養を行うことが出来る

利点がある。

しかし、わが国のこれまでの温泉療法の、はたして完全なものであるかと言うと、残念ながら決して理想的かつ科学的であるとする事は出来ない。すなわち、わが国の温泉療法の2千年来民間において盛んに行われてきたが、従来は医学者や研究者がこの温泉療法にほとんどかかわることなく、民間療法の域を脱していないと言っても過言ではない。また、わが国の温泉療法は古くからの経験療法であるため、長い年月をかけた尊い経験の結晶として、今日の温泉医学の科学的研究の結果と全く一致した興味ある浴法や療養法をもっていることもある。

わが国における従来の温泉療法の、温泉に入浴する浴療法のみが、主たるものであった。しかし、温泉利用が盛んなヨーロッパでの温泉療法の、浴療法のほかに温泉を飲用し、または温泉を吸入療法として行い、必ず同時に水治療法・光線療法・電気療法・器械療法・マッサージなどのあらゆる物理療法を併用している。温泉地には必ず医療的設備と研究的施設の完備した温泉療養所や温泉研究所が設置されていて、温泉療法に造詣の深い多数の温泉医が療養患者の診療に従事している。心臓疾患の温泉として名高いドイツのナウハイム温泉には、ギーセン大学温泉研究所とアメリカの富豪 William G. Kerkhoff の寄付になるケルクホッフ心臓研究所の2つの温泉研究所があるほか、規模の大きな温泉療養所があり、8つの温泉浴場もある。また、ハンガリーの首都ブタペストには、184カ所の源泉と38カ所の浴場がある。なかでも、セントゲレルト温泉には広大な施設を有する温泉療養所があり、そこではブタペスト大学の温泉医学教授が出張して温泉療法の指導をしている。

このように、ヨーロッパでは温泉をよく医学的・厚生的に利用し、もっぱら疾病の治療や健康増進の目的に適用されている。一方、わが国の温泉も昔は湯治ともっぱら療養の目

的に適用されてきたが、近代になっていざずらに避暑避寒の具にされたり、あるいは娯楽機関として利用されることが多い。温泉は疾病の治療・療養、さらには疾病の予防と国民の健康増進など厚生的に利用されるべきものであり、温泉とは一種の自然の療養機関なのである。そこで、自然の温泉国であるわが国では、温泉療法を科学的に研究し、この自然の療養機関をよく活用して国民の健康増進を図り、疾病の治療や予防に活用して温泉の天恵の使命を完成させるべき責任がある¹⁴⁾。

7 むすび

今日、高齢社会に対応した温泉の適正利用が急務である。その際、本稿でみてきたように先学の温泉作用の生体反応等について、さらなる解明が大きな手がかりになると考えられる。すでに、半世紀前に指摘された点を整理した結果、さらに応用面などについての研究も期待されていた¹⁵⁾。一方、わが国の温泉地の現状をみると、一般に贅沢視される傾向にあるが、これはわが国に特に見られる現象であって、ヨーロッパ諸国における温泉療法の、平和時においても戦時においても極めて重要視されていることとは対照的である。この現象は、大正の頃から日本国民が温泉の療養機関として認識を忘れて、みずから避暑避寒のためと、歓楽の目的に利用した結果と言える¹⁶⁾。今後は、国民保養温泉地をいっそう充実させて、温泉に対する認識を療養と健康増進の目的を強めることを望みたい。

本稿は、温泉医学先覚者の諸説をまとめたに過ぎないが、今後は最近の温泉医学の研究成果を踏まえて、高齢社会に機能する温泉療法のあり方を検討したい。

注・参考文献

- 1) 久野譜也 (2000): 「高齢者の筋力トレーニング」。体育の科学、52 巻 8 号、617～625 頁
- 2) 高木安雄 (2002): 「高齢者ケアをどうするか」。
- 3) 福永哲夫 (1999): 「高齢者の運動指導」。臨床スポーツ医学、16 巻 9 号、993～1001 頁。
- 4) 八田 秋 (1966): 『温泉はどうして効くか』金原出版、12～15 頁。
- 5) HOFFMANN, (Roald Hoffmann, 1937): 有機化合物・無機化合物を研究、拡張ヒュッケル法による計算機化学的方法を確立し、ウッドワード・ホフマン則の業績により、1981 年にノーベル化学賞。
- 6) 前掲 4)
- 7) BOHNENKAMPF, H (1932): Untersuchung über die Wirkungsweise des Bades. Z.f. die gesamte Physik. Therapie. Bd 43.
- 8) ZAK, E. et Landau, N. (1934): Humorale Nervenreizübertragung in der Haut des Menschen. Wiener klin Wsch. 47, Aug.
- 9) KUHNNAU, (Andre Frederic Cournand): フランス系アメリカ人、生理学者、1956 年ノーベル賞: 生理学・医学賞、心臓カテーテル法の発見、血液循環系に生ずる病理学上の変化の発見。
- 10) 鈴木 肇 (2005): 『医学大辞典』南山堂、1351 頁。
- 11) 高安慎一 (1962): 『日本内科全書』金原出版(株)、49～50 頁。
- 12) 三澤敬義 (1948): 『温泉療法』南山堂、26～27 頁。
- 13) 前掲 12)
- 14) 前掲 12)
- 15) 前掲 4)
- 16) 前掲 12)

鎌倉市における温泉地の地域的変遷Ⅱ

Regional Changes in Spas in Kamakura City, Part II

進藤和子*
Kazuko SHINDO

キーワード：観光資源 (tourist resources)・潮湯 (salt hot spring)・自噴 (natural output)
観光地 (tourist resort)

1 はじめに

世界遺産登録に向けての活動が活発な鎌倉市では、鎌倉時代以降の歴史的建造物や仏像、自然の地形を利用した遺構が多く、これらに目が向けられがちであると言える。しかし、その歴史のひとつコマとして、温泉文化があることを忘れてはならない。他の温泉地との相違点として、温泉旅館や入浴施設に文化人が集い、そこは評論・文学・音楽など現代の文化の礎となる様々な事を語る格好の場所となったことがあげられる。また、遊芸とバクチなどの遊興の場であった温泉旅館もあるという具体的な証言があることにも注目したい。それとは対照的に、自炊湯治の旅館もあったという。このように、様々な使われ方をした温泉旅館が鎌倉にあり、しかも盛況であった時期がある事実は、近代史と照らし合わせる上でも埋もれさせてはならないと考え、本稿をまとめた。

2 研究の目的と方法

鎌倉市のすべての温泉を語るために、前回の調査研究で扱っていない山崎・寺分・由比ガ浜・稲村ガ崎の4ヵ所の温泉地域、および温泉と同様に考えられていた潮湯について調査をした。なお、扇ガ谷・二階堂・十二所の温泉地域についても補足調査を継続した。

山崎と寺分地区には冷鉱泉が湧出している。前回の地域と同じく、文献がほとんど残っ

ていないが、市内の温泉のうちで歴史的には一番古く、鎌倉時代からとの言い伝えもあり、小名にも温泉湧出を物語る名が見られる。

また、潮湯については海水浴が1885(明治18)年に鎌倉の海岸で行われ始め、2年後には、ヨーロッパのタラソテラピーを取り入れた海水を温めて入浴させる健康施設も作られた。

どちらも、娯楽要素と健康維持を兼ね備えた温浴であり、鎌倉という土地特有の入浴文化的要素もあることを文献と聞き取り調査によってまとめた。

3 山崎・寺分の温泉

この地区は、鎌倉市の北西に位置している。JR大船駅と藤沢駅を結ぶ湘南モノレールの富士見町駅・湘南町屋駅間にある丘陵の裾野で江戸時代に湧出し、明治時代から昭和戦前頃にかけて旅館があった。鎌倉郡に属し、山崎と寺分地区は堺を接しており、ともに1948(昭和23)年に鎌倉市に編入された。文武天皇(683年～707年)の時からある地とされているが、具体的には山崎は14世紀頃から、寺分は17世紀頃から地名が文書に見られる。地形的には、縄文早前期に相模湾が陸地を侵食した複雑なリアス式海岸の形を残す低山が多数の谷戸を形成している。温泉は、その山麓に土壌が堆積して出来た平野の場所に湧出している。

* 雑誌ライター (Magazine Writer)

山崎地区の温泉旅館は山崎園1軒、寺分地区には陣出温泉・明神温泉・神田温泉の3軒があった。両者の位置関係をみると、山すその田畑続きの地域にあって1キロほどしか離れていない(写真1)。



写真1 山崎園の池の上に建てられた浴室

(1) 江戸・明治初期の文献・記録

温泉湧出の記録でもっとも古いものは、江戸時代中期に調査された『新編相模国風土記稿』¹⁾で、深沢庄寺分村の項には、温泉湧出の記録は見えない。山崎村の項にある温泉の記述によると、「○小名△熱海 阿多美 この地の田間より温泉沸騰す、されど常は冷にして、藻浴すべからず冬日に至れば少く温悦を帯ぶ、土人手足を暖むるの料に充つ(後略)」とある。続いて△湯之本という小名もあげられ、この地にも熱海と同じく温泉が湧いていた。

明治初期に編まれた『神奈川県皇国地誌・相模国鎌倉郡村誌』²⁾では、やはり寺分村の項には記述はなく、山崎村の項に「冷泉 西ノ方村社天満宮ノ西ナル田畔ヨリ湧出ス原質未験セズ硫黄ノ気アリテ疥癬ニ宜シ諸人汲去テ温湯トナシ之ニ浴スルニ功験アリト云フ」と記述されている。

熱海と湯之本という地名は、温泉湧出地に付けられる呼び名であり、日本各地に見られることから、温泉が湧出していたことは間違いないと思われる。また、寺分地区と山崎地区は極めて近く、寺分の温泉湧出地が山崎地区に入っていたとも考えられる。現在も寺分地区で多数の温泉井が使用されているので、

地誌の記述には見えないが、両者の区切りが明確でなかったり、区分の堺が変動していたことがあると考えられる。両者とも、江戸時代には温泉の自然湧出があり、村人が疲れや、傷を癒していたのではなかろうか。

次に、明治期には鎌倉の観光案内書のうちこの地区の温泉の記述があるのは1912(明治45)年発行の『現在の鎌倉』³⁾のみである。地理・地勢・四季の風物・社寺案内・商店の一覧など広範囲にわたった内容が記され、その中の営業一覧の温泉の項に鎌倉町深沢・山崎園の記述がある。また、同誌の広告欄に「天神山温泉・山崎園」の広告が見られる⁴⁾。

(2) 昭和に集められた記録

昭和40年代になり、庶民の生活史の記録が収集されるようになる。鎌倉市教育委員会で発行した『としよりのはなし』⁵⁾と『かまくらこども風土記』⁶⁾が代表的な文献であるが、地域の郷土史家の本や新聞に掲載された記事にも、温泉旅館があったことが記録されている。しかし、場所や規模、営業期間などを実証する文献はほとんどみあたらない。

① 山崎(山崎園)

『としよりのはなし』には、この地の小名・小字が熱海・湯之本であったことが記され⁷⁾、温泉宿でバクチ宿だったという証言が記述されている。

『かまくらこども風土記』には、源朝のかくし湯という項目で1ページ余りにわたり記述されている。内容は、小字が湯之本とあり、田の中に鉱泉が湧出していて、発見の由来は雁が傷を癒していたと聞き書きされている。鎌倉時代には源頼朝も忍んで来た、多くの武将が傷の手当に使ったという事も伝承されている。また、明治になって燃える水があるというので検査をした結果、ラジウムが含まれていた証言もある。

他の資料としては、『鎌倉歴史散歩』⁸⁾の山崎天神の項に『かまくらこども風土記』と同様な内容の記述がある。『庚申塔の里深沢の散歩道』⁹⁾では、頼朝かくし湯の項に山

崎園の規模や由来などが記述されている。

② 寺分（陣出温泉・明神温泉・神田温泉）

『としよりのはなし』には、陣出温泉と明神温泉があった。田んぼにふき出した鉱泉をわかした温泉だったが、よく湯治客がきていたという証言が記述されている。

『鎌倉こども風土記』には、ラジウムを含む鉱泉が出たので、陣出温泉・明神温泉などという温泉旅館もあったといい、『庚申塔の里深沢の散歩道』では、熱海の項に、ラジウム温泉が出て陣出温泉・明神温泉・神田温泉という旅館があったこと、最後の温泉宿は風呂屋として海軍工廠ができる1942（昭和17）年まで続いていたと記述している。郷土史家の木村彦三郎が「鎌倉タイムズ」に連載していた頁なき風土記に、陣出温泉へ吟行に行った思い出が書かれていて、歩いて行った事、その後何度か行き、久しぶりに出かけると無くなっていたなど当時の鎌倉の温泉についてのリアルな状況が書かれている¹⁰⁾

(3) 聞き取り調査

上記の7つの文献を参考に現地で聞き取り調査を行った。面接者は12名で、最高年齢者は92歳であった。このうち、実際に温泉に入浴したことがある者は2名、旅館は見ている2名、経営者の子孫4名、話を聞いたことがある者4名であった。

① 山崎の温泉について

山崎園は山崎地区で唯一の温泉で、旅館の裏山にあたる天神山の中腹に八十八箇所霊場めぐりを造り、その斜面を利用して離れ座敷と浴室を点在させていた。敷地は広く、眼前は一面の水田であるのどかな環境であった。しかし、湯治場ではなく遊興的な要素の強い旅館であったことを、山崎園のあった土地を買い取り、その後鎌倉市へ寄付した人の子息（70歳）の話を列記する。

- 1 三味線の音がいつも響いて、入り口には雪洞が並んでいた。
- 2 池があって、その上へ張り出すように建物があった。離れもあったようだ。

3 近所の方が温泉へ入りに行くことは無かった。

4 源泉は今の引込み線の反対側の位置にあった田んぼの中から湧いていた。そこから竹筒で山に引いて浴槽に落としていたようだ。メタンガスのようなものが含まれていたのではないかと。

5 雁が見つけた頼朝の隠し湯と言っていた。

6 客層は軍人とか河岸（築地）の人もいたようで、裏にあった八十八箇所の石碑に河岸の名が書いてある。

7 戦後すぐに廃業した後も訪ねて来るお客もしばらくはあった。

以上の話を、山崎園の絵葉書と対比してみると、池の上の建物は、家族風呂のような浴室棟のことを指している。源泉の湧出については、証言者は子供の頃田んぼの中の水溜りが温かったことも覚えているが、これは自然湧出で、絵葉書によれば、櫓を組んで湯を揚げている様子を見ることができる。また、博打も行われたことが、絵葉書で見る100年前の横浜・神奈川¹¹⁾の山崎園絵葉書の説明に書かれている。

実際、現地の裏山に残る八十八箇所を調査してみると、高田馬場など東京都内の名称や般若心経の刻まれた石が残されていた。

② 寺分

寺分にあった温泉は、陣出温泉・明神温泉・神田温泉という証言がある。うち神田温泉について資料・証言はない。陣出温泉・明神温泉は経営者の子孫が健在だが、あまり記憶が定かでは無い。

寺分在住の86歳の男性の話によると、次のようである。

- 1 陣出温泉は湯治客ばかりで自炊設備もあった。神明温泉は宴会が多かったようだ
- 2 源泉は現在の湘南モノレールが通る道の州崎の古戦場の碑の傍に櫓を組んで温泉をあげていた。そこに神明温泉があって、

少し離れた泣き塔の傍に陣出温泉があった。竹樋で神明温泉から引いていたかもしれない。

- 3 子供の頃（大正末期）祭りのときにだけ温泉に入れてもらった。風呂は3畳～5畳位だった。ラジウム温泉だろう。この風呂のことを木村彦三郎の随筆では、木の香りのする風呂桶と書いている。明神温泉の子孫の話は、次のようである。

- 1 屋号を温泉と言う。
- 2 年代は分からないが、新築してすぐに火災にあって廃業した。一説によると、将校さんがあまり電気を使いすぎて漏電したと聞いている。

(4) その他資料

宿の詳細についての手がかりとして、絵葉書や旅館の案内書などを調査したところ、山崎園のみ絵葉書が見つかった。

① 山崎の温泉

山崎園の絵葉書の複写 11 葉（鎌倉市近代史資料室所蔵）、山崎園絵葉書 1 葉（絵葉書で見ると 100 年前の横浜・神奈川）に掲載されている。

(5) 現状

(ア) 山崎の温泉

山崎園は建物、温泉井はまったく跡形も無く住宅が建っている。唯一当時を偲ばせる手がかりとして山崎天神の祭られる山の西側の藪の斜面に、山崎園が造った八十八箇所霊場に置かれていた寄進者などが刻まれた高さ 50cm ほどの石柱の一部が転がっているのを確認したが、全部を見つけることはできない。

② 寺分の温泉

温泉宿の建物、当時の温泉井はまったく跡形も無く住宅が建っている。モノレールを挟んで反対側の寺分 1 丁目には、温泉湧出井戸が数多くあり、すべて個人宅で使用もある。4 軒の聞き取り調査をした結果、個人宅の温泉井は明治期からある井戸もあり、地中に入って掘ったほりぬき井戸だと言う。

寺分 1-14 の個人宅は、玄関先に直径 90

センチの土管があって、そこから毎分 4 リットルほどの温泉が湧出放置されている。温泉を受けるバケツには白い湯の花がたくさん浮いていて、色は無色透明で硫黄臭がかなり強く感じられる。手を入れると肌が滑らかになる。この温泉は自由に汲むことができる。以前引揚者住宅があった場所で、当時井戸水として掘られたものらしい。最近、近くにマンションが建ち湧出量が減ったと言う。

寺分 1-16 の個人宅は、明治からあった井戸を道路にするために、一度井戸替えをしたが、無色透明で、微かに硫黄臭がある。自家用にポンプで汲み上げ風呂に利用している。寺分 1-11 の個人宅は、庭に温泉の 2 本の井戸があって、微かに茶褐色、無臭である。1 本は自噴、1 本は手押しポンプで雑水と風呂に利用している。

寺分 1-10 の個人宅は、微かな硫黄臭のする井戸を雑水として利用している（写真 2）。



写真 2 寺分 1 丁目で湧出放置されている温泉。硫黄の香りが漂う

(6) 地質

寺分 1 丁目にある大慶寺旧境内遺跡調査試掘¹²⁾によれば、「地下 160cm に湧水層がある。地質は近世水田耕作土である」との報告がある。この湧水層の水が温泉成分を含んでいるかは、試掘調査では未確認である。

上記の事柄から、寺分では比較的浅い地中からの湧水があり、『新編相模国風土記』などに自然に温泉が湧出していると記されてい

ることの関連が考えられる。現在の住人は、このあたりは硫黄の臭いのする水があちこちで出ると言う。

4 海沿いの温泉

(1) 旧由比ガ浜ホテル

1956（昭和31）年から1976（51）年のホテルの営業時に温泉が湧いており、浴室にラジウム温泉との表示があったと文献¹³⁾に書かれているが、現在は持ち主も代わってマンションに建て替えられ、源泉は埋められた。

(2) 稲村ガ崎温泉

日帰り温泉施設として2001（平成13）年に開設された。雑水用として掘削して湧出した温泉で、泉質はナトリウム-炭酸水素塩泉、源泉温度18度、PH8.7、薄茶褐色、透明である。館内は男女別で、内風呂・露天風呂・源泉浴槽・掛け湯・サウナ・洗い場がある。カランの湯も温泉を使用し、加熱しているが、加水は無い。衛生管理のため、循環と塩素消毒をしている。源泉槽は、かけ流し浴槽になっている。

5 潮湯

鎌倉市において特色がある入浴法が、潮湯である。浴槽に温めた海水を入れて温泉の感覚で使う方法で、西日本にかつて多く見られ、また現在でも残っている入浴法である。明治初期の鎌倉は、ベルツが保養に最適な地として提唱したので、海水浴が行われ、外国人が別荘を持ち、それに続いて日本の政治家や文化人が別荘を持った地であったことは、周知のことである。1887（明治20）年に長与専斎が「海水ハ転地間ノ一大鉱泉ニシテ…」と唱え、海辺に海浜院を創った。欧州にある海水を使ったサナトリウムの保養所を模したもので、ここでは海水の温浴設備（潮湯）を造り、まもなく外国人が多く利用する海浜ホテルとなった。このホテルは、1945（昭和20）年に焼失するまで、潮湯を続けていた。

戦後になると、由比ガ浜で製塩業を営んで

いた者が潮湯を始め、稲村ガ崎・材木座の3ヶ所で、入浴して芝居を楽しんだり、歌や踊りを披露できる舞台があり、食事も出来るヘルスセンター形態の施設を作った。100円温泉と呼ばれて親しまれていたが、各家庭に内風呂ができ、娯楽嗜好も変わってきた昭和30年代後半にすべて廃業した。

製塩業者が製塩をやめて浴場を開いたのであるが、海浜ホテルの潮湯や他の地方の潮湯との関係は定かではない（写真3）。



写真3 稲村ガ崎にあった潮湯

後者の潮湯は海水を温めるのではなく、海水に海草のカジメを焼いて灰にしたものを混ぜて、ろ過して沸かしたという方法が用いられている。

また、これらの施設は、鎌倉にあった温泉旅館のほとんどが終戦前後で廃業した後に出来たものであり、庶民が憩うだけでなく、文化人が集う場所としても機能していた。

町の銭湯でも潮湯の日を設けていたという証言もあり¹⁴⁾、大磯の旅館でも潮湯を行っていた事¹⁵⁾からも、長与専斎が提唱した潮湯の持つ健康増進効果と西洋の潮湯の風習が、鎌倉湘南という地域風土に合って広く知られていたのかもしれない。

6 まとめ

鎌倉市において、調査を行い温泉湧出の確認できた温泉湧出地域は、二階堂・十二所・扇ヶ谷・由比ガ浜・稲村ガ崎・山崎・寺分の

7ヶ所であり、他に潮湯という入浴文化もあることがわかった。

明治末期に温泉旅館が作られ、大正・昭和戦前までが最盛期であった旅館は、鄙びた感じではなく、建物も洒落た風情で、料理にも趣向を凝らしていたようである。

利用者に軍人が多い旅館があるのも、東京・横須賀に近いことが関係している。昭和に活躍した文化人や音楽家・俳優などもこれらを利用して、聞き取り調査の過程で有名人の名がよく口にされた。

また、旅館廃止後も源泉を使い続ける個人宅があること、寺分のように硫黄の臭いのする井戸が数多く使われる地域があることなどは知られていない。

泉質検査表を失ってしまった温泉がほとんどである。簡易試薬と目視で調査したところ、すべて冷鉱泉であるが、泉質は褐色または透明でpHが8以上、硫黄臭のする温泉も多く、源泉は流出放置されている場所もある。これらのデータから、観光資源としての有効利用を考えることも可能であるので、この点を提唱すべく、引き続き文化歴史の考証と温泉湧出の実態を調査していきたい。

また、潮湯についても温泉と同じく鎌倉市における観光地域の要素として活用できる可能性があるので、その効能と施設の使われ方を詳しく調査していきたい。

注・参考文献

- 1) 昌平坂学問所地理局編(1830):『新編相模風土記稿』巻之九十八村里部鎌倉郡巻之三十、三十七。
- 2) 神奈川県(1983):『神奈川県皇国地誌相模国鎌倉郡村誌』鎌倉郡寺分村誌・山崎村村誌。
- 3) 大橋良平(1912):『現在の鎌倉』営業一覧51頁。
- 4) 前掲3)
- 5) 鎌倉市教育委員会編(1971):『としよりのはなし』209頁
- 6) 鎌倉市教育研究所編(1957):『かまくらこども風土記』文生書院、93頁。
- 7) 前掲5)
- 8) 柴崎宜樹(2002):『鎌倉歴史散歩』76頁
- 9) 尾関勇(1989):『庚申塔の里深沢の散歩道』74頁。
- 10) 木村彦三郎(1985):「鎌倉タイムス頁なき風土記」第54回。
- 11) 絵葉書で見る100年前の横浜・神奈川。206頁。
- 12) 伊藤芳郎他(1989):「三浦半島の鉱泉」温泉工学会誌、23巻5頁。
- 13) HP machispa 鎌倉の温泉鉱泉
- 14) 50代男性の証言。
- 15) 絵葉書で見る100年前の横浜・神奈川。245頁。

蔵王の自然と温泉

岡崎傳三郎（山形県温泉協会会長）

蔵王温泉は、身体に刺激を与えやすい強酸性の火山性温泉の加え、高原性の気候風土が虚弱体質の体質改善に効果が著しいこと、人口が密集している山形盆地に属しているため、山形県最大規模の湯治場として栄えてきた。

温泉の発見は、西暦 110 年頃、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が蝦夷征伐に来た際、武将の吉備多賀由（キビノタカユ）に毒矢が当たり苦しんでいた時に、温泉を発見して浴させたところ、すっかり全快したと言う。このことから感謝を込めて、自分の名を残したのが高湯（多賀由）温泉の始まりと言われている。

1949（昭和 24）年頃までは、最上高湯と呼ばれ、米沢市の白布高湯、福島県の信夫高湯と並んで三高湯と称された。

それが 1950 年に毎日新聞が観光百選を募った際に、山岳の部で全国第 1 位になったのを契機として、現在の蔵王温泉に改名された。

蔵王温泉地内にある酢川神社は、873（貞観 15）年に「正六位酢川神社ニ従五位下ヲ授ク」と『三代実録』に記されていることが

ら、かなり以前に温泉を祀った神社であったことがうかがえる。

古代では、火山活動があればそれを祀った神は階位が上がったから、その頃も火山活動があったことが推定される。温泉地も、その頃には形成されていたと考えられる。

従来は、温泉街は酢川の北側（右岸）に沿って形成されたおり、温泉旅館や土産店は酢川神社の参道に当たる道路の両側に立ち並んでいた。

一方、温泉東面の標高 1,600 m～900 m にかけての斜面は雪質とコースに恵まれていることと、アオモリトドマツ帯に形成される樹氷の見事さ、山形市からの地の利に恵まれていることから、明治末頃からスキー場として知られていた。

さらに、1955（昭和 30）年以降、スキー場の大衆化により全国有数のスキー場のメッカとなった。そうなった要因のひとつに、蔵王温泉という一大温泉が基地として控えていたことが挙げられる。

それまでは「子供の湯」と言われて、県内各地から家族連れて湯治のために訪れる人で、特に夏は大変な賑わいであった。

蔵王温泉は食塩を含む火山性温泉のため、本来はあたたまりの温泉でありながら、浴室の構造は硫化水素が通過しやすいように通気性に富んでいたことから、「冷えの湯」と誤解されてきた。そのため、どちらかという湯治客は高齢者層よりも幼児から小学生などの児童を連れた家族が多かった。

また、林間学校なども盛んに行われ、児童の健康増進や体質改善などに利用された。



昭和初期の蔵王温泉

【1955（昭和30）年頃の年齢別湯治客】

0～9歳	40.18%
10～19歳	21.31%
20～29歳	14.05%
30～39歳	11.35%
40～49歳	5.63%
50～59歳	3.74%
60歳以上	3.74%

（山形県温泉誌より引用）

以上のように、蔵王温泉は他の湯治場と大きく異なっていた。

1958（昭和33）年に厚生省（現環境省）から国民保養温泉地の指定を受けたが、次第に、スキー客の宿泊基地に変わり、湯治としての利用形態は少しずつ影を潜めるようになっていった。

蔵王温泉は、蔵王火山北西部の山腹に形成された火山底にあり、自然環境には大変恵まれている。

温泉街は旧爆裂火口のほぼ中央にあり、周囲は標高差300～400mの外輪山として、北に滝山、東に鳥兜山、南は横倉山などに囲まれ、西方だけは酢川の谷が開けている。蔵王温泉及びその付近から滲出している酸性の強い温泉が混入していて、酢川の名はそのために付けられたものと思われる。

さて、蔵王の冬期の樹氷が特に有名なのは、山形県の地形上の特性による。

それは、シベリア季節風が日本海からたっぷり水蒸気を吸い取ってきて、出羽丘陵～越後山に膨大な降雪をもたらすと、季節風は乾燥し、それが冷却されてアオモリトドマツに激突して樹氷を形成するためである。頂上付近でしか見られないこの樹氷は、冬の芸術品でもあり、近年はライトアップされ、一層

幻想的な雰囲気を漂わせている。

蔵王温泉一円の地域は、旧火口底であるため、今も後火山作用として高温の硫化水素ガスが岩石の割れ目を伝わって上昇し、地表近くを流れている酸素の富む水に出会って硫酸酸性の温泉となって湧出しているものと考えられる。

温泉はpH1.3～1.5前後の強酸性で、多量の硫化水素を含んでいる（酸性・含硫化アルミニウム－硫酸塩・塩化物温泉）。

温泉は、温泉街の北部から東南部にかけて、山地寄りに自然湧出しているが、現在の源泉は47カ所（そのほとんどは個人所有）で、湧出量は毎分5,700ℓと極めて多い。

源泉温度は、約45～65℃とさまざまであるが、1950（昭和25）年以降は上昇気味である。

共同浴場は7カ所で、なかでも昔からあった上湯（以前は大湯と言われた）、下湯・河原湯は変わらぬ風情を保ち、人気を博しているほか、1988（昭和63）年にできた「蔵王大露天風呂」はスケールの大きさと、自然を満喫できる環境にあることから、蔵王を訪れる人にとっては大きな魅力となっている。

長い間、スキー客一辺倒の利用形態が続いたことに対する疑問が、ここにきて一般市民のみならず、蔵王温泉関係者からもあがってきていることも事実である。

これだけの気候風土や温泉の泉質の特異性に恵まれている温泉地は、他に余りないことは自覚しながら、ブームに流されてきたきらいがないとは言えない。最近、蔵王温泉の特徴を生かした温泉地づくりの気運が高まっていることは喜ばしいことである。今後、日本温泉地域学会会員の皆様から、一層のご指導をお願いしたい。

シンポジウム

蔵王温泉の活性化

コーディネーター：石川理夫（温泉評論家）

パネリスト：長澤好光（山形県観光物産協会専務理事）

〃：堀 是治（蔵王温泉つるやホテル社長）

〃：森 繁哉（東北芸術工科大学教授）

1 はじめに

2007（平成19）年7月2日（月）・3日（火）の2日間、山形県蔵王温泉において開催された日本温泉地域学会第9回研究発表大会の最終日午後から、「蔵王温泉の活性化」をテーマにシンポジウムが行われた。温泉地の持続可能な発展と活性化は、日本温泉地域学会にとって大きな実践的研究テーマである。地元温泉関係者とともに現状と課題を共有し、今後のあるべき方向を考えていこうという基本姿勢にもとづき、当シンポジウムも公開で行われた。

シンポジウムに先立ち、岡崎傳三郎山形県温泉協会会長より「蔵王の自然と温泉」をテーマに基調講演がなされた。蔵王温泉についての自然・社会環境、地形・地質・温泉の湧出機構にまで詳しくふれた基調講演の内容は、山形県最大規模の温泉地で最も歴史ある蔵王温泉の姿を明らかにするものであり、シンポジウムを進めるにあたって前提となる大切な知識・情報となった。以下、これを受けてのシンポジウムにおいて、各パネリストの方から提起された内容や討論の要旨を報告する。

2 観光的に4つの地域に分けられる山形県

まずパネリストの長澤好光氏から、山形県の観光全般や温泉地の概況が報告された。

1878（明治11）年に山形県の小国から置賜平野（米沢盆地）、赤湯・山形・新庄を抜けて北へ旅をした英国人女性イザベラ・バードは、その著書『日本奥地紀行』で置賜平野

を「東洋のアルカディア（理想郷）」と讃えた。時代は下って、ライシャワー元米駐日大使は「太平洋とは違うもう一つの日本がある」と評している。

山形県はこのように「誇りに思える郷土」で、四季がはっきりしている。食べ物も南の柑橘類以外は何でも実る果物王国である。恵まれた自然と人が渾然一体となり、霊峰月山とともに崇められた山、葉山信仰にあるように「魂と共に生きている土地」である。

山形県は4つの地域に分けられ、それぞれ観光的にも特色がある。一つは、蔵王温泉のある山形市を含む村山エリアである。山寺立石寺など『奥の細道』紀行の松尾芭蕉ゆかりの史跡があり、山形県の県花・紅花の産地でもある。山形県知事が山形県を観光面から全国にアピールするトップセールスにあたり、何をPRしていくかというとき、蔵王温泉を擁する蔵王と最上川・出羽三山は必ず挙げられる。

第二の地域は新庄（最上）エリアである。最上川が流れを西に変える地域で、最上川の舟下りができる。昔は芭蕉が、今では「おしんの舟下り」でも知られる土地である。

第三の地域は、日本海側の庄内（鶴岡・酒田）エリアである。世界遺産登録をめざす出羽三山や日本海交易で栄えた豪商の町・酒田、藤沢周平文学の舞台となった城下町・鶴岡などが観光の中心となっている。

第四の地域が米沢（置賜）エリアで、上杉の城下町・米沢やワインの産地で「まほろばの里」高島などがある。

3 山形県の観光と温泉の現状

山形県の観光全般の現状では、観光客統計の推移から見ると、高度成長期の1963（昭和38）年から右肩上がりであり伸びている。県内観光拠点336カ所の単純集計から、2005（平成17）年時には全県で4,122万人（2カ所以上廻るダブルカウントを含む）であった。

1982（昭和57）年に東北新幹線開業に対抗して、県民一丸となってスタートした「紅花の山形路キャンペーン」の効果は大きく、山形観光の流れをつくり、1992（平成4）年の山形新幹線山形開業へ結びついた。

先の単純集計による4,122万人の内訳を見ると、温泉地は1,228万人で比重が大きい。そして山形県は県内35市町村すべてに温泉があるという温泉王国である。

その山形観光にも、いくつかのポイントダウンが顕著に見られる。スキー（場）は1992（平成4）年度の346万人から現在では130万人くらいまで落ち込んでいる。海水浴場も7割のダウンである。名所旧跡観光も落ちている。その一方で、サクランボ果樹園などの新観光拠点は伸長し、1992（平成4）年度の4倍近く増加している。

蔵王温泉で見ると、1992（平成4）年度に246万8,000人あった観光客が、現在では136万1,000人まで約45%ダウンしている。これはスキー客の激減が影響している。それでも県内の温泉状況からすると、蔵王温泉の集客力や1万人という収容人員数はずばぬけている。2位は上山温泉で102万人。3位は天童温泉で83万人。4位が湯野浜温泉である。

2005（平成17）年度の蔵王温泉の観光客約136万人の内訳を見ると、県外の比率が高く、これは上山温泉も同じであるが、天童温泉では県内の比率が高い。

以上の現況からは、以前のように「スキーと温泉」に依存した蔵王温泉ではなく、温泉資源そのものと温泉地全体の魅力をアピールし、高めることが求められている現状が浮き

彫りになった。

4 蔵王温泉の特色と地元の取り組み

続いてパネリストの堀是治氏から、蔵王温泉の特色とこれまでの取り組みが報告された。

蔵王温泉は、古くは「奥州三高湯」の一つに挙げられ、東北地方の高所に湧く有数の温泉地で、湯治場として知られた。よく温まるので「三日間入ると冬の間は風邪を引かない」といわれ、また、「子ども（のあせもなど）によく効く温泉」として評判で、孫を連れての1週間湯治滞在がよく行われた。以前は林間学校の先として虚弱体質の児童が長い期間蔵王温泉に滞在するため、青年の家が設けられていた。「身体をつくれる温泉」というのが蔵王で、免疫力を高める効果があると考えられる。

それには、蔵王温泉の自然環境と温泉の泉質が影響している。蔵王温泉の泉質はpH1.5クラスで全国2位の強酸性泉（酸性・含硫化アルミニウム-硫酸塩・塩化物温泉）である。そのため殺菌力があるのが一番の特色で、とくに抗生物質がない時代は、マムシの咬み傷や怪我などを癒す効果が期待された。しかも、すべて貴重な自然湧出泉であり、湧出量は毎分5,700ℓに及ぶという温泉の豊かさを味わえる。

そして、海拔880m近い高原の環境にあり、夏は避暑地となり、周囲を豊かな森に囲まれた自然環境の良さを楽しめる絶好の温泉リゾートである。

蔵王温泉は1950（昭和25）年に全国「観光百選」に選ばれているが、硫黄分を多く含み、溶けていた硫化水素ガスによる強いにおいが、温泉のことがわからないスキー客には好まれなかった。地元もスキーブームに便乗して、強い湯の香に示されるような蔵王温泉の特色を顧みず、いちばん大事な温泉をおろそかにしてきたのではないかと。しかし、現在では自然湧出の強酸性泉で湯の香も湯の色も

個性がある蔵王は、「本物の温泉」として見直されてきている。

地元の取り組みとしては、メインの温泉街整備に努めてきたが、まだ小路の整備などが必要である。スキー場のリフトも自然観察のための周辺散策に活用できる。ただ、今日の観光客のニーズは多岐にわたるため、蔵王温泉にふさわしい対応を考えていきたい。

5 山（の信仰）からとらえ返した蔵王温泉

パネリストの森繁哉氏からは、温泉は一つの庶民の文化として考えられ、東北の温泉地を見てきたことを蔵王温泉につなげてみたいとして、東北学のフィールドからいくつかの視点が提起された。

蔵王温泉は高い山にあるというのが、一つの特徴である。山ではあるが、眼下に山形市内が見渡せるように「身の丈の山」、すなわち比較的身近な山として観念されてきた。これに対して、深山にあたるのが月山のような山である。同じ山岳信仰の対象になりながら、修験道が盛んになって吉野から蔵王権現を勧進した蔵王は、「人忘れじの山」と詠まれた、生活信仰の山である。

山というのは、里に暮らす人間の私有性（制）が及ばない地点に存在している。そうでありつつ、蔵王は山形市民には大事な山であった。そうした「中間地帯にある山に温泉が存在」している。ここに蔵王温泉の意味が込められている。蔵王温泉は山を背にした文化を持ち、中間地帯にあって湯治場として栄えてきた。

そうした位置から蔵王温泉を考えると、蔵王だけでなくその下に広がる滝山地区と呼ばれる豊かな里山地域を含めて、土地の魅力や可能性を引き出していくことが望ましい。

6 蔵王温泉の特色を生かした活性化へ

各パネリストの報告や提起を受けて、会場

からの発言を含む論議がなされた。

蔵王温泉はかつて「子どもの湯」と呼ばれて夏型だった温泉場から、スキー客中心となって冬型に転じ、今日では温泉という原点に立ち戻り、四季を通じた通年型の高原の温泉リゾート、温泉保養地としての価値を再認識しつつある。

通例の公共露天風呂とは異なり、自然湧出している泉源地帯の溪流につくられた蔵王温泉大露天風呂では、新鮮な源泉の醍醐味と野趣を利用者が実感できる。源泉の特色を活かすことでは、レジオネラ属菌をものともしない殺菌力ある強酸性泉のすばらしさと、併せて硫黄泉でもあるその美肌作用をとくに女性客にアピールし、「美人づくりの湯」を提唱している。

地元蔵王温泉関係者は、「本物の温泉に初めて入った気がする」という利用者の感動をどのように広く知らせていくことができるかを考え始めている。他の温泉地視察から学んだ黒川温泉では、地元小国杉材を使った湯めぐり手形で評判になり、山形県の小野川温泉ではおみやげとしても愛される独楽を湯めぐり手形に使っている。蔵王温泉では蔵王にふさわしく、入浴シール3枚を付けた湯めぐりこけしを木地で利用者に購入してもらい、後に絵入れ体験でマイこけしが出来上がる。温泉地おみやげプラス参加体験型の取り組みである。

じつは、蔵王温泉では地元有志が10年も前に「湯の町ルネサンス計画」を作成していた。山形市の協力が不可欠であった計画はいまだ実現していないが、温泉街の歩道拡張にはつながった。このことに関連して、群馬県草津町では町を挙げて「泉質主義」を掲げ、草津観光立町条例を制定していることを評価して、山形市とともに蔵王温泉が新たな計画的な温泉地づくりの取り組みをはかる必要性が指摘された。と同時に、温泉街の宿や店を継ぐ後継者・人材の問題も指摘され、「格差が広がっているのではないか」という指摘も

なされた。

パネリストの森繁哉氏からは、「温泉場には非日常の装置が埋め込まれている」として、「それにふさわしいきめこまかい演出を五感全体で引きつけて、温泉街に意図的にはかかっていく」重要性が提起された。森氏は東北芸術工科大学による芸術や文化を通じて東北地方、各地域を元気にしていこうという「東北ルネサンス・プロジェクト」の一環として取り組んでいる山形県肘折温泉を具体例に挙げている。

それは温泉地の日常生活の中にアートを導入する“温泉地まるごと美術館に”をめざす地域プロジェクトである。そのことが温泉地のグレードを高めることにつながる。既存の価値観にもとづいた取り組みだけでは、若い世代を惹きつけることはできないことを示すものでもあった。

このように温泉地ならではの場の特性と、蔵王の山の信仰に支えられた歴史文化など、蔵王温泉の特色を発揮した、個性ある温泉地づくりが大切であることが提起された。

会場からも発言がなされた。山村順次会長からは、蔵王温泉は草津温泉と温泉の特色が似ているが、草津は江戸時代から温泉番付トップの人気を誇り、蔵王は小結クラスだった。その蔵王温泉の潜在力、地域の魅力を温泉街や地域めぐりで再認識してもらう必要がある。そのためにも、スケールが正しいマップの作成や地元ガイドの育成などが求められる。

る、という提案があった。

温泉資源の問題が大きく問われる今日にあって、蔵王温泉は毎分湧出量が5,700ℓ、実際には未利用源泉を含めると1万ℓ近いという豊かな温泉湯量を守っている。しかも、それはすべて希少な自然湧出泉である。大深度掘削と動力揚湯泉が主流となった今日、温泉資源そのものの代え難いすばらしさを基本にすえ、もっと温泉利用者に訴えかけていく必要がある。

そして、蔵王温泉には泉源を見守ってきた酢川神社の下に上湯・下湯・川原湯という3つの伝統的な泉源共同湯が保たれ、共同湯を結ぶように温泉街が形成されている。周辺の高原リゾート的なハードやソフトとともに、核となる温泉街の情緒や景観を保全整備して、温泉場らしい安らぎと癒しの滞在空間を提供していくことが望ましい。受け容れる旅館だけでなく、15軒ほどの民宿組合も「懐かしい日本」の姿を残し、もてなしていこうとしている。

蔵王温泉の高湯通りに建つ南無阿弥陀仏碑には、江戸時代の1850（嘉永2）年の年号とともに「一切衆生平等利益」と刻まれている。山の信仰と温泉の恵みへの感謝という文化的背景をもって育まれてきた蔵王温泉が、自然環境や温泉街とともにトータルな温泉地の総合力を発揮することこそ活性化の王道ではないかと考えられる。

（文責・石川理夫）

書評①

日本温泉協会編：『温泉 歴史と未来』

企画 / 発行 (社) 日本温泉協会 67 頁 2007 年 2 月

3,000 円 (頒価)

本書は、(社) 日本温泉協会が 2006 年 2 月に日本宝くじ協会の助成を得て発行された『温泉 自然と文化』の続編というべきものである。本の体裁は大型の A4 版で、ハードカバーの表紙は緑色の地に伊香保温泉の名所一覧の絵図が載った豪華本である。

本書の構成は、第 1 章：温泉を活かした地域振興 (山村順次氏執筆)、第 2 章：温泉資源 (大山正雄氏)、第 3 章：温泉をよりよく利用するために (甘露寺泰雄・細谷昇・布山裕一各氏)、第 4 章：温泉と健康 (中村昭・前田眞治両氏)、第 5 章：21 世紀の温泉地のあり方 (綿抜邦彦氏) の各章に分けられ、前著の内容をさらに発展させ、また、新たに温泉と健康に関する内容等が盛り込まれており、充実した内容になっている。全体として写真や図表が豊富で、すべてカラーであるので、ざっと眺めるだけでも楽しい。しかし、内容は温泉の歴史・文化や温泉地学・温泉工学・温泉医学など広範囲にわたっているので、すべて理解するのは簡単ではないかもしれない。

第 1 章では、戦後の温泉利用客の志向の変化や町並みの整備の実態が、長野県鹿教湯 (かけゆ) 温泉や群馬県草津温泉、千葉県温泉地について具体的な資料に基づいて書かれている。また、海外ではオーストリアのホフガスタイン温泉保養地や中国の龍門湯温泉の発展の事例が紹介されている。

第 2 章では、近年における自然湧出泉と動力泉の比率の変化や温泉資源の有限性につ

いて、神奈川県湯河原温泉や箱根温泉などを例に、やや専門的な解説を行なっている。

第 3 章では、まず、温泉分析書の見方や温泉浴槽の管理について、分かりやすく解説している。温泉分析書はどの温泉にも掲示されているが、一般には意外に理解されていないようなので、温泉関係者にとっても大いに参考になろう。次に、温泉地における集中管理の必要性とその問題点について述べられ、最後に温泉に関する表示の項では、2005 年 2 月の温泉法施行規則改正とその問題点、日本温泉協会の温泉表示に関する取り組みについて述べられている。

第 4 章では、古代から近代に至る温泉医学の歴史を西洋と日本に分けて略述し、次に、様々な入浴法や温泉地の気候学について、さらに温泉の適応症や禁忌症について医師の立場から概説している。

第 5 章では、21 世紀の温泉のあり方について、地球環境問題や健康増進との関連で、ハンガリーの温泉地等を例に将来の展望が述べられている。

本書は、前著の『温泉 自然と文化』を併せて読むことが望ましいが、本書単独でも十分読む価値がある。入手方法は、一般の書店では販売していないので、(社) 日本温泉協会に問い合わせるとよい。なお、前著の書評が浦達雄氏により「温泉地域研究」(第 6 号、66 頁、2006 年) に掲載されているので参照されたい。 (長島秀行)

松田忠徳著：『江戸の温泉学』

新潮選書 256頁 2007年5月

1,200円（本体）

読書も書評も気持ち良く後味のいいものでありたい。しかし、読むほどに内容の誤りや問題点、自己顕示欲ゆえの執筆意図までが露わになってきて、本を放り投げたくなるときがある。書評の使命上それは止めるが、これまでの“温泉教授”本同様に、本書は後者の部類に属する。湯治文化を日本固有と決めつける誤謬からの説教も相変わらずだ。

本書は札幌国際大学教授の著者が、2005年8月から2006年8月まで『週刊新潮』に連載した「江戸温泉物語」を加筆修正して本にしたものである。したがって、江戸の温泉よもやま話的内容から見ても、学術風を装った本タイトルより原題が似つかわしい。温泉関係者には、おなじみ江戸時代の温泉学者や文献をだらだら引用した記述を、週刊誌読者は読み飛ばしていたことだろう。

じつは元連載自体が、2003年から今日まで月刊誌『旅行読売』に「日本温泉物語」の題で連載中のものと内容の多くがほぼ同じである。江戸時代関連だけ切り取ったパッチワークである。たとえば、本書1・2章にあたる2005年8月からの熱海温泉と徳川家康、将軍家と大名の湯治等の記述は、同年7・8月の『旅行読売』連載「大名の湯治（上・下）

家康をも魅了した熱海の湯…」の横流しである。一筆で三度稿料を得るとは、出版社もなめられたものである。

本書を読むと、二重のデ・ジャヴュ（既視感）に襲われる。一つは「日本温泉物語」とのダブリであり、もう一つは、本書の記述内容も前後でくどくどとダブっている。

さらに、本書の基本構成となる江戸の温泉学者・文献の記述展開自体、戦前の温泉学者・西川義方らがすでに紹介したラインアップのパッチワークではないか。西川義方著『温泉

と健康』（1932年刊）で言えば、貝原益軒・河合章堯・香川修徳・原雙桂・柘植龍洲・宇田川榕菴・宇津木昆台・三宅意安らのラインアップで詳しく文献紹介と湯治との関連まで解説しており、本書はそれを利用するだけで、それ以上の知見は述べられていない。

著者は、戦前の温泉学者・西川や藤浪剛一、畑違いの学者・著作なら引用を明記しても、帯にうたう「日本随一の“温泉教授”」の看板が傷つかないどころか、一般読者に“箔が付いて見える”と思っているらしい。しかし、西川や藤浪の何番煎じ以外にも、本書の14年前に、八岩まどかが『温泉と日本人』（青弓社、1993）第3・4章中「古方医学への回帰」「江戸のプラグマティストたち」「十六年かけた化学分析」等で江戸の温泉医学から柘植龍洲の温泉ビデ図まで詳細に論述したことや、年刊の平野富雄著『箱根二十湯』（かなしんブックス、1994）で同じく宇田川榕菴の『舎密開宗』、鉱泉と温泉の関係まで言及していることと同一内容が多く含まれる。ところが、珍しく巻末にこれ見よがしに列挙した参考文献一覧で、こうした現役の温泉学者・研究者の著述は一切無視するのも、“温泉教授”の真骨頂か。

本書が、温泉番付東大関、江戸の湯治文化に不可欠な草津温泉を取り上げていないのもおかしい。熱海・城崎以外の温泉紀行、江戸の秘湯ブームや豊かな温泉文化にも言及がない。そもそも、惣湯はじめ共同湯や湯治を育んだ江戸の前史にふれず、庶民が温泉に関わる社会史の視点がなく、江戸の温泉“学”でもなかろう。江戸は温泉文化の一爛熟期だが、帯の「温泉文化の起源と真髄は、江戸にあり」は、起源、真髄共に明白な誤りである。（石川理夫）

学会記事

●日本温泉地域学会第10回研究発表大会

来る11月11日(日)・12日(月)の両日、日本温泉地域学会第10回研究発表大会を長野県山田温泉で開催します。下記のようなスケジュールで実施しますので、多くの会員の参加を期待します。なお、長野市開発公社経営の松代温泉「国民宿舎松代荘」では、学会終了後、会員限定の特別宿泊観光プランを提供して下さることになりましたので、ご案内いたします。

日本温泉地域学会第10回研究発表大会スケジュール

開催温泉地：長野県高山村山田温泉

協賛：高山村

後援：信州高山温泉郷観光協会・長野県温泉協会・高山村商工会・信濃毎日新聞社・須坂新聞社・須高ケーブルテレビ

開催日：平成19年11月11日(日)～12日(月)

発表会場：高山村「ちゃおるホール」 TEL.026-242-1200

宿泊施設：山田温泉「風景館」 TEL.026-242-2611

懇親会場：同上 11月11日(日) 19:00～20:30

視察会集合：JR長野駅新幹線口 11月11日(日) 12:10

受付：11月11日(日) 17:30～18:30 「風景館」ロビー

11月12日(月) 8:00～ 「ちゃおるホール」ロビー

参加費：一般会員・賛助会員2,000円、学生会員1,000円、その他1,000円(資料代)

懇親会費：会費5,000円(学生3,000円)。学会で「風景館」宿泊を予約した場合は、懇親会費は宿泊費に含まれます。

宿泊費：学会指定「風景館」を予約した場合、懇親会費・朝食代込み、2名1室料金は1万2,000円です。

研究発表大会に参加される会員は、以下の参加形態によって郵便振替で学会事務局宛に相当金額を10月31日必着で前納してください。振込によって学会参加申し込みとします。

なお、本年度年会費(賛助会員：3万円、一般会員：4,000円、学生会員2,000円)未納の方は、以下の金額にプラスして送金してください。

風景館宿泊+学会参加：12,000 + 2,000 = 14,000円

懇親会参加+学会参加：5,000 + 2,000 = 7,000円(学生：4,000円)

視察会・学会参加のみ：2,000円(学生：1,000円)

振替口座番号：00190-6-462149

加入者名：日本温泉地域学会

日程

- 11月11日(日) 12:10～17:30 視察会(無料)
JR長野駅新幹線口～高山村ワインぶどう畑～一茶館・りんご狩り～you遊ランド
～地力増進施設～山田牧場～山田温泉「風景館」(宿泊・懇親会場)
17:30～19:00 休憩
19:00～20:30 懇親会
- 11月12日(月) 8:40～9:00 高山村村長挨拶
9:00～11:20 自由論題研究発表
11:30～12:30 昼休み
12:30～13:20 基調講演(温泉地から健康保養地へ)
13:30～15:10 シンポジウム(健康保養地づくりの条件・健康保養地にける統合医療の応用)
15:30 長野駅行き送迎バス

交通案内 : 長野駅から長野電鉄で須坂駅下車。山田温泉行きバスで約40分です。

研究発表大会プログラム

11月12日(日)

- 8:40～9:00 高山村 久保田勝士村長挨拶
自由論題 発表時間:20分(発表15分、質疑5分)
座長:達雄(大阪観光大)・山村順次(城西国際大)
- 9:00～9:20 新田時也(東海大):伊豆修善寺温泉の「食」を活用した観光戦略について
9:20～9:40 金井雅之(山形大):温泉地におけるまちづくりへの取り組み状況
—温泉地域の現状と取り組みについての学術調査(2)—
- 9:40～10:00 徳永昭行(長野市開発公社):信州松代温泉の地域的特性
10:00～10:20 休憩
10:20～10:40 石川理夫(温泉評論家)長野県の大湯について—山田温泉を中心として—
10:40～11:00 長島秀行(東京理科大)・布施正美(布施医院):温泉水の簡易測定
(その2)—群馬県草津温泉の場合—
- 11:00～11:20 于航(千葉大大学院):近年の中国における温泉地開発
11:20～11:30 記念写真撮影
11:30～12:30 昼休み

基調講演

12:30～13:20 阿岸祐幸(北海道大名譽教授):温泉地から健康保養地へ
シンポジウム

「健康保養地づくりと統合医療の応用」

- 13:30～15:10 高山村 久保田勝士村長挨拶
コーディネーター:濱田真之(地熱社長)
パネリスト : 阿岸祐幸(北海道大名譽教授)
パネリスト : 久保田勝士(高山村村長)
" : 飯島裕一(信濃毎日新聞社)
" : 市原実(山梨県立大)

- “信玄の隠し湯松代温泉”の「国民宿舎松代荘」（長野市開発公社経営）で1泊し、周辺の観光ポイントを巡る旅のご案内。学会会場から松代荘マイクロバスで送迎し、「湯めぐりツアー」を催します。参加希望者は下記申し込み先へ直接電話をしてください。

その際、必ず「日本温泉地域学会会員」である旨を申し添えてください。

スケジュール：

11月12日（月）

学会会場～保科温泉～松代温泉源泉見学～松代荘宿泊・懇親会～夜の湯めぐりツアー
（松代大室まきばの湯）～松代荘

11月13日（火）

松代荘9:00発～山本勘助墓所～妻女山～典厩寺（一部有料）～海津城～長野駅12:00着
参加費（懇親会費込み宿泊費・観光費）：1人9,000円

申し込み：松代温泉「国民宿舎松代荘」TEL.026-278-2596

先着21名で締め切ります。

- 日本温泉地域学会第9回研究発表大会・総会は、平成19年7月2日（日）・3日（月）の両日、山形県山形市蔵王温泉で開催されました。蔵王温泉旅館組合協賛、山形県温泉協会後援のもとに多数の会員が集まり、盛会裏に終了しました。まず、さくらんぼ狩りを楽しんだ後、蔵王エコーラインのお釜を見学する予定でしたが、あいにくの雨で中止となり、残念でした。その代わりに、蔵王温泉で有名な溪谷露天風呂に浸かり、一同心身の疲れを癒しました。蔵王温泉旧市街の源泉・共同浴場・町並み整備の現状を見学し、歴史のある温泉場の特性を実感しました。懇親会には、山形市長・長澤好光山形県観光物産協会専務理事も参加され、会員と親しく懇談しました。視察会・懇親会・研究発表会を通じて、受け入れに特段のご尽力いただいた蔵王温泉旅館組合つるやの堀是治社長、山形県温泉協会岡崎傳三郎会長、同吉野妙子専務理事に御礼を申し上げます。
- 日本温泉地域学会第11回研究発表大会・総会は、別府温泉郷で平成20年5月中～下旬に開催する予定で交渉を進めています。詳細は、学会誌第10号でお知らせします。
- 学会誌「温泉地域研究」第10号の論文・研究ノート・資料・書評・温泉地情報などを募集します。会員名簿の17～20頁の投稿規程を順守のうえ、平成20年2月末日必着で学会事務局へ投稿してください。

日本温泉地域学会入会申込書

平成 年 月 日

会員種別	一般	学生	賛助 () 口
ふりがな 氏 名			
印 (満 歳) 男・女			
団体名・商号 代表者名			
印			
勤務・所属先名称			
所在地	〒		
	電話	()	
	FAX	()	
	E-mail :		
現住所	〒		
	電話	()	
	FAX	()	
	E-mail :		
研究・関心分野			
メールでの対応	可能	不可能	
研究会誌送付先	勤務・所属先	現住所	

* 学生会員は学生証の写しを同封してください。

事務局受付日： 年 月 日

申込書送付先

〒 299-2862 千葉県鴨川市太海 1717

城西国際大学観光学部山村研究室内

日本温泉地域学会事務局

電話：04 (7098) 2839

FAX：04 (7098) 2805

郵便振替：口座番号 00190-6-462149 加入者名：日本温泉地域学会

日本温泉地域学会役員

- 会 長 山村 順次 (城西国際大学)
副 会 長 石川 理夫 (温泉評論家)
理 事 長 濱田 眞之 (地熱)
常務理事 長島 秀行 (東京理科大学)
〃 辻内和七郎 (箱根温泉供給)
理 事 池永 正人 (長崎国際大学) 市原 実 (山梨県立大学)
浦 達雄 (大阪観光大学) 甘露寺泰雄 (中央温泉研究所)
菊地 莊悦 (東鳴子温泉まるみや) 小林 浩 (千葉県庁)
首藤 勝次 (長湯温泉大丸旅館) 只野 公康 (妙見温泉どさんこ)
中澤 敬 (草津町長) 布山 裕一 (日本温泉協会)
古田 靖志 (岐阜県先端科学技術体験センター)
松崎 郁洋 (黒川温泉ふもと旅館) 森 繁哉 (東北芸術工科大学)
八岩まどか (温泉評論家) 由佐 悠紀 (京都大学名誉教授)
監 事 中山 昭則 (別府大学) 谷口 清和 (あおもり温泉地活性化研究会)
幹 事 君島 俊克 (佼成学園) 小堀 貴亮 (駿台トラベルホテル専門学校)
任期 : 2006 (平成18) 年5月29日 ~ 2009 (平成21) 年春季大会

温泉地域研究 第9号

2007年9月30日発行

編集・発行者 日本温泉地域学会

〒299-2862 千葉県鴨川市太海1717

城西国際大学観光学部山村研究室内

電話 04 (7098) 2839

FAX 04 (7098) 2805

振替 00190-6-462149

印刷所 株式会社 こくぼ

〒260-0843

千葉市中央区末広3-3-10

Journal of Studies on Spa Region

No.9
2007.9

contents

Articles

- The Effect of Management Efforts on the Improvement
of Accommodations Masayuki KANAI (1)
- The Establishment of the Community Bath "OHYU" Based on the Historical
Community Bath "SOYU" in Nozawa and Shibu Spas, Nagano Prefecture
..... Michio ISHIKAWA (11)
- The Significance of Regional Maintenance in Kannawa Spa, Beppu City
..... Akinori NAKAYAMA (23)
- The Development of Anbo Spa in Dalian, China Hang YU (31)

Research Note

- The Role of Balneotherapy in an Aging Society Takao OGUNI (41)
- Regional Changes in Spas in Kamakura City, Part II Kazuko SHINDO (47)

Lecture

- Nature and Hot Spring in Zao Area Denzaburo OKAZAKI (53)

Symposium

- Activitation of Zao Spa (55)

Book Reviews

- Japan Spa Association ed. 『Hot Spring Past and Future』
..... Hideyuki NAGASHIMA (59)
- Tadanori MATSUDA 『Spas in Edo Era』 Michio ISHIKAWA (60)

- Notes and News (61)

Regional Science Association of Spa, Japan

c/o Department of Tourism, Josai International University, Kamogawa 299-2862, Japan